

高 等 学 校

学 習 指 導 事 例 集

高等学校における確かな学力の向上のために

平 成 16 年 3 月

山 口 県 教 育 委 員 会

は じ め に

平成15年4月から実施されている新しい高等学校学習指導要領は、学校週5日制の下で、各高等学校が特色ある教育を展開し、生徒に基礎・基本を確実に身に付けさせ、個性を生かし、豊かな人間性や自ら学び自ら考える力などの「生きる力」を培うことを基本的なねらいとしています。

各高等学校におきましては、学校や生徒の実態等を踏まえ、創意工夫を生かした教育課程を編成し、学習指導要領のねらいの実現に向けて、積極的な取り組みが進められているところです。

県教育委員会といたしましても、こうした各高等学校の取り組みを支援する観点から、「スーパーサイエンスハイスクール事業」や「学力向上フロンティアハイスクール事業」「総合的な学習の時間推進事業」などの国の委嘱事業を含め、様々な施策に取り組んでおります。

その取り組みの一つとして、平成14年9月に、「高等学校における『確かな学力』の向上について」を検討課題とする「学校問題検討協議会」を設置し、学習指導要領の趣旨の徹底や各高等学校の実態を踏まえた取り組みの参考となる実践事例の研究を進めてきました。その検討課題として、次の3つの具体的テーマを設定しております。

- ①「学ぶ意欲を高めるための取り組み」
- ②「一人ひとりに応じた指導の充実のための取り組み」
- ③「これからの評価の在り方」

このうち、「これからの評価の在り方」に関する検討協議の成果については、平成15年3月の中間報告を基に、「高等学校学習評価事例集」を作成・配布し、評価の改善に資する資料として各高等学校において活用されているところです。

本年度は、学校問題検討協議会の最終報告を基に、「学ぶ意欲を高めるための取り組み」「一人ひとりに応じた指導の充実のための取り組み」について「学習指導事例集」を作成・配布し、県内の各高等学校の取り組みを支援することとしました。

各高等学校においては、本冊子を参考にして、「確かな学力」をはぐくむとともに、指導の改善についての研究を進められることを期待します。

最後に、本冊子の作成に当たり、多大な御協力をいただきました学校問題検討協議会の会長を初めとする委員の方々に対して心から感謝の意を表します。

平成16年3月

山口県教育庁指導課長 棟 久 郁 夫

目 次

第1章 学ぶ意欲を高めるために

1 学ぶ意欲についての基本的な考え方	----- P 1
2 学ぶ意欲を高める指導の実際	----- 3
3 学ぶ意欲を高めるための評価の工夫	----- 5

第2章 一人ひとりに応じた指導の充実のために

1 一人ひとりに応じた指導の基本的な考え方	----- 7
2 一人ひとりに応じた指導の実際	----- 9
3 生徒の学習状況の評価の工夫改善	----- 11

第3章 実践事例

1 学ぶ意欲を高めるための取組み	
①「スパイラルプラン」による学ぶ意欲の向上について	----- 13
②学校間連携による学ぶ意欲の向上	----- 21
③高大連携教育による学ぶ意欲の向上	----- 27
④職業人との座談会による職業意識の向上	----- 35
⑤学校行事と教科指導のリンク	----- 39
⑥個に応じた教育システムの導入	----- 47
2 一人ひとりに応じた指導の充実のための取組み	
①ワークシートを用いた一人ひとりの学力を伸ばす指導(国語)	----- 54
②課題追究学習における一人ひとりに応じた指導(公民)	----- 62
③「発展的な学習」で生徒の学力をより伸ばす指導(数学)	----- 70
④「課題研究」において展開する発展的な学習と補充的な学習(理科)	-- 77
⑤ティーム・ティーチング(日本人教師)による少人数指導(外国語)	-- 86

第1章 学ぶ意欲を高めるために

1 学ぶ意欲についての基本的な考え方

(1) 学ぶ意欲について

平成14年11月に高等学校3年生を対象として実施された高等学校教育課程実施状況調査のアンケートでは、「勉強が好きだ」という項目について、「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」などの否定的な回答が7割を超え、また、「学校以外での勉強はほとんどしない」とした生徒が41%を占め、勉強離れは深刻な状況であることを、文部科学省も指摘している。

今日の厳しい経済情勢や産業及び雇用の構造的変化等に伴って、将来の生活や社会人としての生き方を描くことが、かつてなく難しくなっている。このような状況にお

いて、社会人として近い将来自立する段階にある生徒を抱える高等学校では、これからの変化の激しい社会を生き抜くために、生涯にわたって自ら学び続ける力を身に付けさせることが強く求められている。

平成8年の中央教育審議会答申では、はぐくむべき「生きる力」の一つとして、「いかに社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」が育成すべき喫緊の課題として指摘されて

いる。文部科学省は、「生きる力」を形成する知的側面の能力を「確かな学力」としているが、「学ぶ意欲」は、この中の重要な要素として図1のようにあげられている。

「学ぶ意欲」については様々な考え方があるが、基本的には、「もっと知りたい」「自らを高めたい」といった知的な好奇心やそれを母体とした有能さへの欲求から生まれてくるといわれている。図2は、図1を、八角錐と考えると立体化し、「確かな学力」の要素の一つである「学ぶ意欲」をとらえて表現したものである。

これまでの「学ぶ意欲」のとらえ方は、知識・技能を獲得するための単なる動機づけであるとされていた。しかし、それだけでなく、生涯にわたって主体

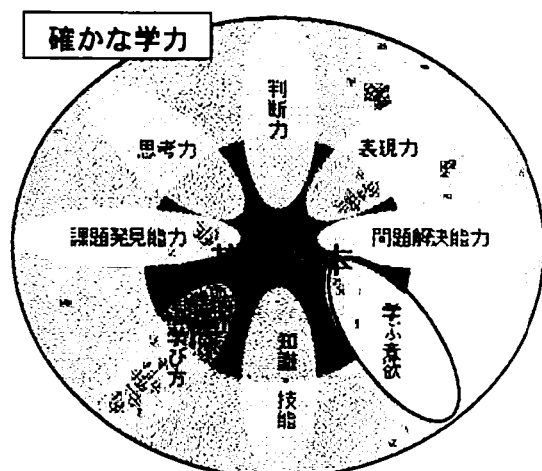


図1 確かな学力の構成要素

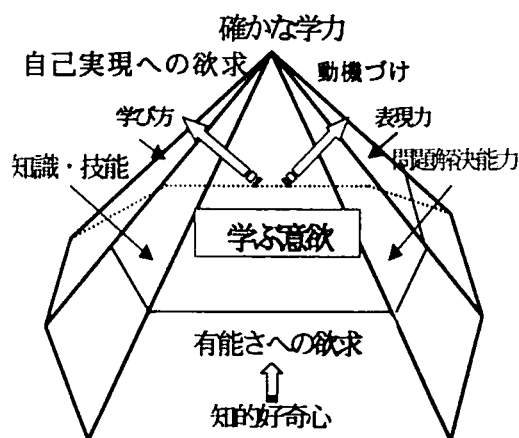


図2 学ぶ意欲の構造(概略)

的に学び続け、「自分はどう生きたい」「豊かな一生を送るために自分は、どうしたい」といった、自己実現をめざすことを意識させるものであるという考え方が重視されはじめています。つまり、「学ぶ意欲」とは動機づけのみならず、自己実現への欲求でもあるという考え方が一般化しつつある。

(2) 学ぶ意欲を高めるための指導の改善と要点

学ぶ意欲の二つの側面である動機づけの側面と自己実現への欲求の側面をさらに分析してみたい。

まず、動機づけと学ぶ意欲については、賞や罰などの功利性の追求による外発的動機づけと、知的好奇心や興味によって課題の遂行自体を引き起こす内発的動機づけがある。このうち、内発的動機づけが、永続的な、学ぶ意欲を支える要因となるものである。この内発的動機づけによる、学ぶ意欲を高めるための指導改善のキーワードを示すと次の通りである。

- ① 自己決定感（自分が決めた内容だという気持ち）の重視
自らが設定した課題や内容を、自らの責任をもって探究させる。
- ② 有用感（そのことを学ぶ意義）の徹底
自己実現をはじめとした学習のねらいや目的を、生徒に明示する。
- ③ 有能感（やればできるんだという気持ち）の保持の工夫
生徒の成功体験を重視し、やればできるという気持ちを持続させる。
- ④ 他者受容感（周囲に受け入れられているという気持ち）の育成のための工夫
生徒の学習状況を評価などを通してしっかり受けとめ、学習活動を支援していく。

次に、自己実現への欲求の側面について述べると、生涯にわたって主体的に学び続

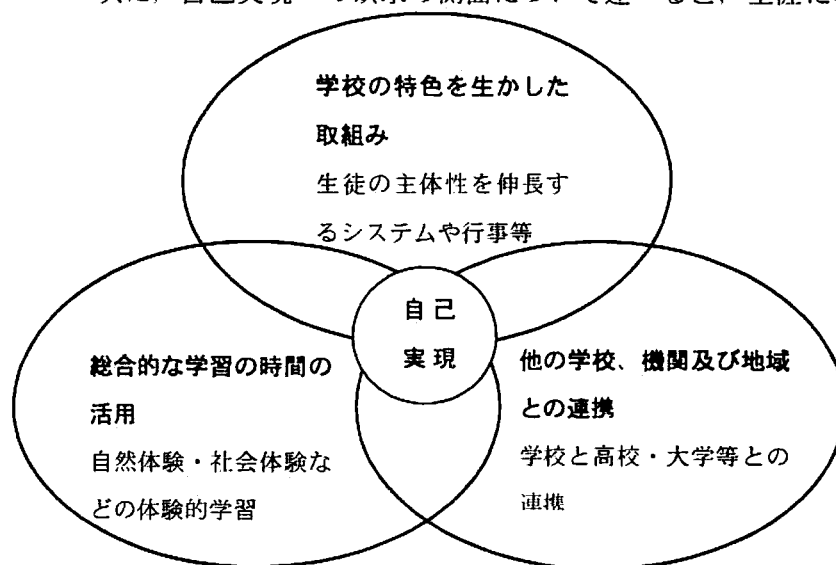


図3 学ぶ意欲を高めるための取組みの概念

ける力を身に付けさせるためには、実社会とのかかわりという観点から、社会の仕組みと個人とのかかわりに関する理解を深めさせ、勤労観・職業観を育成することが重要である。

そのために求められる改善については、様々な取組みが考えられるが、その内容を示すと、おおまか

に図3のように分類される。

これらは、互いに関連しているので、バランスをとりながら進めることが必要である。また、学ぶ意欲を高めるためには、教職員個々の取組みはもちろん、学校全体として取り組むことが重要である。

なかでも、自らの人生観や価値観を形成し、人間や社会のあるべき姿について考えを深める時期である生徒に対し、総合的な学習の時間などを通して人間の在り方に深く根ざした人間としての生き方に関する教育を推進することがとりわけ重要である。つまり、生徒一人ひとりに、人間の在り方を問い、生き方を考えさせるなどキャリア教育の基盤となる取組みが今後ますます必要となる。生き方を選び取っていくための判断基準は、様々な体験や思索の機会を通して自らの考えを深めることにより形成されるものである。そのために体験的学習や他機関等との連携、そして各学校の特色に基づいた教育を推進することで生徒が自ら考え、自覚を深めて自己実現に資するように指導の計画や方法を工夫することが必要であると考ええる。

そうした取組みを支えるためにも、ガイダンス・カウンセリング体制を確立し、また自己実現の前提としての「確かな学力」の基礎・基本の徹底が望まれるところである。

2 学ぶ意欲を高める指導の実践

(1)「総合的な学習の時間」の活用について

平成15年10月に示された中央教育審議会答申「初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について」では、「総合的な学習の時間の一層の充実」が示されるとともに、総合的な学習の時間等を通じて学びへの動機付けを図ることの重要性を指摘している。

総合的な学習の時間は、学び方、ものの考え方及び問題解決能力を育てることがねらいである。加えて、内容や目標は特に定められていないことなどから、生徒の興味・関心に基づいた、多様な課題の設定、追究の方向性、学習の深化などが可能となっている。

この時間において、実社会とのかかわりという観点から、社会の仕組みと個人のかかわりに関する理解を深めさせ、勤労観・職業観を育成し、在り方生き方を考えさせることは学ぶ意欲を高める上で有効な手だてであると考ええる。指導事例集にある実践事例の全校生徒が参加する模擬デパートにおける販売実習などは、生徒のアイデアや意思決定を尊重し、一つの「利益を上げる」という課題に取り組んだ例であるが、実践的知識や体験学習の有効性も示しているといえよう。

ここで、総合的な学習の時間によって学ぶ意欲を高めるために留意すべき事項を示すと以下のとおりである。

- 生徒が自己の課題を設定する際、自分とのかかわりを見すえて行うよう支援する。
- キャリア教育の視点から、追究する課題が自己の将来と結びつくよう支援する。

(2) 他の学校、機関及び地域との連携について

平成15年に日本PTA全国協議会が実施した学校教育改革についての保護者の意識調査では、総合的な学習の時間の充実のために必要なこととして、「地域人材や専門家などの人材の確保」が1番目にあがっている(47.3%)。

インターンシップや就業体験については、従来各学校において取り組まれてきたが、教科学習における協力は比較的少なく、学校が提供できる知識の範囲には限りがあり、その範囲を広げるためにも、他の学校、大学及び地域との連携が重要となってくる。他校に出向いて、自分の選択した科目を履修するのは、自分の将来(進学及び就職)を考える必要性に基づく取り組みである。また、卒業生を人材バンクに登録してその話を聞き、身近な先輩の談話を聴くことができる。これをもとに学びへの動機づけがなされるのである。

大学の出前授業を通して、刺激を受けることも多く、大学で学ぶ具体的な様子がわかり、その後の教科学習にも意欲的に取り組むようになる。例えば、指導事例集の高大連携教育の事例に示されているように、巡検先の鉱山に入って、坑道を進みながらの鉱脈や断層などについての学習は、迫力があり、充実感・満足感も大きい。

他の学校、機関及び地域との連携について、ここでは、以下のことに配慮したい。

- 連携する相手側に、ねらいや目標を伝える。
- 今生徒にとって大切なことは何かを考えさせるようにする。

(3) 学校の特色を生かした取り組みについて

平成10年の教育課程審議会答申における提言の一つに、「各学校が創意工夫を生かし特色ある教育、特色ある学校づくりを進めること」があげられている。

以下の例は、それぞれの学校における生徒の実態に応じた教育課程を編成するものである。

自分の所属する科の専門性をより深く学習するための科目から大学進学等を支援するための科目まで、生徒が目的を持って選択しやすい科目を設けた事例(「総合選択制」)がその一つである。このシステムは、所属する学科以外の学びたい科目の選択を可能とするもので、生徒の学ぶ意欲を維持するものである。

また、生徒個々の学力やつまづきの箇所を知り、それにあわせて指導方法や教材を工夫するなど一人ひとりに対応したきめ細かい指導を実施することで、基礎学力を定着させる「基礎学力診断システム及び回復講座」の事例では、わかる喜びや学習する楽しさを感じることができる可能性がうかがえる。

このように、柔軟な教育課程を編成することは、学ぶ意欲を高めることに大変有効である。また、学校の実態に応じて、基礎・基本を重視し、フィードバックした学習も取り入れるなど弾力的に授業を構成し、生徒にわかる喜びを味あわせ、成就感を味わわせることが必要である。学校の特色を生かした取り組みについて配慮すべき事項は次の通りである。

- 他校との差異ではなく、本当に必要なものを求めていく。
- 生徒が取り組んだときに充実感のあるものであること。

表1は、学ぶ意欲を高めるための各高校の取組みの一覧表である。

表1 学ぶ意欲を高めるための取組み事例

学 校	内 容
A高校	「スパイラルプラン」による学ぶ意欲の向上 (基礎学力診断システム及び回復講座)
B高校	学校間連携による学ぶ意欲の向上 (他校の教科科目を受講できる)
C高校	高大連携教育による学ぶ意欲の向上 (大学での体験授業や大学教官の出張講義)
D高校	職業人との座談会による職業意識の向上 (校内人材バンク)
E商業高校	学校行事と教科指導のリンク 全校生徒参加の販売実習を行う体験学習
F工業高校	個に応じた教育システムの導入 (総合選択制・学校設定科目の導入・進路別 クラス編成による選択履修)

3 学ぶ意欲を高めるための評価の工夫

これまで、評価は教師がするものと考えられてきたが、評価規準を教師と生徒の間で共有できれば、生徒の意欲を引き出せると考えられる。教師自身が決めるべきことであっても、事前に情報伝達をすることで、子どもの自己関与感が高まり、学ぶ意欲により影響が現れる。自分自身で決めて行うことや自分が関与した行動に対しては、責任感も高まると考える。これまで一方的に知識を伝授されてきた生徒にとって、評価をとおして教師と協議するということは、違和感を伴うことかもしれない。だが、到達できそうな目標(規準)を設定することは、学ぶ意欲を高めるための大きな誘因ともなるので、鋭意取り組んでいく必要がある。成功の鍵は、生徒の自己決定感を学習の様々な場面でいかに高めていくかにあるといえよう。

また、このため生徒が自分の学習活動を振り返ってみることは、学ぶ意欲を高めるために有効であると考えられる。自分がどれだけ苦労して調べた資料であるか、その時の学習状況はどうであったか。自分の予定していた目標の達成度はどうであったか。自分自身でモニタリングすることは、持続的な学ぶ意欲をもたらすものであるといえよう。学習を、生徒自身が振り返り、自分自身でチェックし、場合によっては軌道修正することを支援する必要がある。

学ぶ意欲に基づいた学習を継続させるためにも、生徒一人ひとりのよいところを見つけて賞賛することも重要である。ケアをしながら肯定的評価を行い、立てさせた目標の

遂行の質的度合いをみることが必要である。これからは、やればできるという有能感を育てるためにも、学ぶ意欲を支えるための評価に取り組んでいくことが求められる。

最後に、評価は生徒を受容するためのものとして、生徒自らが評価をとおして、周囲に受け入れられていると感じることができるようにすることにも留意する必要がある。その安心感も学ぶ意欲がさらに高まる要因となるからである。

4 参考文献

- ・「高等学校学習指導要領解説 総則編」 文部省 平成11年2月
- ・「初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について（答申）」 中央教育審議会 平成15年10月
- ・「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書～児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために～」
キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議 平成16年1月
- ・「自ら学ぶ意欲を育てる学習指導に関する研究」 山口県教育研修所研究紀要第131集 平成9年3月
- ・「評価から考える総合的な学習の時間」 鳴野道広（文部科学省視学官） 教育報道出版社
- ・「自ら学ぶ意欲を育む先生」 桜井茂男（筑波大学）

第2章 一人ひとりに応じた指導の充実のために

1 一人ひとりに応じた指導の基本的な考え方

(1) 確かな学力と一人ひとりに応じた指導

生徒は、学習の定着の度合い、興味・関心、生活経験の違いなどにより、一人ひとりに個人差があることは言うまでもない。しかし、一斉に指導する形態では、生徒一人ひとりの学習内容の定着に大きな差が生じてしまうことがある。このため、生徒が納得するまでじっくり考えさせたり、生徒の適性や能力にあわせてより充実した学びの広がりや深まりを究めさせたりする指導など、一人ひとりに応じたきめの細かい指導が必要になってくる。

右図は、新学習指導要領のねらいを模式的に示したものである。平成15年10月の中央教育審議会答申においても、こうした新学習指導要領のねらいの一層の実現に向けた具体的な方策が示され、「わかる授業」を行い、「生きる力」を知的側面からとらえた「確かな学力」を育成することが今後の重要な課題であることが指摘されている。

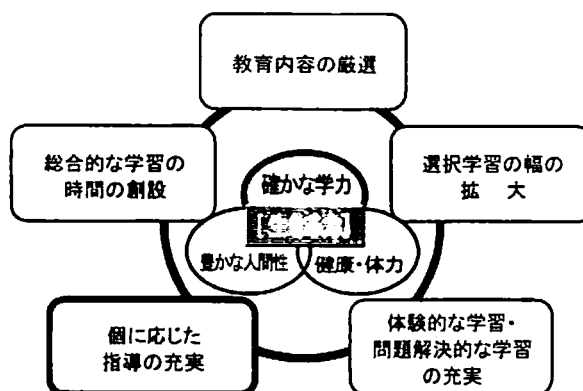


図1 新学習指導要領のねらい

一人ひとりに応じた指導は、これら5つの方策の一つにあげられている「個に応じた指導」にあたるもので、生徒が一人ひとり違い、それぞれの「よさ」を持っていることを認識し、それらを生徒個々の学習にプラスになるように指導していくこと、また、そのための指導のシステムづくりや、指導や評価方法の改善をも含めた教育活動全体ととらえている。したがって、高等学校においても各教科に属する科目、特別活動及び総合的な学習の時間のあらゆる場面でこうした指導の充実が図られなければならないこと、また、そのような取組みが図1に示した他の4つの方策と相互に補完しながら推進されなければならないと考える。

(2) 一人ひとりに応じた指導方法とその改善の要点

一人ひとりに応じた指導方法は、その目的、内容、形態等によってさまざまである。後述の各教科における指導事例との関連で大別してみると下図のような分類が考えられる。

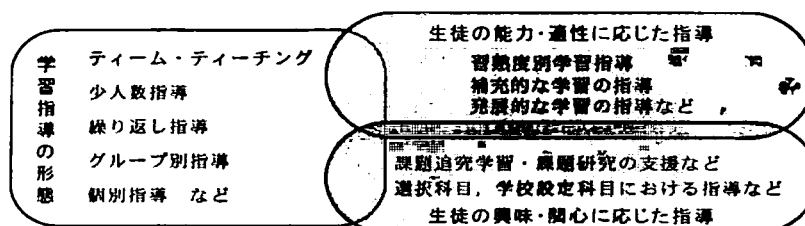


図2 指導の目的、形態等による指導方法の分類

これらの指導方法は、それぞれが単独で存在するのではなく、具体的な学習指導の場面において、重なり合いながら行われている。このため、どの指導方法が有効かという比較の問題ではなく、生徒の実態や学習の場面に応じて効果的な指導方法を柔軟かつ多様に導入することが重要である。

また、これらの指導をより充実させるためには、指導に生かす評価すなわち「指導と評価の一体化」が求められている。従って、学習の評価についても、生徒の学習成果のみを総括的にみる評価から転換し、学習の各場面における形成的評価を積み重ね、教師が学習の支援者として次の指導に生かすための評価を工夫していく必要がある。

これらのことを踏まえて、一人ひとりに応じた指導の改善の要点を示してみる。

① 診断的評価の徹底

一人ひとりの学習内容の習熟の程度、興味・関心の度合いなどの実態をしっかり把握する。

② 学習目的に応じた指導計画と評価計画の改善

学習のねらいや生徒の実態に応じた指導・評価計画を立て、指導と評価の方法を検討する。

③ 指導方法、指導体制の工夫

一人一人の興味・関心や特性に応じた学習課題や学習過程を設定し、ティーム・ティーチング、少人数指導、個別指導、習熟の程度に応じた弾力的な学級編成など、指導方法や指導体制を工夫する。

④ 目標を実現するための指導と評価の説明と改善の手だて

シラバス等を作成し、指導の目標（ねらい）と計画、評価の方法や観点等を生徒・保護者にあらかじめ明示するとともに、生徒の自己・相互評価、保護者の指導に対する考え方等も十分に反映させ、指導の改善に役立てる。

(3) 指導体制の工夫改善について

学校における指導体制の工夫改善を支援するため、国は、少人数指導、習熟度別指導を可能にする教職員定数の改善、学力向上アクションプラン等の諸施策を講じている（右図参照）。

しかし、生徒一人ひとりの特性を十分に理解し、そ

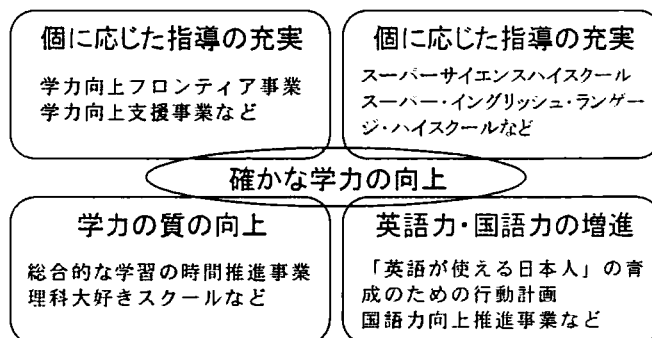


図3 学力向上アクションプラン

れに応じた指導方法や指導体制の工夫改善を有効に行うためには、学校が一体となってこれに取り組むことが必要である。もちろん学校は、立地、教職員の構成、施設・設備などにおいて様々に異なっており、それらに応じて最も効果的な方法を工夫し、組織体として総合的な力を発揮していくことが大切である。このため、教職員全体が共通理解の下に、協力して教育活動を進めていくとともに、教科担任制を原則としている高等学校においては、同一教科間はもちろん異教科間の教師の連携と協力が必要となってくる。

2 一人ひとりに応じた指導の実際

一人ひとりに応じた指導の充実を図るための留意すべき事項を主な指導方法ごとに検討してみたい。

(1) 学習指導の形態について

学習指導の形態としては、
ティーム・ティーチング、少
人数指導、繰り返し指導など
が考えられる。

右図は、平成15年7月に本
県で実施された「新学習指導
要領及び学校週5日制の実施
に関する調査結果」の一部で
ある。高等学校では、小・中
学校に比べ「学級を分割して

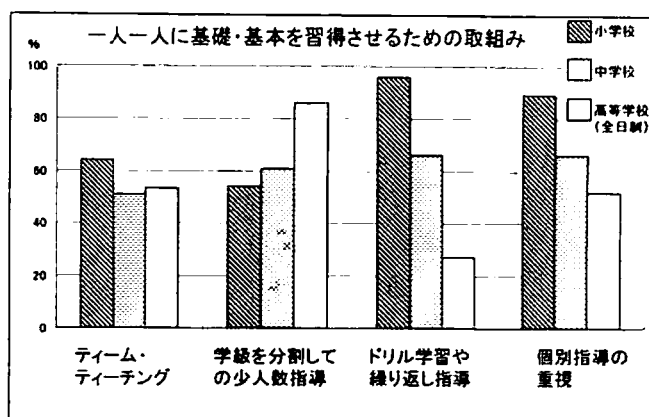


図3 新学習指導要領及び学校週5日制の実施
に関する調査結果(平成15年7月)

の少人数指導」の割合が高い反面、「ドリル学習や繰り返し指導」の割合が低い結果となっている。今後とも児童生徒の発達段階に応じて、これらの手法を適切に選択し、指導の各場面において柔軟かつ効果的に用いることが大切であろう。

また、学習集団別の指導として個別指導に着目すると、上述の調査結果では、小学校で9割、中学校でも7割弱の学校が個別指導の重視に取り組んでいるのに比べ、高等学校では、ほぼ半数である。授業内容が高度になり、学習量も増加することから、授業の進度に影響が出るなどの理由から、高等学校では学級を分割しての少人数指導が主となっていると考えられる。

(2) 生徒の能力・適性に応じた指導について

ア 習熟度別指導

学習内容の習熟の程度に応じた指導（以下、「習熟度別指導」とする。）とは、生徒一人ひとりに「学習成立」をはかるために行う指導で、診断的評価の結果、習熟度の違いが明らかになった学習集団に対し、知識の習得状況や理解の程度に応じてグループ別あるいは個別に手厚く指導を行うことである。実践形態としては、一斉指導を行った後に個別指導で習熟度の差を補正する「完全習得学習」と、あらかじめ生徒の到達度をもとに習熟度別グループを編成し学習させる「到達度別学習」などがあげられる。

習熟度別指導で特に留意すべき事項を示すと以下のとおりである。

- 生徒に優越感や劣等感を生じさせないよう、適切な指導を一人ひとりに行うこと。
- 学習集団を弾力的かつ適切な時期に適宜、編成し直すなど、生徒の学習意欲が低下しないための工夫・改善に努めること。
- 生徒、保護者に対して指導内容、方法、導入の理由等を事前に説明すること。

イ 発展的な学習の指導

発展的な学習とは、学習指導要領に示す内容（知識や技能のみならず、自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力などの資質や能力までを含めたもの）を身に付けている生徒に対して、この内容の理解をより深める学習を行ったり、さらに進んだ内容について学習を行ったりすることである。高等学校学習指導要領の総則では、各教科、科目及び特別活動の目標や内容の趣旨を逸脱したり生徒の加重負担になったりすることのない範囲において指導要領の内容に示していない事項を加えて指導することができる」と示している。

このため、各教科、科目において、今後、発展的な学習の指導が拡充されることとなるが、留意すべき事項や課題をあげれば次のとおりである。

- 生徒の理解や習熟の程度に応じた指導内容であるか。
- 知識や技能及び高度な内容のみを重視する指導に傾倒していないか。
- 生徒の興味・関心や意欲が発展的な学習の指導に生かされているか。
- 指導内容や評価について、発展的な学習を行わなかった生徒との関連をどうするか。

ウ 補充的な学習の指導

高等学校においても、すべての生徒が基礎・基本を確実に身に付けることが最重要課題であろう。このため、進度が遅れがちな生徒に対して、理解が不十分な内容をていねいに指導し、学習指導要領に示す基礎的・基本的な内容を確実に習得させることが必要である。

このような補充的な学習の指導は、基礎的・基本的な内容の確実な定着を図ることに重点があるため、現状の授業における基礎的・基本的な内容は何かを評価基準に基づいて検討することも重要である。

指導の配慮事項を示すと次のとおりである。

- 補充的な学習を行うことによって、生徒が自己の習熟の程度をより高めようとする意欲を持つようにすること。
- 補充的な学習による成果を生徒自身が認識できる評価の手だてを講じること。
- 補充的な学習の趣旨やねらいについて、生徒や保護者に十分な説明を行い、保護者の理解や協力が得られるようにすること。

(3) 生徒の興味・関心に応じた指導について

ア 課題追究学習、課題研究における指導

新学習指導要領では、地理歴史科、公民科などにおいて、生徒が適切な課題を設定し追究する学習（課題追究学習と表記）が新設されたほか、理科、家庭科、専門教育に関する各教科においても、従来から設定されていた課題研究、ホームプロジェクトなどの指導をより一層充実させることが求められている。

これらの問題解決的な学習においては、課題の設定、追究の過程、発表やまとめに

において、生徒一人ひとりに応じた指導が必要となる。生徒の問題意識、興味・関心をもとにそれぞれの個に応じた学習プログラムを組み立てさせるための綿密な指導計画と時間の確保、指導の力量が必要となるが、一人ひとりの生徒に達成感を持たせ、問題解決能力を向上させるためには極めて有用な学習方法と考えられる。

イ 選択科目、学校設定教科・科目等における指導

高等学校の教科の大半は科目選択制をとっており、近年、選択幅の拡大がはかられてきている。また、総合学科の設置や学校設定教科・科目の設定も進められ、生徒の興味・関心や目的意識を持った選択が一層可能になってきている。これらの学習の指導についても生徒の主体的な教科・科目の選択に資するよう配慮すること、生徒自身が将来の生き方や進路についてじっくり考察できる学習内容を提供することなどが必要であろう。

第2部第2章では、各教科別に一人ひとりに応じた指導の取組みが掲載されているが、指導方法との関連を示すと下表のとおりである。

表2 各教科における一人ひとりに応じた指導方法の事例

教 科	科 目	主 な 指 導 の 方 法
国 語 公 民 数 学	国語総合	ワークシートを用いた個別学習の指導
	現代社会	課題追究学習における個別学習の指導
理 科	数学Ⅰ	発展的な学習の指導
	生物Ⅱ	課題研究における発展的・補足的な学習の指導
外国語	英語Ⅰ	ティーム・ティーチング（日本人教師）による指導

3 生徒の学習状況の評価の工夫改善

教師にとって、学習指導を行う際に生徒の興味・関心、それまでの学習の実態などを把握することが必要であることは言うまでもない。とりわけ、一人ひとりに応じた指導においては、生徒の学習のつまづきがどこに起因するのか、学習に対する要求の水準がどこなのかをみて、適切な指導計画を設定する診断的な評価が重要となる。学習指導の過程においても、個々の生徒の基礎・基本の定着の状況や学習の深化の状況を探りながら指導の手だてを講じる形成的な評価も必要である。また、一連の学習指導全体を総括する際、学習の成果が指導の目標にかなっていたかどうか、その評価結果を次の指導の改善に生かすための具体的な方途は何かを十分に吟味し検討することが重要である。

次に、別の観点から評価をとらえてみると、一人ひとりに応じた指導の評価では、知識や技能の習熟の程度を的確に評価することだけでなく、生徒の学習に対する努力や意欲などを生徒自らが気付かせ、積極的に評価させることにより、個々の学習意欲の向上に生かすことが重要となる。言い換えれば、生徒一人ひとりが他者との比較ではなく、自己の持つ「よさ」、「変容」、「可能性」などを自分で発見し、見つめ直す「自己評価」を積み重ね、自己の持つ多様な可能性や進歩の状況を自分で把握する「個人内評価」を活用することも大切である。

さらに、一人ひとりに応じた指導の評価における重要な視点として、学習者相互の円

滑な協力関係と教師の適切な支援体制を効果的に結びつけることが必要である。グループ学習を中心とした課題追究学習などでは、自己肯定感を得させるだけでなく、生徒が互いに協力し評価しあいながら課題解決をはかることが重要である。自己の考えを他者に伝えるとともに、他者の持つ「よさ」に気づき、認めあいながら自己達成感を共有する学習が望まれる。このため、教師の手だてとしては、生徒の話し合いや相互評価が形骸化したり否定的な評価にのみ終始したりすることがないように留意すること、グループ内での個々の学習状況を的確に把握し、必要な助言を行うことなどが重要である。いずれにせよ、学習支援者としての教師の力量がさらに問われることとなる。

最後に、保護者に対する指導と評価についての説明責任も今後の重要な課題である。特に、前述したように習熟度別指導や補充的な学習の指導においては、指導の目的、内容、評価の方法を保護者に十分に説明し、協力を得ることが効果的な指導に不可欠である。そのためにも、指導の概要を事前に説明し、学習指導の各段階や場面においても、適宜、評価の結果を生徒及び保護者に伝えたり、学期ごとの通知表等に保護者の指導に対する記述評価を依頼したりするなどの工夫も必要であろう。

一人ひとりに応じたきめ細かな指導と評価は、教師、生徒及び保護者がそれぞれの立場から改善をはかるとともに、相互に補完し有機的に連携しあうことによってこそ効果的な成果があげられるものと確信する。

4 参考文献

- ・「高等学校学習指導要領解説 総則編」 文部省 平成11年12月
- ・「初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について（答申）」 中央教育審議会 平成15年10月
- ・「[確かな学力]と[豊かな心]を子どもたちにはくくむために」 文部科学省リーフレット 平成15年10月
- ・「新学習指導要領及び学校週5日制の実施に関する調査結果」 山口県教育委員会 平成15年7月
- ・「習熟度別指導の基礎・基本」工藤文三 編 教育開発研究所 平成15年11月
- ・「個に応じた指導に関する指導資料－発展的な学習や補充的な学習の推進－」 (中学校 数学編) (中学校理科編) 文部科学省 平成14年9月
- ・「個に応じた指導についての学習指導要領における記述」 教育改革国民会議 2分科会(第6回)配付資料 平成12年7月
- ・「個を生かす教育の実践」 全国教育研究所連盟編 ぎょうせい 平成4年5月
- ・「個をのばすための指導事例」 群馬県教育委員会 平成14年3月

<http://www.pref.gunma.jp/kyoi/05/sjirei/sjirei.htm>

- ・「個に応じた指導の充実に向けた発展的な学習教材事例集<算数・数学編>」

栃木県教育委員会 平成14年3月

<http://www.pref.tochigi.jp/gimu/haten-m.htm>

第3章 実践事例

1 学ぶ意欲を高めるための取組み

① 「スパイラルプラン」による学ぶ意欲の向上について

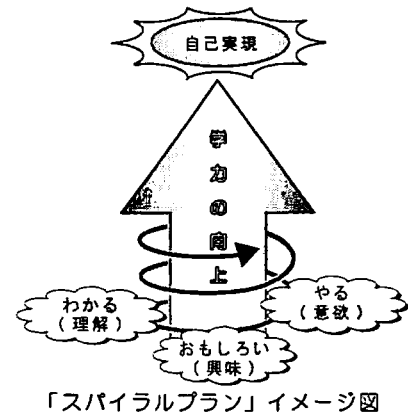
1 はじめに

平成15年度からの新学習指導要領施行に先立ち、文部科学省は「確かな学力の向上のための2002アピール『学びのすすめ』」を提唱した。そのなかで、

- ・きめ細かな指導で、基礎・基本や自ら学び自ら考える力を身に付けること
- ・学びの機会を充実し、学ぶ習慣を身に付けることを各学校に求めた。

そこで、A高校（普通高校）では、基礎・基本を重視した学習を徹底して行い、さらに様々な学習機会を設けることで、生徒が「わかる喜び」を知り、それが「興味・関心」や「意欲」につながり、好循環を導く教育「スパイラルプラン」を実施している（上図参照）。

ここでは、その中心的な取組みである「基礎学力の確認と向上」と「学習習慣の確立」の一部について紹介する。



2 実践内容

(1) 基礎学力の確認と向上

小学校・中学校で学んだ読・書・算（よみ・かき・そろばん）などの基礎学力が身に付いていない生徒が多く、その個人差も大きい。そのため、高等学校では、各教科の一斉学習に支障があるとともに、学ぶ意欲の低下にもつながっている。

生徒個々の学力や、学習過程におけるつまずきの箇所を知り、それに合わせた指導方法や教材を開発するなど、「一人ひとりに対応したきめ細かい指導」を実施することにより、基礎学力を向上させることができれば、生徒は「わかる喜び」や「学習する楽しさ」を感じ、それが「学ぶ意欲の向上」にもつながるはずである。

ア 基礎学力診断システム

(ア) 導入の目的

生徒一人ひとりの学力やつまずきの箇所を把握し、その後の基礎学力の向上を図る取組みに資する。

(イ) 事前準備

- 入学準備教材（国語・数学・英語）を新入生説明会で配布し、基礎学力診断テストの実施を予告する。配布する教材は、中学校での学習内容のうち、高等学校での学習に必要な基礎的内容を精選して自作したものである。
- 入学準備教材の内容を抜粋して、基礎学力診断テスト（国語・数学・英語）を作成する。解答欄には、各小問に対する理解度（A～Dの4段階）を自己診

断により記入する枠を設け、事後分析の際に、誤答がケアレスミスによるものか、それとも理解が不十分なのかを、判断できるようにする。

(ウ) 基礎学力診断テスト実施

入学当初のオリエンテーション期間中に、国語・数学・英語の授業時間を利用して、診断テストを実施する。

(エ) 採点・分析

国語科・数学科・英語科以外の全教員が3班に分かれ、テストの採点、パソコンへのデータ入力作業を行う。

パソコンでは自動的に、

- a 各教科の小問ごとの正解率
- b 各教科の単元・項目ごとの得点及び総合得点の分布
- c 個人成績カード（単元・項目ごとの得点及び総合得点の5段階判定等）

が作成される。

(オ) 教科別個人面談

個人成績カードをもとに、教科担当による生徒の個人面談を行い、生徒一人ひとりの得意分野やつまづきの箇所を確認し、今後の学習目標などを明確にする。その際、「学習カウンセリング」を心がけ、生徒の学ぶ意欲が向上するよう配慮する。

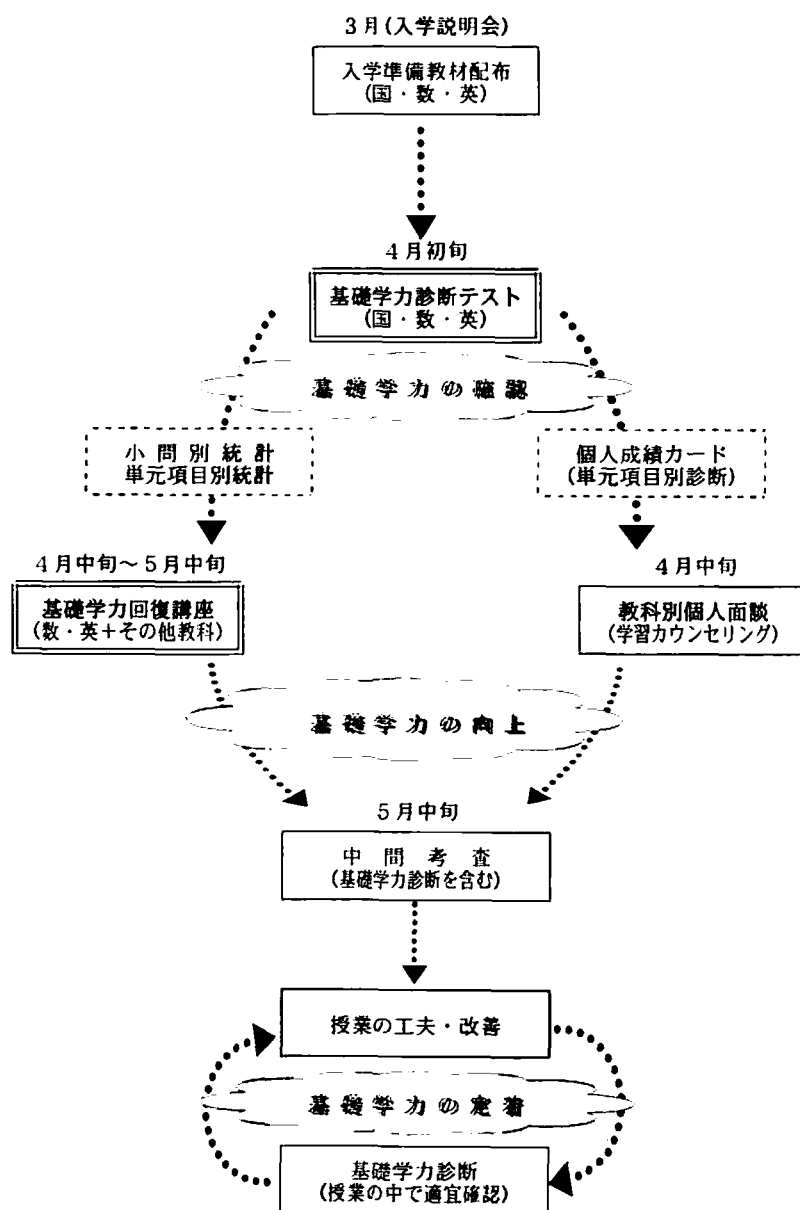
▼ 解答用紙（数学・抜粋）

基礎学力診断テスト [数学] 解答用紙							
◆各問題について自分がどの程度理解しているかを右のA～Dから1つ選び、各問題の解答欄の中の□に記入してください。 A：よくわかる。 B：自信はないがまあまあわかる。 C：ほとんどわからない。 D：全くわからない。							
1	(1)	□	(2)	□	(3)	□	(4)
	(5)	□	(6)	□	(7)	□	

▼ 個人成績カード（数学）

第1回 基礎学力診断テスト[数学] 個人成績カード																																																																																																					
年 組 番	●●●●	氏 名	○○○○	得 点	67 / 100																																																																																																
<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th>単元</th> <th>項目</th> <th>配点</th> <th>得点</th> <th>判定</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="4">実数</td> <td>正負の計算</td> <td>12</td> <td>9</td> <td>B</td> </tr> <tr> <td>分数の計算</td> <td>3</td> <td>3</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td>指数の計算</td> <td>3</td> <td>3</td> <td>C</td> </tr> <tr> <td>7の計算</td> <td>14</td> <td>6</td> <td>C</td> </tr> <tr> <td rowspan="4">文字式</td> <td>式の通分・乗除のやり方</td> <td>4</td> <td>3</td> <td>C</td> </tr> <tr> <td>加減(十一)</td> <td>3</td> <td>3</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td>連立方程式の解法(Ⅱ、Ⅲ)</td> <td>4</td> <td>3</td> <td>C</td> </tr> <tr> <td>展開</td> <td>5</td> <td>6</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td rowspan="4">方程式</td> <td>因数分解</td> <td>14</td> <td>9</td> <td>C</td> </tr> <tr> <td>一次方程式</td> <td>3</td> <td>3</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td>二次方程式</td> <td>15</td> <td>6</td> <td>C</td> </tr> <tr> <td>連立方程式</td> <td>5</td> <td>6</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">関数</td> <td>関数の計算</td> <td>3</td> <td>3</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td>三角関数の基本性質</td> <td>5</td> <td>6</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td rowspan="3">図形</td> <td>三角形の内角</td> <td>4</td> <td>3</td> <td>C</td> </tr> <tr> <td>三平方の定理</td> <td>3</td> <td>3</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td>一次関数</td> <td>3</td> <td>3</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td rowspan="3">関数</td> <td>二次関数</td> <td>3</td> <td>0</td> <td>E</td> </tr> <tr> <td>指数関数の計算</td> <td>3</td> <td>0</td> <td>E</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td></td> <td>124</td> <td>81</td> <td>B</td> </tr> </tbody> </table>										単元	項目	配点	得点	判定	実数	正負の計算	12	9	B	分数の計算	3	3	A	指数の計算	3	3	C	7の計算	14	6	C	文字式	式の通分・乗除のやり方	4	3	C	加減(十一)	3	3	A	連立方程式の解法(Ⅱ、Ⅲ)	4	3	C	展開	5	6	A	方程式	因数分解	14	9	C	一次方程式	3	3	A	二次方程式	15	6	C	連立方程式	5	6	A	関数	関数の計算	3	3	A	三角関数の基本性質	5	6	A	図形	三角形の内角	4	3	C	三平方の定理	3	3	A	一次関数	3	3	A	関数	二次関数	3	0	E	指数関数の計算	3	0	E	計		124	81	B
単元	項目	配点	得点	判定																																																																																																	
実数	正負の計算	12	9	B																																																																																																	
	分数の計算	3	3	A																																																																																																	
	指数の計算	3	3	C																																																																																																	
	7の計算	14	6	C																																																																																																	
文字式	式の通分・乗除のやり方	4	3	C																																																																																																	
	加減(十一)	3	3	A																																																																																																	
	連立方程式の解法(Ⅱ、Ⅲ)	4	3	C																																																																																																	
	展開	5	6	A																																																																																																	
方程式	因数分解	14	9	C																																																																																																	
	一次方程式	3	3	A																																																																																																	
	二次方程式	15	6	C																																																																																																	
	連立方程式	5	6	A																																																																																																	
関数	関数の計算	3	3	A																																																																																																	
	三角関数の基本性質	5	6	A																																																																																																	
図形	三角形の内角	4	3	C																																																																																																	
	三平方の定理	3	3	A																																																																																																	
	一次関数	3	3	A																																																																																																	
関数	二次関数	3	0	E																																																																																																	
	指数関数の計算	3	0	E																																																																																																	
	計		124	81	B																																																																																																
※各単元の単元項目に重複して該当する問題があるため、単元別得点の割合合計は100%を超えます。																																																																																																					

▼ 基礎学力向上に係る実施フロー



イ 基礎学力回復講座

(ア) 導入の目的

新入生に対して特別指導を行うことにより、高校入学後に必要となる基礎学力を向上させ、中学校の学習から高校の学習へのなめらかな移行を図る。

(イ) 事前準備（数学・英語）

- a 教科担当によるオリエンテーションを実施し、今後の授業の進め方や取り組み方などの諸注意と、習熟度別授業に関する説明などを行う。
- b 個人面談を実施し、生徒の希望と基礎学力診断テストの結果を参考に、回復講座の習熟度別編成を行う。なお、数学は2講座、英語は3講座の編成である。
- c 生徒の習熟度を考慮し、講座別に、数学・英語のオリジナル基礎教材を作成する。

(ウ) 実施対象及び期間

対象は第1学年とし、実施期間は4月中旬から5月中旬（1学期中間考査）までの約1か月間とする。

(エ) 実施方法

a 特別授業

数学Ⅰ（3単位）では週2時間を「基礎数学」、英語Ⅰ（3単位）では、週1時間を「基礎英語」と称して、回復講座にあてる。

b 通常授業

数学・英語以外の教科についても、今後の学習に必要な基礎事項の確認に重点を置いて授業を進める。

c 評価

1学期の中間考査において、回復講座の学習内容についても評価を行う。国語・数学・英語の3教科については、課題テストの結果とも比較を行う。

(オ) 実施にあたっての留意事項

a 教員自身がこの期間の重要性を十分に意識して授業に取り組む。

b 今後の学習に必要な基礎的・基本的事項を重点的に学習させる。

c 教科間の連携を図り、他教科の内容についても積極的に学習させる。

例：「理科総合」で、割合・歩合算の計算練習

「情報A」で、英語・ローマ字の表記について学習

ウ 夏休み特別学習会

(ア) 導入の目的

1学期成績不振生徒のうち、当該学年以前の学習内容について特別な指導が必要であると思われる者への学習支援を行う。

(イ) 実施対象及び時期

対象生徒は、1学期の学習状況・成績から教務課で判断し、教科担当と相談の上、決定するが、学習会参加については本人の意思にまかせる。また、実施時期については、夏季休業中の前半・後半の各5日（1日3時間）程度とする。

(ウ) 実施場所

A班：学校近隣に在住している生徒及び部活動等で実施期間中に登校する生徒については、学校において実施する。

B班：上記以外の生徒については、在住地近隣の公民館を借りて実施する（これは長期休業中には通学定期を購入しない生徒に対する配慮でもある）。

(エ) 実施方法

a 指導担当

A班：原則として日直の教員が指導にあたる。

B班：対象生徒の所属する学年団または該当教科の教員を中心とした輪番による。

b 指導内容・方法

教科担当は、受講生の学習状況・能力を考慮して教材を準備する。また、

「学習方法・指導方法の注意」を作成して、指導担当者に渡す。

受講生には、毎回「学習記録簿」に学習事項・わかった点・わからなかった点等を記入させ、次回の指導担当者に示す。

(オ) 実施にあたっての注意事項

- a 指導担当者が教科担当でない場合は、事前に渡された「学習方法・指導方法の注意」を十分に理解した上で指導にあたる。
- b 「学習記録簿」を活用して、指導内容の確認や引き継ぎに代える。
- c 指導担当者は学習指導のみならず、受講者の精神面の援助も念頭においた「学習カウンセリング」を心がける。

▼ 学習方法・指導方法の注意

夏 休 み 特 別 学 習 会 学習方法・指導方法の注意(指導担当用)			
教 科	数 学	教科担当	○ ○ ○ ○
受講生	□ □ □ □		
教 材	プリント2種類×日数分		
学 習 方 法	①整数の計算プリント(計算・採点・得点計算・訂正計算) ②整式の計算プリント(計算・採点・訂正計算・再チャレンジ) の順に実施。		
指導上 の注意	◆①の実施手順は次のとおりです。 ・引き算の場合は(横列の数) - (縦列の数)で計算することを確認する。 ・「はじめ」「やめ」の合図をし、終了までの時間を計る。 ・終了後、教員が採点する。(間違っているところに小さく×をつける) ・間違っていた部分は、プリント下の「やり直し」部分で計算させる。 ・練習が進むにつれ、タイムが上がっていくと思われます。過去のデータと比較することで本人に自分の進歩を確認させてください。 ◆②については、同じプリントが2枚準備してあります。 ・プリントの最初にある解説文を音読させて下さい。つまるところがあれば、その部分の理解が不十分であると思われますので、説明をお願いします。 ・1枚目に解答させ、教員が採点の後、本人に赤ペンで訂正させます。 ・時間に余裕があれば、2枚目に再チャレンジさせてください。 ◆<u>気長にやさしく接して、ちょっとした進歩でもほめながら学習を進めて下さい。</u>		

注) 1. 「学習方法」欄には、学習の進め方や学習する上で受講生が注意する点を記入してください。

2. 「指導上の注意」欄には、指導担当者に指導してほしいことや配慮してほしいことを記入してください。

▼ 学 習 記 録 簿 (抜粋)

学 習 の 記 録			
年 組 番 氏 名 _____			
月 日 (曜) _____			
教 科			
学習時間	: ~ :	: ~ :	: ~ :
学 習 し た こ と			
よくわか った 点			
あまりわ からなか った 点			
			担当教員

(2) 学習習慣の確立

「生徒の学習到達度調査 (PISA)」(平成12年度, OECD調べ) によれば, 日本は「宿題や自分の勉強をする時間」は調査国中最下位の27位と発表され, 日本の児童生徒に十分な学習習慣が確立されていないことが指摘されている。A高校においても, 通常はもちろん, 定期考査前ですら, ほとんど家庭学習をしない生徒が見受けられる。

これは, 「もともと家庭学習をする習慣がない」ことはもちろん, 「学習の仕方がわからない」ことが原因の一つであると考えられる。

そこで, まず学習する「場」と「時」を与え, さらに学習の「方法」を教えることが学習習慣を確立する第一歩であり, これが「学力の向上」ひいては「学ぶ意欲の向上」につながると考えた。

ア 考査事前学習週間

(ア) 導入の目的

定期考査前の6時限終了後に, 特別学習を実施することにより, 学習の仕方を確認するとともに, 授業以外の「場」で学習する習慣を身に付けさせる。

(イ) 実施対象及び時期

全校生徒を対象に, 定期考査前の4日間(1日40分)実施する。

(ウ) 実施方法

- a 考査実施教科ごとに教室を割り振り, 担当教員を配置する(1教科につき1教室の学年混合で, 原則としてティーム・ティーチングによる指導を行う)。
- b 校長及び教頭を含む全教員が指導にあたる(考査を実施しない教科の教員は他教科の応援をする)。

- c 生徒は、日ごとの受講希望教科（科目ではない）を選択する。受講を希望しない生徒は、図書室での自習も選択できる。また、必要に応じて個々の生徒に選択すべき教科を指定するなどの指導も行う。
- d 生徒が自主的に学習に取り組むことができるよう、講義形式にはせず、適切な課題を与えるなど、生徒の自学自習を支援する形態とする。
- e 教務課で日ごとの受講者名簿を作成し、これにより、各教室担当者が出欠を確認する。

▼ 生徒向け実施要領

2 学期末 考査 事前 学習

「考査事前学習」として試験前の4日間、7時限を実施し試験範囲の自学自習の時間とします。

1. 日時

12/4（水）～12/10（火） 掃除終了後、15:25～16:05（40分）

2. 実施教科一覧表

月/日(曜)	12/4 (水)	12/5 (木)	12/9 (月)	12/10 (火)
教 科	実施科目(学年)	実施科目(学年)	実施科目(学年)	実施科目(学年)
国 語	国語Ⅰ(1年) 国語Ⅱ(2年) 現代文(3年) 古典Ⅰ(3年)		国語Ⅰ(1年) 国語Ⅱ(2年) 現代文(3年) 古典Ⅰ(3年)	国語Ⅰ(1年) 国語Ⅱ(2年) 現代文(3年) 古典Ⅰ(3年)
地 歴				地理A(1年)
公 民			現社(2・3年)	
数 学	数Ⅰ(1年) 数Ⅱ(3年) 数応(3年)	数Ⅰ(1年) 数Ⅱ(2・3年) 数応(3年)	数Ⅰ(1年) 数Ⅱ(2年)	数Ⅰ(1年) 数Ⅱ(2・3年) 数応(3年)
理 科	総理(1年) 化ⅠB(2・3年)	生物ⅠB(2年) 化ⅠB(2・3年)	総理(1年) 化ⅠB(2・3年)	総理(1年) 化ⅠB(2年)
外国語	英Ⅰ(1年) 英語Ⅱ(2年) ライティング(3年)	英Ⅰ(1年) 英語総合(3年)	英語総合(3年) ライティング(3年)	英Ⅰ(1年) 英語Ⅱ(2年) ライティング(3年)
家 庭	生活一般(2・3年) 食物(3年)		生活一般(2・3年) 食物(3年)	生活一般(2・3年) 食物(3年)
商 業	簿記(3年)	簿記(3年)	簿記(2年)	簿記(2年)

3. 実施方法

①教科の選択

- ・上の「実施教科一覧表」に従い、選択表に自分の希望教科を曜日ごとに記入します。
- ・特に補習の必要がなく、図書室での自習を希望する場合は、「○」を記入します。

(記入例)

番	氏 名	12/4 (水)	12/5 (木)	12/9 (月)	12/10 (火)
1	山口 太郎	国	数	○	社

②受講

- ・教科ごとに教室を指定しますので、15:25までに荷物を持って指定教室に移動しましょう。
- ・事前にわからない点を明確にしておき積極的に質問するなど、有意義な時間にしましょう。

3 おわりに

「スパイラルプラン」はA高校の中心的な取組みであるが、そのほかにも、次のような多様な教育活動を行っている。

- ・生徒一人ひとりに学習目標を設定させるため、学校設定科目「進路プランニング」を開設し、ライフプランの作成や職場体験を実施
- ・「数学Ⅰ」「数学応用（学校設定科目）」で各2講座、「数学Ⅱ」「英語Ⅰ・Ⅱ」で各3講座の習熟度別授業を実施
- ・「国語表現」でコース別授業などの少人数指導を実施
- ・「情報A」「情報処理」でティーム・ティーチングを実施
- ・生徒の実態に応じた「数学応用」「英語総合」等の学校設定科目の設置
- ・商業科目「簿記」「情報処理」の導入による資格取得の援助
- ・さらなる向上を目指す生徒のための、進学課外、添削指導、勉強合宿等の実施

また、「基礎学力診断システム」については、2年次に1年次の基礎学力を、3年次に2年次の基礎学力をそれぞれ診断するよう、研究を継続中である。

これらの「一人ひとりに対応したきめ細かい指導」が生徒の学ぶ意欲の向上に効果をあげていることはもちろんだが、その他にも、

- ・問題行動が減少し、学校全体が落ち着いた雰囲気になってきた
- ・中学時に不登校だった生徒のほとんどがA高校入学後は出欠状況が大きく改善された

など、“副次的”というにはあまりにも大きな効果があがっている。

「学ぶ意欲を高める」ことが、生徒自身の資質や能力を高め、明るい将来を思い浮かべることができるようになり、それが「生活意欲を向上させる」、さらには「生きる力を涵養する」ことにつながっている。

4 参考文献

- 高階玲治編『誰もが活用したい「確かな学力の形成」100の実践ポイント』教育開発研究所
吉本武史編著『教師だからできる5分間カウンセリング』学陽書房

② 学校間連携による学ぶ意欲の向上

1 はじめに

B市内のB商業高校・B工業高校・B高校の3校は高校改革の柱の一つとして、多様な個性や特性を持つ生徒の能力・適性、興味・関心、進路などへの対応を図るため、学校間連携を実施している。これにより学校の枠を越え、相互の学校の教育内容・施設・設備の特徴を生かした授業を生徒が履修・修得できるようにした。また、生徒の相互乗り入れにより、互いの学校の活性化を図ることもねらいとした。

2 連携までの経緯

(1)「学校間連携」研究委員会

ア 委員会は各校の校長及び研究委員2人で構成する。

イ 研究の経緯

年 月	研 究 内 容
平成12年 9月	第1回委員会、先進校視察の計画作成
平成12年 9月	委員3人により津山東・津山工業・鳥取西工業・鳥取商業高校の視察 委員3人により島原工業・島原商業・佐賀工業・佐賀商業・佐賀北高校の視察
平成12年10月	先進校視察の報告
平成12年11月	各校で開設可能な科目の検討 生徒に対するアンケート作成
平成12年12月	アンケート結果の報告 今後の問題点の検討
平成13年 2月	中間報告の作成
平成13年10月	昨年度からの課題について検討 学校間連携協定書の作成に向けての検討
平成13年11月	開設科目、生徒移動手段について検討 学校間連携協定書案の検討
平成13年11月	記者発表
平成14年 6月	開設科目決定 科目別希望生徒数の調査について
平成14年 7月	科目別希望生徒数調査結果について
平成14年 9月	科目別希望生徒数について 学校間連携協定書及び実施要領について
平成14年10月	学校間連携協定書調印式

ウ 研究委員会での主な検討事項

(ア) 開設科目

B商業高校・B工業高校では、専門学科の特色が生かせ、施設・設備が利用できる科目、B高校では、連携校の生徒の要望の高い科目を開設することとし、その結果、B商業高校は「簿記」と「情報処理」、B工業高校は「工業技術基礎」と「課題研究」、B高校は「映像メディア表現」と「言語研究」を開設することになった。

各科目の内容は次のとおりである。

【簿記】 企業や商店での「黒字」「赤字」という言葉の意味を簿記の学習を通じて理解する。ビジネスの諸活動を計数的に把握する能力と態度を身に付けることができる。
【情報処理】 既製の表計算ソフトを利用した、利用技術習得のための実習が中心である。また、情報の収集・処理・分析・活用をすることで、情報の活用能力を身に付ける。
【工業技術基礎】 ・工業材料の強さ、硬さを調べる。 ・顕微鏡で金属組織を観察する。 ・基礎的な加工技術を学ぶ。コマ、文鎮等を製作する。 ・PICというワンチップマイクロコンピュータを用いて電子ルーレットをすることにより、回路図の見方、部品や工具に関する基本知識、プリント基板の配線技術などを習得する。作品完成後はこの基板を使い各種制御も行う。
【課題研究】 住宅や店舗等の建築模型の製作。住宅や店舗等の建物を立体的にとらえるために、バルサ材や厚紙等を用いて模型を製作する。大きさは実物大の1/50程度とし、建物の平面計画（プラン）についても学ぶ。
【映像メディア表現】 コンピュータグラフィックスの基本から応用までを学習する。画像合成・加工等の画像処理、平面構成・色彩構成・描画等のデザイン処理による美術作品の制作などを学習する。
【言語研究】 （国語分野）情報を収集・整理する方法を学び、自分の考えを深めることを学習する。また、小論文の添削により、主題や論旨の明確な論理性のある文章を書く能力を身に付ける。 （英語分野）英語による読み書きなど、自分の考えを表現する能力を身に付ける。聞き手や読み手に伝えようとする内容が、分かりやすく効果的に伝わるよう、文章の構成や展開の仕方などを学習する。

(イ) 履修学年

学校間連携の実施に当たっては、生徒の進路に直接結び付いた科目を履修させた
いということ、また、選択科目にした場合、必修履修科目の関係で第3学年が履修し
やすいということを考慮し、第3学年を対象とすることとした。

(ウ) 授業形態

第3学年が対象なので、開設校の生徒とは進度が異なることが予想されるため、
共修という形をとりにくい。したがって、学校間連携の授業は単独の授業とするこ
とにした。

(エ) 日時・移動方法

学校間の距離は、B商業高校とB高校の間が1km、B高校とB工業高校の間が
2km、B工業高校とB商業高校の間が2.4kmあり、他県の連携校間に比べて、学
校間の距離が長い上に、生徒の移動手段としては自転車か徒歩しかない。このため、
連携の授業の日時については、週のうち1日だけとし、昼休みの時間に移動ができ
る午後2時間の授業を充てることにした。また、第3学年が対象のため、連携の授
業は2月の家庭学習が始まる前、つまり、1月末までを実施期間とすることにした。

(オ) 開講人数

各講座の人数は実習の内容が主であるため、20人を限度とし、希望者が20人
を越える場合は、各校で選抜、調整することとした。

3 実施要領の概要

(1) 開設教科・科目及び単位数等

開設校	教科	科目名	単位数	対象学年	開設曜日・授業時間
B商業高校	商業	簿記	2単位	第3学年	毎週火曜日 2限連続授業 ①14:00～14:50(50分) 休憩 ②15:00～15:50(50分)
		情報処理			
B工業高校	工業	工業技術基礎			
		課題研究			
B高校	美術	映像メディア表現			
	総合	言語研究			

(2) 単位認定

ア 開設校は、生徒の開設科目に関する成績の評価及び単位の認定を行う。

イ 在籍校は、開設校で認定された単位を、在籍校が定めた卒業に必要な単位数に加
えることができるものとする。

(3) 出欠等

ア 生徒の出席簿は、在籍校と開設校の双方に備える。

イ 欠席、忌引き、遅刻、早退等については、開設校の内規に従って処理する。

ウ 在籍校は、その日の出席状況を、授業開始前までに、開設校へ電話またはFAX
で連絡する。開設校は、授業終了後すみやかに在籍校へ出欠席の状況を連絡する。

(4) 休校・休講等

ア 開設校の定期考査・行事等で開講が不可能な場合は、在籍校へ事前に連絡すると

ともに、在籍校が受講生を指導する。

イ 在籍校の定期考査・行事等（部活動の対外試合を含む）により、開設校の授業が受講できない場合は、開設校では欠席扱いとしない。

（５）生徒指導

ア 在籍校（他校）の生徒に対する指導は、開設校（自校）の業務と同じ重みを持っていることを、全教職員で共通理解する。

イ 服装等生徒指導は、在籍校の規定に従うことを基本とする。

（ア）各連携校間で服装に関する規定を交換し、指導の参考とする。

（イ）在籍校で事前指導をする。また、生活面等について開設校で問題があると認めるときは、在籍校に連絡し、在籍校で指導する。

ウ 授業の規律については、開設校の指導に従う。

エ 生徒指導上の問題が生じたときは、その都度両校で話し合う。問題行動に対する懲戒等の指導は在籍校が行う。

オ 開設校は関係生徒の通学用自転車置場及び下足ロッカーを確保する。通学方法や経路は在籍校が決定し、それを遵守させる。

４ 平成１５年度学校間連携の実践

（１）連携授業受講者の決定

平成１４年７月に希望調査を実施し、各科目の受講者人数を２０人以内にするよう在籍校で人数調整をした結果、次の表のようになった。また、平成１５年度の受講者数は２９人となった。

内訳は次の表のとおりである。

開設校	開設科目	受講者人数
B商業高校	情報処理	３人（Ｂ工業高校から）
B工業高校	工業技術基礎	２人（Ｂ商業高校から）
	課題研究	２人（Ｂ商業高校から）
B高校	映像メディア表現	１０人（Ｂ商業高校から）、７人（Ｂ工業高校から）
	言語研究	４人（Ｂ商業高校から）、１人（Ｂ工業高校から）

（２）併修承認

平成１５年２月、在籍校から開設校に「併修願書」「併修承認申請」を提出し、開設校から在籍校に「併修承認回答」を送付した。

（３）開講式・オリエンテーション

日時：平成１５年４月１５日（火）１４時から

場所：各開設校

内容：開設校校長あいさつ、講師紹介、オリエンテーション

５ 学校間連携の成果

自分の興味・関心のある教科・科目を選択受講している生徒なので、学習に対する意欲は高い。平成１５年１１月に受講生徒２８人と授業担当教員９人に対して行ったアンケートの結果は、次のとおりである。

生徒へのアンケート結果

【問】連携授業の出席状況について教えてください。	
(1) これまで欠席した日がありますか。	
ア ない	26人
イ ある	(1日) × 2人
(2) 連携授業のある日は欠席しないようにしていますか。	
ア 他の日より、欠席しないようにしている。	7人
イ 特に他の日と区別はしていない。	21人
【問】連携授業について、あなたはどのように思いますか。	
ア 開設校に行って授業を受けるのが楽しみである。	16人
イ 特に楽しみでもないが、自分で選択したのでやむなく受けている。	9人
ウ できれば受けたくない。	0人
エ その他	3人
【問】連携授業で学習している内容についてどのように思いますか。	
ア 知らなかったことが多く学べ、勉強しようという意欲がわく。	3人
イ 興味のある内容なので、勉強することが楽しい。	13人
ウ すでに知っている内容が多く、新しく知ることはあまりない。	4人
エ 自分が期待していた内容とは異なるので、勉強しようという意欲がわかない。	5人
オ その他	3人
【問】連携授業で学習している内容について、学校間連携が終了した後も勉強してみたいと思いますか。	
ア 興味のある内容なので、終了した後も自分で勉強してみたい。	7人
イ 終了した後も、時間の余裕があれば勉強してみたい。	13人
ウ 終了した後は、自分で勉強したいとは思わない。	7人
エ その他	1人
【問】1学期の連携授業の成績についてどう思いますか。	
ア 自分が考えていたよりも良い点数だった。	16人
イ 自分が考えていた程度の点数だった。	8人
ウ 自分が考えていたよりも悪い点数だった。	2人
エ その他	2人

授業担当教員へのアンケート結果

【問】現在この講座を受講している生徒は、内容に興味・関心を持っていますか。	
ア ほとんどの生徒が興味・関心を持っている。	7人
(主な理由)	
・授業中の態度や、生徒同士の話の中で「楽しい」という言葉が聞かれる。	
イ 一部の生徒は興味・関心を持っている。	2人
ウ ほとんどの生徒が興味・関心を持っていない。	0人

【問】学校間連携は生徒の「学ぶ意欲の向上」に役立っていると思われますか。

ア 思う 3人

イ 思わない 1人

(主な理由)

・もともと「意欲のある」子が来ているように思う。

ウ よくわからない 5人

(主な理由)

・現在は受講生徒が3人であるため一人ひとりに対応した授業ができおり、生徒の意欲が伝わってくるが、状況が変わったときどうなるかわからない。

・よくわからない面はあるが、自分の学校では体験できないことが経験できるので、視野は広がると思う。

生徒アンケートの結果から、28人中16人の生徒が「受けるのが楽しみである」と答えている。また、学習の内容についても、16人の生徒が「勉強しようという意欲がわく」または「勉強することが楽しい」と答えている。教員のアンケート結果からも、生徒は興味・関心を持って取り組んでいることがわかる。

また、20人の生徒が、学校間連携終了後も「自分で勉強してみたい」または「時間的な余裕があれば勉強してみたい」と答えている。

さらに、意欲的に学習するため連携授業の成績が他の授業の成績よりも良く、「自分が考えていたよりも良い点数だった」と答えた生徒が16人いた。

学校間連携が「学ぶ意欲」の向上に役立っているかという教員に対する質問でも、今年度の学校間連携では、生徒の学ぶ意欲が感じられるという意見が多かった。

これらのことから、自校で開設されていない科目でも学習する機会が与えられる学校間連携は、生徒の学ぶ意欲の向上に役立っている。

6 おわりに

学校間連携を開始して1年目の今年は、生徒の学ぶ意欲の向上という目的はほぼ達成できたと思われる。しかし、今後、学校間連携を続けていくためには、次のような問題点を解決していく必要がある。

(1) 開設科目

開設科目によって受講希望者の人数にかなり差がある。開設科目は生徒のニーズ等を考えながら、常に検討していく必要がある。

(2) 移動手段

B商業高校とB工業高校の間の距離が2.4kmあり、通常、生徒は自転車で往復しているが、雨天時の移動が困難である。

③ 高大連携教育による学ぶ意欲の向上

1 はじめに

近年、国内外ともに先行き不透明で、将来に夢がもてないといった社会状況に起因して、高校生の進学に対するモチベーションが低く、それに従って学ぶ意欲も減退していると言わざるを得ない。さらに、最近の国際的な調査や教育課程実施状況調査などから、我が国の子供たちは学ぶ意欲が必ずしも高くないこと、学習習慣が十分に身に付いていないこと、また、トップレベルの学力を有する生徒の割合が少ないことなどが指摘されているところである。

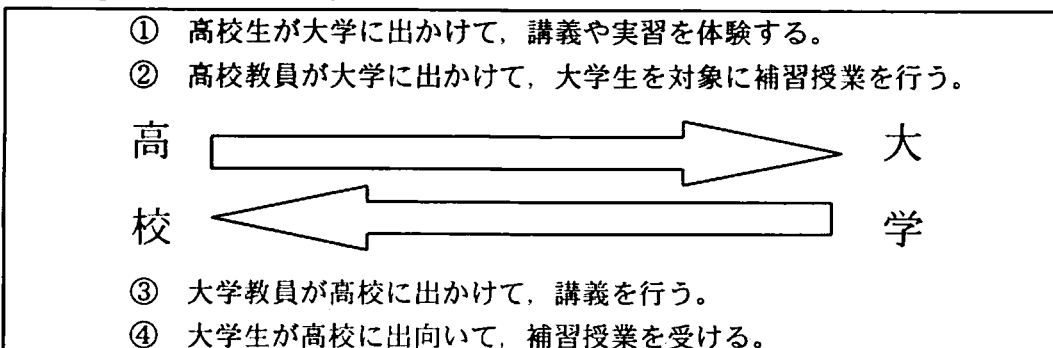
そこで、高校在学中に、大学の最新の学問研究の成果にじかに触れさせるなど、高校教育の枠を越えた多様な教育の機会を与えることにより、特定の分野について卓越した能力をもつ生徒に有効な知的刺激を与え、その能力をさらに伸ばそうとする試みがなされている。さらに、高大連携教育は、進学前に大学教官による講義を受けることにより、明確な進路選択の機会を与え、勉学における目標をもたせるだけでなく、自らの在り方・生き方を考え、主体的な自己実現を目指す人間づくりにもつながっている。また、「総合的な学習の時間」を活かして課題追究学習を行う機会が増えてきたこともこの流れを促進させた要因の一つであろう。

一方、大学側からは、高校との連携をとることにより、高校生がどのような大学教育を望んでいるかを知るヒントを得て、それをもとに大学の授業改善を行うことができ、長期的に見れば学生確保の効果も期待できる。また、従来の一般教養課程に代わり、高校の学習から大学での高等教育への連結部分として位置付けるというメリットも期待できる。

このように、高校と大学の双方からの要求で全国的に高大連携の取組みが動き出す中、C高校の理数科において実践されている高大連携事業について紹介する。

2 連携の形態

1999年12月の中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」では、大学での学修を高校の単位として認定することや、高校の協力を得て大学で補習授業を行うことなど、具体的な連携の姿が示されている。これらを整理すると、次の①～④の4つの形態が考えられる。



文部科学省の集計によると、①、③の形態は既に全国で広く行われているが、②は一部の県では実施例が見られるもののまだ本格化してはいないし、④はまだ報告例がない。

①の指導形態は公開講座やサマーセミナーの受講というものが多いが、中には大学の正規の講座を高校生に受講させる例も登場してきている。各高校では課外の活動として扱われているものが多いが、大学・専門学校での学修を高校の単位に認定する制度ができからは、単位認定を行う動きが急速に広まっている。C高校では、この形態での連携に最も積極的に取り組み、単位認定に向けてのシステム作りも急速に進められている。

③の形態は、専門分野の学問紹介から進学ガイダンス的なものまで各種あり、ほとんどは1回もしくは数回の特別講義や講演会という形であるが、中には通年で大学教員が授業を行う例もある。高校としては、最も取組みの容易な方法であり、C高校をはじめ、県下のいくつかの高校で現在も実施中である。平成14年度末には、後述の通り、C高校と近接したT高校を中心に複数の大学・高校間が連携しての「出前総合大学」も実施された。

3 C高校の実践事例について

(1) 平成13年度までの理数科単独の取組み

C高校理数科（各学年1クラス40人）は、理数系教科・科目への関心が高く、理工系や医学系などへの進路選択を比較的明確にしている生徒が多く集まっている。平成12年度からは、2学年の1単位を「理数課題研究」という学校設定科目として設け、1年間、個人もしくはグループで一つの課題を設定して研究を重ね、年度末に発表の機会を与えて評価を行っている。同時期から、生徒の知的好奇心をさらに刺激し、理工系・生物系等の研究の一端を体験させる目的で、近辺の国立・私立大学との連携教育を実践してきた。山口大学をはじめとするいくつかの大学との連携に好都合な地理的条件を活かして、下記のような実践に取り組んできた。

平成12・13年度の連携実践記録

年 月	内 容	対象生徒
平成12年9月	山口大学理学部での体験学習（半日）	理数科1学年
平成13年9月	大学出張講義 山口大学工学部教授「工学から医学へ」 (75分)	理数科1・2学年
平成13年10月	山口大学工学部での体験学習（半日） 7学科より1つを選択させて実習に参加	理数科1学年
平成13年11月	大学出張講義 岡山理科大学教授「微生物の力で環境を きれいにしよう」(90分)	理数科1・2学年
平成14年1月	大学出張講義 山口大学理学部教授「研究発表原稿のま とめとプレゼンテーションの方法につい て」(120分)	理数科2学年

上記一覧の通り、時間的な制約などから単発的な取組みに終始し、継続的な学習とはなりえなかった。また、大学側から積極的なアプローチが行われた出張講義は、高校側

のニーズや生徒の実態と必ずしも合致しないこともあり、課題が残った。

しかし、1クラス40人という人数は行動しやすいという利点もあり、本来理数系に高い関心をもつ理数科の生徒たちには好評で、自分たちの課題研究発表へのヒントやテクニック(パワーポイントの利用や効果的なプレゼンテーション方法など)を得る効果があり、この取組みを継続・発展させる必要性を感じさせるものであった。

(2) 平成14年度からの実践事例

本県では、平成14年度より2年間、山口県らしい高大連携のあり方を研究するためのモデル事業が開始された。そのモデル地域として2地域が選ばれ、C高校もその内の1地域のモデル校に指定された。これを機に、従来の理数科単独の取組みだけでなく、全校をあげての連携の在り方を研究する段階に入った。また、同時に設立された「高大連携教育地域実践研究会」を通して、C高校のみでなく、同じようにモデル校に指定された近隣の高校や、連携大学からの幅広い協力を得ることも可能になった。

平成14年度から平成15年度途中までの実践記録

平成14年10月	大学出張講義 九州共立大学工学部教授「人にやさしいロボット」(65分)	理数科1・2学年
平成14年11月	山口大学理学部での体験学習※①(半日) 数学・物理・情報科学・生物・化学・地球科学の6コースに分かれ、大学院生による研究紹介と実験デモ、ならびに体験学習	理数科1学年
平成14年12月	地学巡検(1日) 山口大学理学部より講師を招き、岩国市喜和田鉦山へ巡検	普通科2学年 地学選択生徒
平成15年3月	出前総合大学※② 市内4高校と3大学合同による講義・実技講習、1コマ90分の31講座より2講座を選択聴講することが可能。形式は、講義・実験・実習・レッスンなど多様	市内高校を含む1・2学年の希望者 (C高校からは20人参加)
平成15年5月	地学巡検※③(1日) 山口大学理学部教授と大学院生5人による指導で、阿知須町、山口市秋穂二島、山口市仁保、阿東町長門峡へ巡検	理数科1学年
平成15年5月	大学出張講義(模擬講義) 九州大学理学部教授による学部・学科説明と出張講義「地球温暖化とその影響」	全学年の希望者
平成15年6月	大学出張講義(模擬講義) 早稲田大学政経学部教授による模擬講義「経済学の環境問題への取組」	全学年の希望者

平成 15 年 6 月～	大学との共同実験※④ 山口大学の協力による遺伝子実験 6 月－大学の学生の協力で基礎技術の習得 8 月－山口大学遺伝子実験施設で実習 10 月－農学部との間で、D 高生の学内での遺伝子実験に関する学修についての協議 11 月－農学部にて学修許可申請 以後継続中	理数科 1 学年の希望者
平成 15 年 8 月	サイエンス・パートナーシップ・プログラム (研究者招聘講座) 愛媛大学教授による講義「熱の伝導と数学」	理数科 2・3 学年の希望者

(3) 生徒のアンケート結果と生徒の様子から

① 山口大学理学部での体験学習について (理数科 1 学年 計 37 人 数字は実数)

実験について興味をもてたか。 (a) 大変興味をもてた…………… 6 (b) 興味をもてた…………… 2 6 (c) どちらともいえない…………… 5 (d) もてなかった…………… 0	授業に興味をもてましたか。 (a) 大変興味を持てた…………… 6 (b) 興味を持てた…………… 2 3 (c) どちらともいえない…………… 8 (d) もてなかった…………… 0
理学部に興味をもてたか。 (a) 以前からの興味が深まった… 5 (b) 今回の体験で興味が出た… 2 1 (c) 今のところ興味はない…………… 1 1	体験学習の内容について(複数選択可) (a) 学部全体の設備・機器を見たい…………… 1 6 (b) 時間・内容ともによい…………… 1 0 (c) もっと実験に時間をかけてほしい…………… 1 0 (d) 1 日をかけて体験したい… 1 4 (e) 2 つ以上の分野に参加したい…………… 4

整った設備の下、大学院生が自由に研究に打ち込んでいる様子を見て、強い印象を受けたようである。大学や学部についての具体的なイメージもつかむことができたように見受けられた。

② 出前総合大学について

市内の T 高校を中心に、4 高校総計 585 人の生徒が参加し、近隣の 3 大学 (山口大学、山口県立大学、山口芸術短期大学) の計 45 人の教官を招き、講義・実習・公開レッスン等、計 31 講座を開講した。講座の内容は下記の通りである。

- 1 手遊び・指遊びの世界
- 2 外国，外国人，外国語
- 3 マスメディアと私たちの生活
- 4 進化する電池～ケータイから電気自動車まで
- 5 医学部医学科への志望者に望まれるもの
- 6 大学の数学を学ぶ者に立ちはだかる二つの壁 - 理論と抽象化
- 7 動物の行動とコミュニケーション
- 8 山口県の活断層と地震
- 9 心理学入門－心理学への期待と誤解
- 10 遺伝子組み換えは21世紀の食料・環境問題のキーテクノロジー
- 11 やまぐち学を学ぼう
- 12 高校生のための教育学入門
- 13 21世紀人類の食糧は大丈夫か？ あなた達への提言
- 14 デザインと生活
- 15 ピアノ公開レッスン
- 16 村上春樹と《最初の夫の死ぬ物語》
- 17 日本語をみつめて
- 18 刑事ドラマを楽しく観るために－刑事法の基礎－
- 19 遺伝子DNAと酵母菌
- 20 どうなる？ゴミ問題！いま私たちがなすべきこと
- 21 最近のHIV感染症の動向
- 22 マンモスの復活に向けて
- 23 地域の歴史を考える
- 24 魚類における外来種問題
- 25 「脂肪がつきにくい油」ってどんな油？－油の不思議－
- 26 米国の文化について
- 27 母性を科学する
- 28 地域福祉とソーシャルワーカーの役割
- 29 電子オルガン公開レッスン
- 30 コンピュータ・グラフィックス入門
- 31 陶芸制作実技講座

参加したC高校生20人のアンケート結果より

〔数字は%，（ ）内は参考までにT高校生の結果％〕

意欲的に取り組みましたか。	理解は深まりましたか。
(a)はい 68 (54)	(a)はい 79 (55)
(b)まあまあ 32 (44)	(b)まあまあ 21 (43)
(c)いいえ 0 (2)	(c)いいえ 0 (2)

興味・関心は深まりましたか。	進路選択の参考になりましたか。
(a)はい 79 (65)	(a)はい 74 (65)
(b)まあまあ 21 (31)	(b)まあまあ 26 (31)
(c)いいえ 0 (4)	(c)いいえ 0 (4)

T高校中心の取組みで会場もT高校であったため、C高校からは1・2学年が僅か20人参加しただけであったが、それだけ意欲に満ちた生徒たちであったせいか、アンケート結果では否定的な意見は全くなく、興味・関心も深まったようである。初めての試みであったので、講座の内容や生徒の希望の取り方などの点に反省点も残ったが、これを機に高校・大学双方の窓口が明確化した。

また、市内の高校生同士の交流も生まれたことで、今後の連携の推進の方向が定まった。平成15年度末には、市内の3高校を会場として、さらに拡大して実施した。

③ 地学巡検について〔理数科1学年 計38人 数字は実数〕

この巡検に参加してよかったですか。	内容に興味がもてましたか。
(a) そう思う……………36	(a) 大変興味を持てた……………7
(b) どちらともいえない… 2	(b) 興味を持てた……………23
(c) そう思わない……………0	(c) どちらともいえない……………7
	(d) もてなかった……………1
教授の説明について理解できましたか。	巡検の内容について(複数選択可)
(a) 難しく理解不可能… 1	(a) もっと時間をかけたい……………17
(b) 難しかったが理解可能…23	(b) 時間・内容とも適当……………15
(c) 適当で理解可能……………14	(c) 別の場所にも出かけた…20
(d) 易しすぎる……………0	(d) もっと詳しく説明してほしい…9
	(e) 地学に興味があった……………11

少人数のグループごとに一人の専門の大学院生が付きっきりで指導したため、具体的な解説を受けることができ、生徒の満足度が高かったものと思われる。

また、自信をもって説明する院生の姿に、進学に対する期待や意識、学問に対する憧れを抱いた者も少なくないようである。

④ 大学との共同実験について

平成14年度末、C高校理科教諭と山口大学医学部内にある遺伝子実験施設の助教授との間で、高い関心をもつ少数の高校生を対象に遺伝子実験の原理や基礎的技術を教える機会を作る話が急速に持ち上がった。

平成15年度に入って生徒に呼びかけを行い、受講を申し出た理数科1年生2人が、夏休みに大学内の実験施設に出向いて実験に参加した。現実には、C高校内の実験施設が整っていないことや、医学部内の施設に通うには距離が遠いこと、実験のレベルが高校生には難しすぎるなど、課題が多く、一時中断することになった。

一方、平成15年9月に山口大学農学部が高校生を対象に、『遺伝子情報を読む』というセミナーを開催し、それにC高校からも前述の実験に参加した生徒1人も含

めて5人が参加したことがきっかけで、農学部内の1研究室との交流が始まった。その結果、農学部では「科目等履修生」の形をとってC高校生を受け入れることとなり、平成15年11月に正式に農学部長から学修許可が下り、先の理数科1年生が11月下旬より週2回程度(平日の夕方)、農学部に通い、遺伝子実験に関する原理と基礎技術を学ぶこととなった。平成15年度は、大学3年生の後期実験講座に参加し、その後、4年生や大学院生が研究室で行っている実験に参加している。

今回は1人のみの実験参加であったが、将来的には同様な関心をもつ生徒を校内で研修させ、大学でも指導を受けるということで、生徒が校内における課題研究の指導的役割を果たせるようになることも期待したい。今後の成果が待たれるところである。

4 おわりに

(1) 成果

ア 主体的な学びの態度の育成

大学での講義を生で体験し、教官や大学院生と交流できたことで、学問への興味・関心を高めたばかりでなく、大学での研究の基礎的態度の養成につながったように思う。特に、実習・実験を多く取り入れることが有効と思われる。

イ 進路意識の形成

元々、特定の分野に関心があったものの、将来の自分像がつかめず、何学部・何学科に進むべきなのか、明確な答えが出せなかった生徒たちの間から、「漠然としていた学部の具体的なことがわかった」「もっとほかの学科も見て進路を考えたい」「高校でもっと知識を身に付けて大学に進みたい」といったような積極的な進路意識が見られるようになった。

(2) 課題

ア 時間、時期の設定

単発的な出張講義や半日ないし1日のみの体験学習では、十分に学問を味わったとはいえない。生徒たちからも、「もっと長い時間の実験等を体験したい」といった声が聞かれる。今後は、遺伝子の共同実験に見られるような、通年での受講や、数日間をかけての幅広い集中講習などの形を求めるべきであると考えます。

イ 分野の拡大

現在までのところ、C高校では理数科中心の取組みであり、連携先も理学部や工学部が中心で、理工系に関してはある程度のノウハウがつかめてきたように思う。今後は、文科系学部とも積極的に連携し、多様な生徒のニーズに応え、多くの分野から選択できるような方法を模索すべきであろう。

ウ 相互の教員同士の連携

継続的な高大連携を行うためには、内容の選定ないし方法について大学側との綿密な事前打ち合わせが必要である。予め高校側のニーズに応じたテーマを共同で決定し、講義や体験学習の前に高校で教養講座的な指導を行うこと、また、事後の補足指導など、相互の教員同士のきめ細かな連携が効果的と考えられる。

エ 単位の認定と評価

生徒の学問への関心を一時的なものに終わらせないためには、学修の成果を単位として認める制度の導入が是非とも望まれる。平成15年3月に県教委が示した「学校外の学修における単位認定に関する取り扱い要領」によれば、“原則として1単位時間を50分とし、35単位時間をもって1単位とする”という規定があり、それに見合う内容、さらに学校の内規の見直しも必要である。

平成16年1月に、C高校とE大学の間で、山口県では初めて単位認定の連携協定が結ばれた。それによると、来年度夏季休業中にC高校理数科2年生がE大学において先端技術体験学習を受講（2泊3日の予定）し、その学修成果を単位として認定することになった。また、前述のF大学農学部における遺伝子実験についても、来年度以降の単位認定を認める方針で協議が進んでおり、今後の動きが注目される。これに伴って、生徒の意欲向上につながる評価の在り方が今後の検討課題となる。

オ 展望

現在の段階では、学ぶ意欲やモチベーション向上を図る高校側と、受け入れの大学側のニーズは必ずしも合致していない場面が見受けられる。携わっている高校教員からは「やればやるほど高校教育と大学教育のギャップを感じる」、「双方の思いが空回りしている」といった声も聞かれる。

さらに、現在では高校の課外活動の一環として位置付けられているため、経済的・時間的な課題もあり、ソフト・ハード両面からの連携支援を考えていかねばならない。

今後、高校教育と大学教育が互いのハードルを越えて、生徒にとっての真の学ぶ意欲向上に向けて、一層協力する態勢づくりが望まれる。

5 参考資料

中央教育審議会答申（1999年12月）「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」

文部科学省ホームページ「平成14年度版高等学校教育改革に関する推進状況」

河合塾ホームページ（Kei-net）「高等教育が動き出した」

中留武昭監修 福岡県立城南高校編著「生徒主体の進路学習ードリカムプラン」

④ 職業人との座談会による職業意識の向上

1 はじめに

高等学校での職業指導は、従来、主に就職希望者を対象に行われ、進学希望者は職業指導よりも受験指導が中心であった。しかし、社会の変化に伴い、大学卒業後に進路変更をする事例が増えてきた。進学してから職業を考えるのではなく、自分の希望する職業に就くための手段として進学を考えることが大事になってきた。そこで、生徒の職業に対する意識を高め、将来の進路決定に役立てるために、実際に各分野で活躍しておられる職業人を招き、その経験談や、その職に就くための資格や進路等についての話を聞く機会を設けるため、1年生を対象に「職業人との座談会」を実施した。また、毎年継続して実施するために同窓生・保護者に呼びかけて「D高キャリアネットワーク」として登録してもらい、その中から講師を依頼するという方法をとった。

2 実施までの流れ

(1) 平成14年7月

生徒に対して150の職業の中から、話を聞きたい職業を一人5種ずつ選ばせる。この結果から希望者が5人以上いる職業について、講師を招くことができるか検討した。

(2) 平成14年8月～

保護者、同窓会、ホームページ等で「D高キャリアネットワーク」への登録を呼びかけたところ、次の職種で41人の登録があった。

登 録 職 種	
・ 司法書士	・ 商社勤務
・ 養護教諭	・ 薬剤師
・ 保育士	・ 看護師
・ 小学校教諭	・ 医師
・ 中学校教諭	・ 地方公務員
・ 大学教員	・ 国家公務員
・ 音楽教室講師	・ 外交官
・ 土木系研究・技術者	・ 通訳
・ 建築技術者	・ 新聞記者
・ ホテル勤務	・ 税理士
・ ツアーコンダクター	・ 公認会計士
・ 科学系研究・技術者	・ 銀行員
・ 法人営業	・ システムエンジニア
・ 販売担当者	

(3) 平成14年10月

開講する講座と講師を決定し、生徒に参加希望講座のアンケートを実施した。講師に聞いてみたい質問をアンケート調査し、事前に講師に送付した。

講師依頼状の例

「職業人との座談会」講師の皆様へ

このたびは「職業人との座談会」の実施に対し、格別の御配慮をいただき、ありがとうございます。下記の要領で実施いたしますので、よろしくお願いいたします。

1 日 時

2 当日の日程

3 座談会の流れ

(1) 講師紹介

(2) 講師による自己紹介

(3) これ以降につきましては、次のような内容でお話してください。

ア この職業に就くのに、どのような進路が考えられるか。また、実際どのような進路で自分はこの職業に就いたか。

イ この職業に就くのに必要な資格、取っておいた方が有利な資格にはどのようなものがあるか。また、その資格はどのようにして取得するのか。

ウ この職業に就こうと思った動機は何か。いつ頃、この職業に就こうと思ったか。

エ この職業に就いてからの苦労話や失敗談は何か。この職業に就いて良かったと思えるのはどんな瞬間か。

オ この職業に就こうと思っている高校生に対するアドバイスは何か（こんなことを日頃から意識してほしい、高校時代にこの程度の力は付けておいてほしいなど）。

カ 生徒からの質問（この文書に添えてある別紙を参照ください）に対する回答

例・今までにどんなところに行って、どんなことをされましたか。

- ・今のうちにやっておくといいいことがありますか。
- ・どうしてこの仕事を選ばれたのですか。
- ・英語が話せた方がいいですか。
- ・この仕事についてうれしかったこと、つらかったことは何ですか。
- ・どんな人がツアーコンダクターに向いていますか。

3 実施要領

(1) 目的

実際に各分野で活躍しておられる方を招き、その経験談や、その職に就くための資格や進路等についての話を聞くことにより、生徒の職業に対する意識を高め、将来の進路決定に役立てる。

(2) 日時

平成14年11月7日(木) 第6・7時限

(3) 当日の日程

13:30	講師集合(校長室)
13:40(5限終了)	生徒は移動開始
	代表生徒は校長室前へ(講師案内のため)
13:50~13:55	開会行事(講師紹介等)
13:55~14:45	座談会(生徒からの質疑・応答を含む)
14:50	講師は校長室へ 生徒は各HRへ
14:50~15:30	レポート作成、発表

(4) 開講講座

職 業	参加生徒	職 業	参加生徒
司法書士	6人	販売担当者	9人
養護教諭	4人	商社勤務	7人
保育士	10人	薬剤師	23人
小学校教諭	4人	看護師	6人
中学校教諭	20人	医師	10人
建築技術者	7人	地方公務員	19人
ホテル勤務	7人	新聞記者	6人
ツアーコンダクター	8人	銀行員	10人
化学系研究・技術者	9人	システムエンジニア	21人
		合 計	186人

(5) 座談会後の指導・処理

- ア レポートの作成、発表(当日、各HRで)
- イ レポートのまとめ(担任)
- ウ レポートをまとめたもの及び礼状を講師に発送

4 成果と今後の課題

生徒の感想は、「自分の進路選択に役立った」という意見がほとんどであったが、司会を生徒にさせたため、講座によって質問等がたくさんでたところと、そうでないところの差が大きかったようである。今後は、座談会の内容や進行を工夫していく必要がある。

また、講師からの感想の主なものは、次のようなものであった。

- ・ 2年生、3年生にも好影響を与えるでしょう。各学年毎に実施されたいかがでしょう。
- ・ こういう機会が与えられることは、これから進路を決める生徒さんにも職業人にも、とても良いことだと思いました。私たちも改めて自分の仕事を振り返ってみることができ、誇りをもって後継者となるべき人を育てなければならぬと思いました。
- ・ 時間があっという間に過ぎましたので、用意していた内容の3分の1ぐらいしか話せませんでした。生徒は大変まじめで良かったと思います。よく話を聞いてくれました。質問は出席者が少なくとも1人1つぐらいはした方が良いと思います（リーダーの生徒が主に質問しましたが）。
- ・ 一方的にこちらが話して終わりました。お互いに意見交換をしながら進めるともっと内容も深まると思います。
- ・ 講師が教壇に立ってではなく、生徒と同じ机で向かいあって（同じ目線で）座談会を行えば、意見や質問がもっと多くでるのではないのでしょうか。

5 おわりに

これまでの高等学校の進路指導は、大学等に合格させることに主眼が置かれていたが、社会の変化とともに、生徒の目的意識が問われるようになってきており、大学を卒業したあとのことまで考えて進路指導をすることが必要になっている。

今回実施した「職業人との座談会」は、生徒が自分の将来を考えるのに参考となるだけでなく、目標を持つことにより、自ら学ぼうとする意欲を喚起することにもなると思われる。

⑤ 学校行事と教科指導のリンク

1 「E商デパート」と「総合実践」のリンクのねらい

「E商デパート」は、全校生徒が参加して生徒自身による店舗の企画・立案のもとに実際に店舗経営を行う体験学習であり、仕入れから販売、販売促進、経理、決算に至る一連の経営活動を行う学校行事である。

このことを通して、「商業（ビジネス）における〈生きた〉知識や技術の一端にふれ、本校で学ぶ意義を自覚し、学んだ知識・技術の定着・応用を図る。また、実際のビジネスを遂行していく上での困難や喜びを味わい、ビジネスに関する能力や態度を養う」ことをねらいとしている。

3年生にとっては、今まで本校で学んだことの集大成を地域社会に披露する場である。具体的には、本校で学ぶ「人（労務管理）」「物（購買・販売・管理）」「金（財務管理）」「情報（情報管理）」に関する知識、技術の実践の場である。1、2年生にとっては、今学んでいることの意義付けと、学ぶ意欲の向上に結び付くものである。

3年生は、実施後の反省の中で毎年のように、ビジネスの厳しさや自分たちの認識の甘さを実感するとともに達成感や充実感を味わい、社会に出ていくにあたっての意気込みのようなものを示している。また、1、2年生は、3年生のリーダーシップを体感し、3年生に対する尊敬、憧憬の念と自分たちが今何をすべきかを再確認しているようである。

一方、商業の専門科目である「総合実践」は、科目の目標が「『商業』の各分野に関する知識と技術を実践的活動を通して総合的に習得させ、ビジネスの諸活動を主体的、合理的に行う能力と態度を育てる」であり、一般的には、模擬取引中心の授業内容が展開されることから「E商デパート」の趣旨と重なる部分が多い。

以上のことから「E商デパート」と「総合実践」をリンクさせることにより、次のような効果が期待できる。

- (1) 「総合実践」の授業をより実践的に授業展開し、これまで学んできた知識、技術をどのようなビジネスシーンで、どのように活用できるのかということをより明確にできる。
- (2) 「E商デパート」を体系的、計画的に準備し、生徒の考えをより反映した行事にすることができる。
- (3) 2つをリンクさせることによる相乗効果から、双方において、より高い意欲を生徒から引き出すことができる。
- (4) 授業時数確保の観点からも特別に設定する準備時間を最小限にできる。

2 「E商デパート」の概要

「E商デパート」は、専門高校（商業高校）ならではの特色ある学校行事として企画・開催されており、その概要は、以下のとおりである。

(1) 趣旨

本行事は、全校生徒が参加して生徒自身による店舗（約20店舗）の企画・立案のも

とに、実際に店舗経営を行う体験学習であり、最寄り品や買い回り品等生活用品の仕入れから販売、販売促進、経理、決算に至る一連の経営活動を行う。

これらを通して、商業（ビジネス）における「生きた」知識や技術の一端にふれ、本校で学ぶ意義を自覚し、学んだ知識、技術の定着、応用を図る。

また、実際のビジネスを遂行していく上での困難や歓びを味わい、ビジネスに関する能力や態度を養う。

更には、地域社会との連携を図ることにより、「開かれた商業教育（ビジネス教育）」を目指している。

（２）学習目標

- ア 商業に関する知識、技術、態度の伸長を図る。
- イ 自己の能力、適性、進路を発見する。
- ウ 創造と働く喜びを体得する。
- エ 望ましい勤労観、職業観を身につける。
- オ 学校と地域社会の結びつきを深める。

（３）店舗運営上の留意点

- ア 接客マナーの知識や態度を、実践活動を通して身につけるとともにその徹底を図る。
- イ 取引先との交渉や店舗販売を通してコミュニケーションの重要性を自覚する。
- ウ 原価の重要性を認識し、原価率低減への創意工夫を図る。
- エ 生徒一人ひとりが自らの役割を自覚し、積極的に取り組むことにより協働による目標実現に努め、互いに尊重し合う。

（４）「Ｅ商デパート」の特色

- ア 各店舗の構成員は、１・２・３年生からなる縦割式で、３年生の指導のもと、上級生と下級生が協力して店舗の運営にあたる。
- イ 先輩からのファイルや製作物等を引き継ぐ教訓書とし、更なる改善を図り、後輩に引き渡す。

（５）「Ｅ商デパート」の歴史

「Ｅ商デパート」は昭和60年度より開催され平成15年度で18回を数えることになる。その間、我が国の経済事情は、バブル絶頂期からバブル崩壊、平成大不況と移り変わり、厳しい情勢にある。これに符合するように本行事もバブル絶頂期に売上高と来客者数のピークを向かえ、その後ともに減少してきた。ただ、本行事の趣旨は、前述のとおりであり、生徒の開催に向けての強い熱意と創意工夫により、支えられている。

平成6年度より、商業の専門科目「総合実践」を「Ｅ商デパート」の準備をかねた学習内容と指導計画に改め、授業と学校行事のリンクを図った。当時は、週5日制が段階的に導入されはじめて3年目で、各校においては、学校行事の精選が進められていた。本校においても学校行事についての検討がなされたわけであるが、同時に商業科においては、より実践に近い「総合実践」の教育内容が検討されていた。本校では、これらを好機ととらえ、「Ｅ商デパート」と「総合実践」をリンクさせたわけである。

3 本校の「総合実践」について

(1) 「総合実践」の科目目標

学習指導要領では、当該科目の目標を「商業の各分野に関する知識と技術を実践的活動を通して総合的に習得させ、ビジネスの諸活動を主体的、合理的に行う能力と態度を育てる」とある。

これをうけて本校の「総合実践」では、3年生の全クラスを対象に一斉授業を展開しており、これまで商業の各科目で習得した知識・技術を活用し、次のことを目標としている。

ア ビジネスの活動を実践的に体験することにより、経営活動に必要な知識・技術を実感し、活用することにより、経営活動を主体的、合理的に行う態度と能力を身につける。

イ 実践的な学習を通して、自主性、創造性、積極性、計画性、責任感、誠実性、また、言葉遣いやビジネスマナーなど、業務に従事するために必要な資質を身につける。

ウ 様々なビジネス活動について実践的な経験を重ねることによって、各自の個性に適した職業を選択し、社会に貢献するための意識の高揚を図る。

(2) 学習上の心構え

ア 自主的に仕事を計画、実施し、反省を次に活かす。

イ すでに学習した知識、技術を総合的に活用するよう努める。

ウ 模擬社会における自分の立場を認識し、責任の遂行に努力する。

エ 常に経営事務の能率化と改善に努力する。このため、各種の事務機器を有効に活用する。

オ 取引先におよぼす迷惑や影響を考え、欠席・遅刻をしないようにする。

カ 机上は整理し、執務しやすいように工夫する。

キ 仕事中は、静粛にし、言葉遣いに気をつけ、無用な雑談や私語をしない。

ク 服装、動作に気をつけ、他人に迷惑をかけたり、不快感を与えないようにする。

ケ 備品その他の事務機器は丁寧に正しく取り扱い、破損・紛失のないように注意する。

(3) 執務上の一般規定

ア 実践室への入室は、出勤と見なして、始業前にタイムカードに刻印する。

イ 出勤後、授業時間は就業時間であることを自覚し、言葉遣いや態度に留意する。

ウ 本時間中は、各会社用の名札を着用し、始業時は、「おはようございます。」終業時は、「お疲れさまでした。」と挨拶をする。

エ 作成した書類・文書・帳票類は、すべて検印をうける。

オ 実践日ごとに、仕事の計画を立て、合理的に勤める。授業終了10分前には業務をおき、業務の遂行状況、次の予定、取引内容、反省、感想などを業務日誌に記録する。

カ 各店所有の備品の使用・保管には細心の注意を払い、共有するものは教師の許可を得て使用する。（私物と混同しないこと）

キ 必要以外の立ち歩きは、禁止する。他店との連絡は、電話を使用する。

4 「総合実践」の年間指導計画（「E商デパート」の準備工程）

月	学 習 内 容 （指導内容）		
4月	1	必要物品配布 （要項、紙ファイル、帳簿、タイムカード、名札等）	ビ ジ ネ ス マ ナ ー （ 販 売 七 大 用 語 ）
		「総合実践」の概要説明（ねらい、心構え、実践規定）	
		社会人としての身だしなみ、数字の書き方、ファイリング技術	
		開始記入（総勘定元帳、開始貸借対照表）	
5月	2	期中取引記入（総勘定元帳、補助簿）	
		電話応対	
		期中取引記入（総勘定元帳、補助簿）	
		模擬取引（演習1） 文書作成上の諸知識と作成	
6月	3	見積依頼書、見積依頼状、封筒の作成（速達）、通信費の会計処理	
		模擬取引（演習2）見積書の受領 注文書、注文状の作成、封筒の作成（書留）	
		商品包装技術	
		模擬取引（演習3）見積依頼書の受領 見積書、見積案内状の作成、封筒の作成（速達）	
7月	4	模擬取引（演習4・5）注文請書、注文書の受領 注文請書、注文礼状の作成、封筒の作成（書留）	
		模擬取引（演習6・7） 納品書、請求書、出荷案内状の作成 小切手の作成（運送料）、会計処理	
		模擬取引（演習8・9）商品受領書の受領 仕入れ、売上の処理、月末処理 買掛金の支払い（小切手作成、振込依頼書記入）、会計処理 「E商デパート」スローガンアンケート調査	
		模擬取引（演習10・11） 売掛金回収（領収書、送金礼状の作成） 収入印紙の取り扱い、領収書受領、会計処理 「E商デパート」企画アンケート調査	
8月	5	進捗調整、各店舗メンバー決定（3年生8名） 自己評価、反省	
9月	6	期末考査	
1学期は、これまで学んできた文書作成、証憑作成、取引認識と会計処理に重点を置き、2学期以降の取引先との実際のやりとりが円滑に進むよう基本技術の定着を図る。			

ビ
ジ
ネ
ス
マ
ナ
ー
（
販
売
七
大
用
語
）

月		学 習 内 容 (指導内容)	ビ ジ ネ ス マ ナ ー (販 売 七 大 用 語)
2	9	各店舗メンバー確認(1・2年生各6名)、店舗名決定 仕入先取引依頼文書作成 前年度実績確認(経営分析確認) 1・2年合同店舗別会議の内容打ち合わせ	
		売上目標検討(店長、副店長、仕入、販売) 取扱商品検討(店長、副店長、仕入、販売) 店舗設計検討(店長、副店長、仕入、販売) イベント企画検討(店長、演出) 店舗装飾企画検討(演出) 帳簿、集計表枠作成(経理) 前年度引継物品確認(係り別)	
		仕入先訪問依頼文書作成、仕入先訪問計画検討(店長、副店長) 売上目標決定(店長、副店長、仕入、販売) 取扱商品検討(店長、副店長、仕入、販売) 店舗設計決定、店舗設営機材請求(店長、副店長、仕入、販売) イベント企画検討(店長、演出) 店舗装飾企画検討、店舗装飾用消耗品請求(演出) 包装紙・袋請求(販売) レジ・お買上伝票請求(経理)	
		仕入先訪問計画検討、計画書提出(全員) ○訪問日時の調整 ○訪問人員割り振り ○経路、交通手段、時間 ○交渉内容検討(搬入、搬出、決済方法、取扱商品、借用物等) 店舗装飾用消耗品受取(演出)	
学	10	仕入先訪問実施(全員) 仕入先訪問報告書作成(全員) 仕入先訪問報告および調整(全員)	ビ ジ ネ ス マ ナ ー (販 売 七 大 用 語)
		取扱商品検討(店長、副店長、仕入、販売) POP作成の基本(全員) 店舗装飾作成、イベント案検討準備(演出) 仕入一覧表・売上一覧表の枠作成(経理)	
期	11	放課後の残業について(全員) 館内放送原稿作成(店長) 取扱商品検討・決定、仕入数量決定(店長、副店長、仕入、販売) 販売価格検討・決定(店長、副店長、仕入、販売) 店舗装飾作成(演出)、POP作成(全員) 仕入一覧表・売上一覧表の枠作成、釣り銭請求(経理) 開催当日業務分担ローテーション(店長、副店長) 各係の未処理事項の確認および処置、各係の連絡調整(全員)	

2	11月	「E商デパート」全体準備（会場設営，店舗設営，商品搬入検品等） 「E商デパート」開催初日（一斉朝礼，店舗別朝礼，営業，1日目反省） 同 2日目（店舗別朝礼，営業，検品・返品，店舗解体） 実施の翌日（会場撤去，返品，店舗別反省会議，自己評価）
	月	店員評価（店長），取引先礼状作成送付（副店長） 次年度引継物品記録・保管（各係），教室清掃（演出） お買上伝票整理，売上高集計，正味仕入高算定，諸経費集計（経理） 営業報告会準備（店長）
	12月	営業報告会（各店長），店舗別決算書作成（経理） 仕入一覧表・売上一覧表作成，仕入代金照合，（経理）
	学	2学期は，「E商デパート」の具体的な準備および実施となる。各店舗における係り分担は，生徒の得手不得手，適性から生徒同士で決定する。各店舗とも本年度の目標，企画については，先輩が残してくれている資料と1，2年次の経験をもとに立案している。 仕入先訪問は，実社会にふれるよい機会で，その後の生徒自身が進める交渉も円滑になり，生徒の成長がうかがえる。 営業報告会は，事前，実施当日，事後の内面的な動きも報告され，生徒同士が共感を得る場ともなっている。
期		

3	月	学 習 内 容 （指導内容）	ビ ジ ネ ス マ ナ ー
	1月	各店舗経営分析（全員） 売上構成比，売上成長率，ファンチャート，ABC分析 ポートフォリオチャート等	
	同上	同上	
	前年度との比較分析（全員）	前年度との比較分析（全員）	
	1年間の感想・反省（全員） 外部講師による講演（卒業後の心構え等）	1年間の感想・反省（全員） 外部講師による講演（卒業後の心構え等）	
学 期	3学期は，おもに経営情報管理の手法を取り入れた経営分析に時間をあてて，分析手法の具体的な活用により，数値で成果を測ることによる客観的評価など，経営分析の意義を実感できる。 この資料と営業報告資料，および次年度引継物品記録が，次年度3年生に大いに役立つ。 年間通してのビジネスマナーの指導は，生徒の行動様式に大きく影響しているように思われる。		

5 評 価

科目の性質上，定期考査は1学期末考査のみ実施している。内容は，1学期間の基本取引（模擬取引）に関係するもの，「総合実践」の規定・心構え，ビジネスマナーに関することなど，基本的な内容を知識として習得しているかを問いものである。1学期末

の評価は、これに、提出物によるファイリング技術、書類等の作成状況、授業中の取組状況等を4つの観点を具体的にした評価項目にあてはめ、総合的に評価する。なお、授業中の取組み状況については、担当教員が、考課表を作成する。

2学期以降は、引き続き考課表を作成し、提出物によるファイリング技術、書類等の作成状況の評価する。「E商デパート」の準備状況についても、店単位、係り単位、個人単位で評価し、2学期の評価に含める。なお、「E商デパート」の実施状況については、評価表により、各店の担当教員（全員）が、項目別に評価する。

3学期においても基本的には、同じである。年間の評価は、1学期評価から3学期評価までを総合して評価をする。

評価については、「指導と評価の一体化」を目指した新たな評価システムを確立し、評価活動自体が「総合実践」の充実、及び「E商デパート」の発展につながるようにすることが望まれる。

6 成果と課題

成果について冒頭の「1「E商デパート」と「総合実践」のリンクのねらい」に照らして考察する。

- (1) 「総合実践」をより実践的に授業展開し、これまで学んできた知識、技術をどのようなビジネスシーンで、どのように活用できるのかということをより明確にできる。

校内に限らず、実社会も学習の場とすることから、緊張感をもって授業に臨んでいる。校内での演習・講習も、実践に結びつけなければならないので真剣そのもので、張りつめたものを感じることもある。

また、実体験を通して今まで学んできたことの重要性や実社会で活用できたことの喜びを味わい、失敗を通して自分に足りなかった部分を実感している。

- (2) 「E商デパート」を体系的、計画的に準備し、より生徒の考えを反映した行事にすることができる。

年間指導計画にあるように「E商デパート」の具体的な活動の始めは、スローガンアンケートと企画アンケートからである。スローガンを考えることにより今年の「E商デパート」について考えるきっかけを作り、企画アンケートにより生徒の新たなアイデアを募集し、実現可能かどうか検討する。店舗の種類・数・配置、イベント企画、販売促進等についていろいろな意見が寄せられる。18回の開催を経て、取扱商品は、初回の18部門から本年は31部門に増やす反面、店舗数においては初回の19店舗から最高24店舗まで増やした後、バブル経済崩壊とともにその数を減らした。ここ数年は、20店舗で落ち着いていたが、本年19店舗まで合理化された。

平成15年度の新しい取組みの例としては、地元の祭りに市場調査と販売促進をかねたアンテナショップの出店、バラエティ店における自動車販売、アトラクションとしての

吹奏楽部によるミニコンサート等があげられる。

幸い、平成15年度は、初日の雨にも拘わらず、来客者数がここ数年になく多く、昨年より約10%も増加した。取組みの成果として、生徒は、ある種の充実感と成功感を共有し、この行事に対する愛着を増したようである。

(3) 2つをリンクさせることによる相乗効果から、双方において、より高い意欲を生徒から引き出すことができる。

(1) と (2) の成果からいえることであるが、実体験を前提とした授業展開と、教育の場において生徒のアイディアや意思決定等を尊重する場面をもち、それらのことを生徒自身が実感することにより、生徒の学ぶ意欲は大いに向上する。

(4) 授業時数確保の観点からも特別に設定する準備時間を最小限にできる。

以前は、「E商デパート」開催のため、実施日直前の1週間の授業や年間を通じてのLHRに大変なしわ寄せがきていた。また、放課後を長期に渡り準備にあて、他の活動に支障をきたすこともあった。「E商デパート」と「総合実践」をリンクさせてからは、前々日の午後と前日を全校あげての準備にあて、放課後は、3年生のみ進捗状況に応じて1週間以内で準備・調整をしている。

以上のように、冒頭のねらいについて、ある程度の成果が得られている。また、副次的ではあるが、1、2年生にも授業中、折に触れて「E商デパート」や「総合実践」を例に出すことにより、今学んでいる事についての意義付けや意欲の向上に役立てる事ができる。

最後に今後の課題として、現在の経済情勢の中、協力業者の確保や来客者数減少に歯止めをかけるための工夫があげられる。

「E商デパート」は、仕入先も含めて多くの協力業者の理解と支援で成り立っており、これまでも多大な苦勞と迷惑をかけている。厳しい経済情勢のため、協力を得ることが難しく、当初の計画を断念せざるを得ないこともある。賛同を得るために、今後一層、働きかけをする必要がある。

来客者数については、平成15年度は、増加したが、一時的なものに終わらせないようにしなければならない。

そのためにも、生徒と教員が共に汗しながら商品以外に「E商デパート」としての付加価値をつけ、お客様に満足していただけるもの生み出す必要がある。

7 参考文献

高等学校学習指導要領解説 商業編 文部省 (平成11年12月)

⑥ 個に応じた教育システムの導入

1 はじめに

(1) 本校の状況

本校は、伝統ある工業高校として県内各地域から優秀な人材が集まり、工業教育の牽引校として永くその役割を果たしてきた。

現在、機械系、電子機械系、電気系、化学系の4つの学科があり、進路状況は年度によって若干変動はあるが、就職が7割、進学が3割という状況である。こうしたことから、これまでの教育課程は卒業後すぐに産業界で活躍できる技術者を育成することを目標としてきたため、就職希望者を中心としたものであった。

(2) ねらい

本校への入学を希望する生徒の受検時の状況を見ると、志願登録の段階と受検の段階とで希望学科を変更している生徒がいる。そこで、本校に入学した生徒について、志願の段階から入学までの追跡調査を行った。

その結果、学校全体として見ると当初から本校に関心を寄せて入学する生徒が約9割、そのうち、約7割の生徒は希望の学科に入学している。しかし、当初の希望通りの学科へ入学できなかった生徒が約2割、さらに他校を希望していた生徒も僅かではあるが本校へ入学している。そのため、生徒の意欲を高めるためには、生徒が入学時にもっている本校教育に対する期待に応えるとともに、その希望や目標を叶えるために、意欲的に学習に取り組むことができ、各学科の基礎・基本を確実に習得させるとともに、個性や特性に応じて幅広く選択できる科目を設置した教育課程を編成することが重要であると考えた。

そこで、これらの状況を踏まえて検討した結果、本校の教育システムの方針を以下のようにした。

ア 当初の希望の学科に入学した生徒に対しては、小学科制を維持しながら基礎・基本の確実な定着を図るとともに専門性の伸長を図る。

イ 当初の希望を変更して入学した生徒に対しては、学科の枠を越えた選択の可能性を残す。

ウ 専門性の向上を図るために、大学進学を希望する生徒には大学入学及び大学入学後の学力の育成を支援する。

エ 幅広い選択制を導入した柔軟な教育課程を開発する。

これらのことにより、生徒自身が主体となって意欲的に学習に取り組み、生徒の能力や特性が高められることを目指した。

2 本校の教育システム

(1) 総合選択制の導入

これまでは、科目選択の余地は若干あるものの、学校で定められた教育課程により教科・科目を学習していた。これでは生徒は学習する科目を押し付けられた感があり、

主体的に学習をしたとは言い難く、不満が残る。そこで、生徒自身が主体となって自分の学習する教科・科目を選び、学んでいく自由選択科目群を設置した。

平成15年度実施の選択科目群を次に示す。この自由選択科目群は、2年次にA～C群までの3群、3年次にD～G群までの4群とし、学科の枠を越えて自由に選択できる総合選択制を導入した。この科目群は、生徒の興味・関心、能力・適性及び進路希望等に応じ、それぞれの群の中から2単位分を選択することができるようにした。それぞれの群には、自分の所属する科の専門性をより深くより高度に学習するための科目、工業に関する幅広い分野の学習をするための科目、大学進学等を支援するための科目等、生徒が目的を持って選択しやすい科目を用意した。

＜第2学年＞（2単位×3科目）

系 \ 群	A群	B群	C群
機 械 系	機械設計	原動機(Ⅰ)	電子基礎
電子機械系	機械工作	電子機械	電子情報技術
電 気 系	*電気工事(Ⅰ)	電力技術	電気機器(Ⅰ)
化 学 系	化学工学	*環境化学	化学システム技術
一般工業系	*電気工事(Ⅰ)	*熱機関応用(Ⅰ)	通信技術(Ⅰ)
一般工業系	—	自動車工学	—
進学強化	数学A	英語Ⅰ	数学B

＜第3学年＞（2単位×4科目）

系 \ 群	D群	E群	F群	G群
機 械 系	*熱機関応用(Ⅰ)	*総合機械	機械設計	自動車工学
電子機械系	機械設計	機械工作	*ロボット工学	電子機械応用
電 気 系	電子技術	電力技術	電気機器	電力応用
化 学 系	化学工業	化学システム技術	化学工学	*環境化学
一般工業系	原動機(Ⅰ)	ハードウェア技術	*電気工事(Ⅰ)	化学工業安全
一般工業系	—	*生活と環境	通信技術(Ⅰ)	—
進学強化	英語Ⅱ	物理Ⅱ	国語表現	数学B

(注) *印は学校設定科目。(Ⅰ)は半期のみの1単位で開設することを示す。

例えば、専門性をより深くより高度に学習したい生徒は、従来の小学科制における各専門学科の科目を中心に選択することができる。また、工業に関する幅広い分野を学習したい生徒は、他の科の専門科目を選択することができるようにした。

この学科の枠を越えて選択することができるということは、科目選択の仕方によっては他の学科を選択した場合と同じような科目を履修することができ、第二希望で入学した生徒にとっては、入学前の当初の目的を叶えることができるとともに、工業の幅広い分野の知識や技能・技術を身に付けることができることである。また、知識や技能・技術だけでなく資格取得を目指して学習し、進路の目標や幅を広げようとする生徒は、その目的や内容に即して学科の枠を越えた幅広い科目選択をすることにより、

自己の目的を達成することができる。

さらに、大学等への進学を希望する生徒は、選択科目の14単位の全てを国語、数学、理科、外国語等の普通教科の科目を選択することができる。これは、大学への入学だけでなく、入学後の基礎的な学力の育成にもつながるものである。

このように自由選択科目群による科目選択により、生徒は他からの強制ではなく、生徒自身の興味・関心、能力・適性及び進路希望等に応じた科目の選択や、自分だけのカリキュラムを作成して学習することが可能となり、生徒の学ぶ意欲を高めることができる。

平成13年度入学生の2年次と3年次の科目選択の状況を次の表に示す。2年次では生徒が所属する学科（以下「自科」という）の科目もしくは普通科目を中心に選択をしている割合が多いが、3年次になると機械系、化学系の生徒は自科の科目を選択する割合が多く、電子機械系、電気系の生徒は他科の科目なども幅広く学ぶ傾向にあり、自分の進路等を考えた科目選択がされていると考えられる。

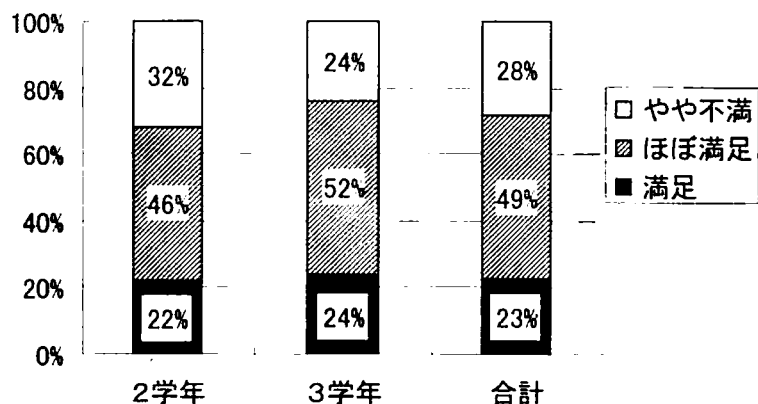
年次	区分	科	機械系	電子機械系	電気系	化学系	全科%
2年次	自科の専門科目を主として選択した生徒の割合		85%	50%	80%	84%	75%
	他科の科目や工業の幅広い分野の科目を主に選択した生徒の割合		0%	0%	6%	3%	2%
	大学進学を支援するための科目を主に選択した生徒の割合		15%	50%	14%	13%	23%
3年次	自科の専門科目を主として選択した生徒の割合		80%	47%	71%	90%	73%
	他科の科目や工業の幅広い分野の科目を主に選択した生徒の割合		0%	14%	11%	5%	7%
	大学進学を支援するための科目を主に選択した生徒の割合		20%	39%	18%	5%	20%

この選択状況の割合は第一希望の学科に入学した7割の生徒に対しては、小学科制を維持しながら基礎・基本の確実な定着を図るとともに専門性の伸長を図り、残りの3割の生徒には学科の枠を越えた選択の可能性を残すという当初の教育システムの方針に見事に合致している。

このように、第一希望以外で入学した生徒に対しても向上心を持続させ、意欲的に学習に取り組める科目を準備することにより、生徒の学ぶ意欲を高めるものとなっている。

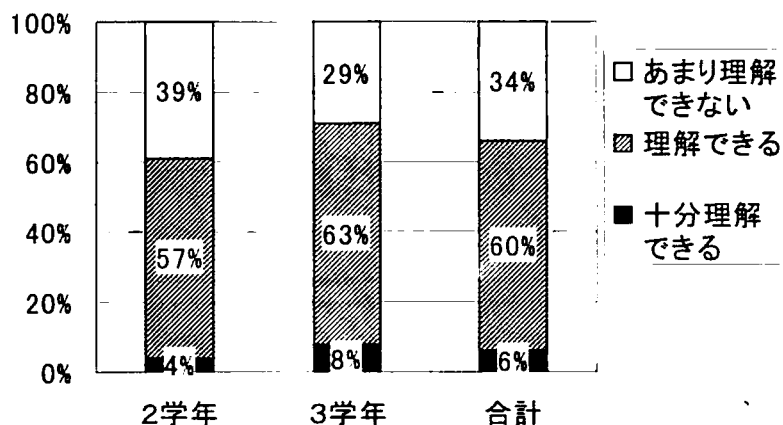
次に、自由選択科目の満足度と理解度についてアンケートを実施した結果を示す。自由選択科目に対する満足度を見ると、全ての学年で約7割の生徒が満足あるいはほぼ満足をしているという結果であった。しかし、残り3割の生徒については、自由選択科目群に関して十分満足のできていない状況にある。

自由選択科目への満足度



さらに、「自由選択科目の授業内容が理解できたか」という質問に対して、約3割の生徒が「あまり理解できていない」と答えている。このことは、「授業が理解できないから自由選択科目に満足できない」とも考えられるが、選択制の導入如何にかかわらず生徒の主体的な授業への取組みを求めるとともに、学習において基礎・基本の確実な定着を図る指導や授業の工夫等の指導方法や内容の見直しが必要である。

自由選択科目の理解度



(2) 学ぶ意欲を高める科目の導入

生徒は高校時代にいろいろなことに興味を示して学ぼうとしている。それは教育課程の中で学ぶ科目に限ったことではなく、実に様々な分野に及んでいる。このような生徒の希望に応えるために、学校や学科の特質を生かし生徒の実態に応えることができるよう、自由選択科目群の中に「学校設定科目」を導入した。この「学校設定科目」については、より幅広い学習をするためや、より深く、より高度に学習するため、また、補充的な学習をするための科目を設定した。さらに、学科の枠を越えて選択しやすい内容としたため、生徒が主体的に学習に取り組み、生徒自身の特性や能力を高めることができ、生徒の学ぶ意欲を高めるものとなっている。

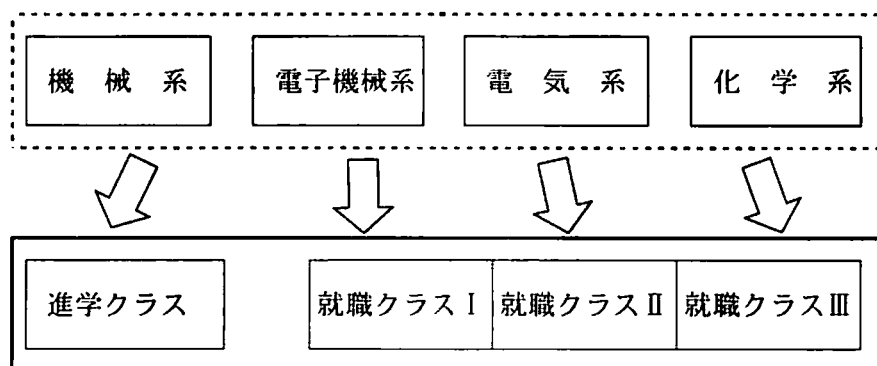
「学校設定科目」の推移は次の表のとおりである。

年 度	平成13年度	平成14年	平成15年
学校設定科目名	キャリアライフ 電気工事 熱機関応用 環境化学	電気工事 熱機関応用 環境化学 総合機械 ロボット工学 家庭と環境(家庭)	電気工事 熱機関応用 環境化学 総合機械 ロボット工学 家庭と環境(家庭)

(3) 進路に応じたクラス編成

本校の学習内容は、就職希望者の割合が高かったため、就職希望者を前提とした学習内容が中心であった。しかし、進学希望者にとってはより深く、より高度な学習が必要とされ、従来の学科によるクラス別の履修では不十分な面があった。そこで、2年次から数学と英語に関しては学科によるクラス編成ではなく、進路別クラス編成による選択履修とした。

下図のように、4学科のクラスを新たに進学クラスを1クラスと就職クラスを3クラスに再編成をした。同じ目的を持った生徒が集まるクラス編成としたことで、クラスの雰囲気も違ってきており、授業も効率よく進めることができた。また、生徒自身もやる気がより高められたと考えられ、生徒の学ぶ意欲を高めるものとなっている。



(4) 学ぶ意欲を高める評価

相対的な評価法は、各評定段階での人数割合が決まっており、自分がいくらがんばっても人数割合の壁に阻まれ、その努力が評定に反映されないことがある。これに対して、目標に準拠した評価、いわゆる絶対評価は、評定ごとに評点の上限と下限の範囲だけが決まっており、人数割合は決まっていないため努力すればその分評定に反映される仕組みとなっている。

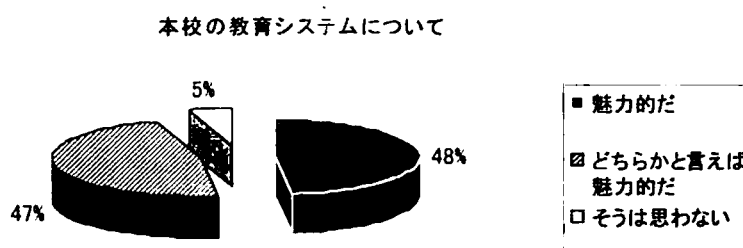
次の表に選択履修科目における評定値ごとの生徒数の割合を示した。

評 定	5	4	3	2	1
新しい評価法による割合(%)	28	28	22	14	8

目標に準拠した評価は、他の生徒との比較ではなく各個人の学習の成果が上がれば上がるほど評価も良くなり、その生徒の持っている能力を最大限に引き出し伸ばせる評価法である。生徒は、「やる気が起こる」と答えており、この評価法の方が達成感が得られ、分布も評定の高い方の割合が多くなっている。また、評点と評定の関係が明確であり、目標を定めやすく、生徒の学ぶ意欲を高めるものとなっている。

3 おわりに

本校では毎年中学3年生を対象に体験入学を実施している。この入学体験では、本校の教育システムについて説明を聞いた後に校内を見学し、実習を体験している。その最後に実施した、「本校の教育システムに魅力を感じるか」というアンケートの結果を次に示す。



参加した95%の中学生が、本校の教育システムを魅力的だと感じており、他の質問では、「いろいろな学科の科目が自由に選択できることに特に魅力を感じている」という結果も出た。

最後に、平成13年度入学生の3年次の自由選択科目で選択した科目と9月当初の進路希望との傾向を調べてみた。

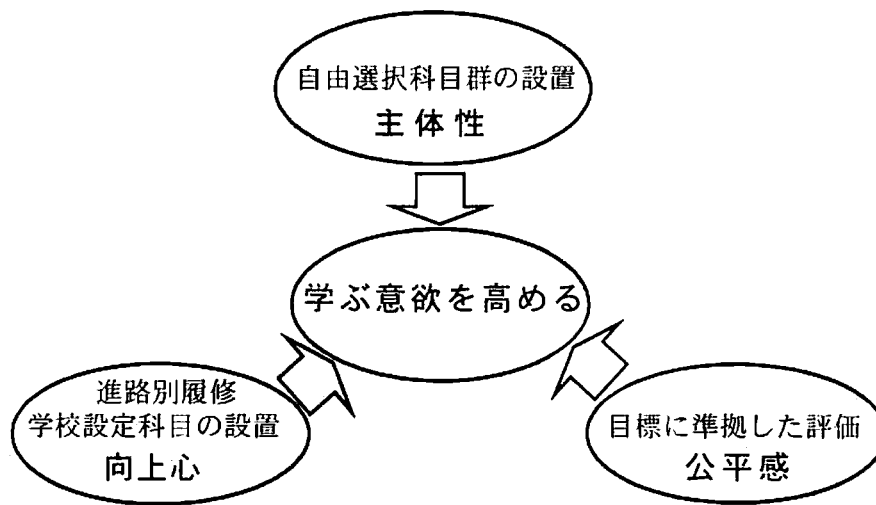
タイプ	工業系の企業または 工業系専門学校	工業系以外の企業 または専門学校	大学・短期大学・公務 員
自科の専門科目を主に選択した生徒の人数	83人	12人	10人
他科の科目や工業の幅広い分野の科目を主に選択した生徒の人数	7人	2人	1人
大学進学を支援するための科目を主に選択した生徒の人数	15人	2人	17人

自科の専門科目を主に選択した生徒のうち、工業系の企業または工業系の専門学校を選択した生徒と、大学進学を支援するための科目を主に選択した生徒のうち、大学・短期大学・公務員を希望する生徒の割合が比較的高く、自分の進路希望に応じた科目選択がなされていることが伺える。このように、生徒の興味・関心や進路に応じて生徒自身が主体となって学習したい科目を選択し、学習していく本校の教育システムは、生徒自身の能力や特性が高められ、学ぶ意欲の向上にもつながっていると思われる。

また、他科の科目や工業の幅広い分野の科目を主に選択した生徒は、入学した学科以外の学習内容を学ぶことを望んでいる。このタイプの生徒は、自分の興味・関心等で科目を選んでおり、このタイプの人数が少ないということは、入学当初の学科が自分の希望に叶っているといえる。

このように、「自由選択科目群の設定」の導入により、生徒自身が自発的な意志によって選択科目を選ぶ『主体性』が養われ、「進路別履修」や「学校設定科目」の設置により、自分の興味・関心、進路希望等をもとに、自らが知ることを求める『向上心』が養われ、「新しい評価」の導入により、他の生徒との比較ではなく自分の良いところを客観的に見られる『公平感』が養われることができた。

これら『主体性』、『向上心』、『公平感』の3つのねらいを本校の教育システムに当てはめると次図のようになる。



この3つのそれぞれのねらいが、生徒が入学時にもっている本校教育に対する期待に応え、希望や目標を叶えるために意欲的に学習に取り組めるシステムを形成していると考えられる。

本校では、この他にも科目選択を支援するガイダンスブックを作成し、進路選択や科目選択の羅針盤として充実させるとともに、2学期制の導入やインターンシップの実施などにより、「学ぶ意欲を高める教育」をシステムとして完成させた。

2 一人ひとりに応じた指導の充実のための取組み

① ワークシートを用いた一人ひとりの学力を伸ばす指導

1 一人ひとりに応じた指導のために

国語科において一人ひとりに応じた指導を考える場合には、主に指導方法について工夫する必要があると考える。それは、国語科の主な目標が、生徒の確かな言語能力の伸長を目指しているからであり、画一的な指導方法では一人ひとりの要請に応えられないからである。高校生ともなれば、その到達している言語能力にはかなりの個人差があり、それぞれ自分の言語能力を高めたいと願っているものである。そこで、一人ひとりが自分に必要な言葉の力を自覚し、どのような言葉の力を伸ばす学習をしているのかを確かめながら学習でき、しかも、教室で共に学ぶことの利点を生かせる指導を工夫することができないだろうか考えた。

この事例は、言語能力のうち、「書く能力」を重点的に伸ばすことを目的とした、「書くことの単元」についての取組みである。生徒一人ひとりが、自分の書く力の問題点を発見し、改善し、表現力を身に付けることができる、主体的な学習活動となるように、指導方法を工夫してみた。

この学習の要となるのは、「ワークシート」「自己診断カード」「自己評価表」といったプリント教材である。また、効率よく個人の学習やグループ学習を進めることができるように、具体的な「学習の手引き」を用意した。さらに、生徒が進んで学習に取り組むことができるように、次のことに配慮した。

- ① すべての学習活動の目的が、生徒に明確にわかるようにする。
- ② 1つの学習が、次の学習の準備となり、手引きとなるようにする。
- ③ 書くことの何を評価されるのか、生徒自身が自覚できるようにする。

2 取組みの例

- (1) 科目 「国語総合」
- (2) 単元名 「意見文（論説文）を書く」
- (3) 単元目標

ア 意見文（論説文）の書き方を学び、自分の関心のある現代社会の問題について、意見文（論説文）を書く。

イ 自分の抱える書く力の問題点を自覚し、そこに気をつけながら文章を書く。

- (4) 単元設定の意図

高校に入学し、意見文（論説文）を書く機会が多くなってきた。しかし、単なる感想なら書くことができても、意見文を書くとなると、かなりの生徒が抵抗感を持つ。改まった文章を書くという意識が生じるためだと思われる。また、自分の文章をどう直したらよくなるのか、理解していない生徒が多い。そこで、生徒自身が、自分の書く力の問題点を自覚する機会を持つ必要を感じた。この単元では、ワークシートを用い、内容と表現の両面から、一人ひとりが自分の書く力の問題点に気づき、よい文章

に推敲する際に留意すべき点を把握できるようにしたい。また、実際に文章を書き、それをグループで相互批評したり、書き直したりすることを通して、表現力を身に付けさせたい。

書く内容に関しては、1年次に実施したということもあり、高度なことは求めない。各自の関心に従って書けるものを題材に選ばせたいと思う。また、できあがった意見文の内容面での深さについては、この単位では評価を行わない。

(5) 評価規準

	関心・意欲・態度	書く能力	知識・理解
「書くこと」の評価規準	国語や言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図り、進んで表現したり理解したりすることができる。	自分の考えをまとめたり深めたりして、相手や目的に応じて、筋道を立てて適切に文章を書くことができる。	表現に役立てるための文法、表記、語句、語彙、漢字等を理解し、知識を身に付けている。
単元の評価規準	・自分の書く力の問題点を把握しようとしている。 ・自分の関心のある題材を探し、意見を書こうと努力している。 ・互いに適切に、批評し合い、直し合おうとしている。	・自分の書く力の問題点を把握し、そこに気をつけて文章を書くことができる。 ・意見文の書き方に沿って、意見を書くことができる。 ・相互批評を参考にして、よりよい文章に推敲することができる。	・意見文の書き方を理解している。 ・よりよい意見文にするための文法、表記、語句、語彙、漢字などを身につけている。
学習活動における具体的な評価規準	①書く力の問題点を把握するためのワークシートに積極的に取り組み、自分の問題点を把握しようとしている。 ②意見文を書く際に、関心のある題材を見つけて書こうとしている。 ③相互批評に積極的に参加し、互いに適切に批評し合い、直し合おうとしている。	①自分の書く力の問題点を把握することができる。 ②自分の問題点に気をつけて文章を書くことができる。 ③意見文の書き方に沿って、意見を書くことができる。 ④相互批評を参考にして、よりよい文章に推敲することができる。	①意見文の書き方を理解している。 ②意見文を書くための学習の過程で理解すべき、文法、表記、語句、語彙、漢字などを身につけている。 ③自分の意見文に適切な、文法、表記、語句、語彙、漢字などを身につけている。
評価方法	・生徒の学習の観察 ・ワークシート、自己診断カード ・生徒の相互評価表、自己評価表 ・生徒の書いた意見文 ・定期考査		
努力を要すると判断される生徒への手だて	○各学習で、理解できていない場合や間に合わない場合は、個別指導をする。 ○相互批評を行うときに、グループの中に文章力や語彙力のある生徒を一人は入れるように配慮し、生徒同士の力で、ある程度推敲ができるように仕組む。 ○指導者も加わって、学習を円滑に進められるように促す。		

(6) 学習指導計画

	学習目標	学習内容・学習活動	評価の観点			一人ひとりに応じている点
			関 意 態	書 く 力	知 ・ 理	
1 次 (3 ～ 4 時 間)	- 自分の書く力の問題点を発見する。 - 文章の推敲の仕方を学ぶ。	- 自分の書く力の問題点を発見するためのワークシートに取り組む。 ＜ワークシート学習＞ 1 「内容を書き継ぐ・書き加える」(ワークシート 5 枚) 2 「表現を磨く」(ワークシート 10 枚) - 互いに発表し合い、解答例や推敲例を検討する。 - 自己診断カードに 15 枚の結果を書き込み、自分の文章をよりよくするための達成目標を決める。	①	①	②	15枚のワークシートは多くの生徒がつまづく書き方の問題点に対応している。 【資料1】ーア - ワークシートの練習問題は実際の生徒の文章から取った。 【資料1】ーイ - 自己診断カードを各自で書くことで、自分で自分の書く力を診断することができる。 【資料1】ーウ
2 次 (1 時 間)	意見文の書き方を学ぶ。	- 意見文の書き方について学ぶ。 ＜講義＞ 1 教科書教材「意見文を書く」の説明を聞く。 2 作文と意見文の違いを理解する。 3 意見文の型を理解する。	②		① ②	
3 次 (1 時 間)	意見文のテーマを決める。	- 意見文を書くための材料を集める。 ＜ワークシート学習＞ 1 「現代社会の抱える問題についての一提言」というテーマで、自分の関心のあるテーマを探す。(参考資料)「論点を探る」 2 テーマを決める。	②		②	言葉を手がかりに、関心のあるテーマを探し、自分の書きたいテーマを選ぶことができる。
4 次 (2 時 間)	意見文を書く。	- 意見文を書く。 ＜ワークシート学習＞ 1 テーマに沿って、構成を立てる。 2 意見文を書く。 3 「自己評価の手引き」に従って、自分の書いた意見文に印を付けたら、書き込んだりする。 4 達成目標についての自己評価を書く。	②	③		- 構成の立て方の手引きに従えば、意見文の体裁をなすように、手引きを用意し、各自で取り組めるようにする。 - 自己評価の手引きに沿って、自己評価し、自分の書くことの問題点を自覚できる。 【資料2】ーア
5 次 (2 ～ 3 時 間)	相互批評により、自分の意見文を推敲する。	- 自己評価で問題にしている箇所を中心に、グループで相互批評する。 ＜グループ学習＞ 1 共通のテーマの者でグループを作る。(4人) 2 グループ内で意見文を回して、問題としている箇所を書き直す。 - グループの人の書き直したものを参考に、自分の意見文を推敲する。 ＜ワークシート学習＞ 1 意見文の完成 2 自己評価表の完成	③	④ ②	③	- 共通のテーマで意見文を書いた人で、グループを作ることができる。 - 互いに問題としている箇所を直し合うことにより、表現力を磨くことができる。 【資料2】ーイ 【資料2】ーウ
6 次	意見文を読み合う。	- 意見文を読み合う。 - それぞれが書いた意見文を回しながら、一編でも多く読む。				様々な意見文に触れることで、各自の表現力を磨くことができる。

* 「評価の観点」欄の①②③④の数字は、「(5) 評価規準」の中の、「学習活動における具体的な評価規準」を意味している。

(7) 単元実施上の留意点

ア この単元は、2学期の期末考査（12月第1週）を挟んで実施するのが効果的である。第3次までを考査前に実施し、第4次～第6次を考査後に行い、単元としての評価は3学期に入れる。この時期に行う理由は、高校入学後ある程度の時間が経過しており、文章を書く機会が既に何度かあり、論理的な文章をうまく書けるようになりたいと思い始める時期だからである。また、期末考査後の学習を効果的に進める上でも、意味があると思われる。

イ この単元は、9時間～11時間程度で実施するのが望ましい。実際は、これだけ時間をまとめて取ることは難しい。そこで、第1次の3～4時間分の学習は、2学期当初から、1週間に1時間ずつ時間を取ったり、単元の変わり目を利用して断続的に差し込んだりして実施してもよい。また、毎時間、1枚のワークシートを10分程度で行うことを続けて、長い時間をかけて第1次を終えてもよい。

ウ この単元においては多くのワークシートを使うが、そのすべてを提出させて確認するのではなく、「自己診断カード」や「自己評価表」にまとめたものを評価するようにする。

(8) 学習活動及び評価に利用するワークシートや学習の手引き

一人ひとりに応じた指導にするために、多くのワークシートを用意し、それが次の学習の手引きとなるように工夫した。これらをあらかじめ用意することで、指導者の説明を簡素化することができる。また、生徒自身も、何のための学習か、常に確かめながら進むことができる。

以下、第1次、第4次、第5次に用いるワークシートと学習の手引きの例を挙げて説明する。なお、第2次は教科書教材と書き方のワークシート、第3次は資料集「論点を探る」とその活用のためのワークシートを用いるが、ここでは省略した。

〔資料1〕（第1次）「自分の書く力の問題点を発見する」

ア ワークシートの項目一覧

a 内容を書き継ぐ・書き加える。

- ワークシート1 問題提起に続けて、意見（主張）を書き継ぐ。
- ワークシート2 意見に続けて、根拠を書き継ぐ。
- ワークシート3 意見を裏付ける例に加えて、もう一つ例を書き加える。
- ワークシート4 2つの例に合う意見を書き加える。
- ワークシート5 具体的事例に対する意見に続けて、一般化した意見を書き継ぐ。

b 表現を磨く。

- ワークシート6 もっと適切な表現に書き換える。
- ワークシート7 もっと短く簡潔な表現に書き換える。
- ワークシート8 意見をもっと強める言い方に書き換える。
- ワークシート9 意見をもっと穏やかにする言い方に書き換える。
- ワークシート10 形容詞（形容動詞）を使わない言い方に書き換える。
- ワークシート11 できるだけ接続詞を省いて書く。
- ワークシート12 できるだけ指示語を使わないで書く。
- ワークシート13 話し言葉を書き言葉に書き換える。
- ワークシート14 長い1文を2文か3文に分けて書く。
- ワークシート15 漢字で書くべきところの、漢字の間違いや平仮名を直す。

イ ワークシートの例

下図のようなワークシート15枚を順に書き、例文を出し合う。

〔ワークシート1〕長い一文を二文か三文に分けて書く 〔練習1〕 現在、高齢者に健康に関する商品を高額で売りつける消費者問題が多く出てきている。立場の弱い人々をねらい、信頼させて老後の蓄えをほとんど奪い取るというやり方はとてもひどい。 全国の都道府県には消費者生活センターがあり、こういった苦情に対応しているが、実際にこういった問題にどう対処しているか分からない人が大半で、手続きなども大変で、泣き寝入りしている人が多く、悪質商法に乗らないための知識を消費者がもつと持つことが必要だと思う。	〔ワークシート2〕意見に続けて根拠を書き継ぐ 〔練習1〕 最近、グローバル化という言葉をよく聞く。テレビをつければ、遠く離れた国の出来事がすぐ近くで起こっているかのようにつながってくる。情報化が進み、世界は私たちに近く、また、狭く感じるようになった。だが、それに伴い、私たちは自分たちと異なった考え方や習慣に出会い、とまどいを感じるようになることがある。異なった文化を理解することは、とても難しいと思う。
--	---

ウ 自己診断カード

ワークシート1～15のうち、1時間ごとにその時間行ったものの評価を書き込む。すべて終わったところで、感想と自分の書く力の達成目標を書いて提出する。
(自己診断カードとワークシートを綴じて)

自己診断カード 一年組 番																																			
◎ 各項目ごとに自己評価して丸印をつけよう。 A…よくできた B…ほぼできた C…できなかった																																			
◎ ワークシートを終えて「自分の書く力」を診断してみよう に感じたか、感想を書こう。	<table border="1"> <thead> <tr> <th>評価項目</th> <th>評価</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>(内容)</td> <td></td> </tr> <tr> <td>1 問題提起に続けて意見を書き継ぐ</td> <td>A B C</td> </tr> <tr> <td>2 意見に続けて根拠を書き継ぐ</td> <td>A B C</td> </tr> <tr> <td>3 意見を裏付ける例に続けてもう一つ例を書き加える</td> <td>A B C</td> </tr> <tr> <td>4 二つの例に合う意見を書き加える</td> <td>A B C</td> </tr> <tr> <td>5 具体的事例への意見に続けて一般的な意見を書き継ぐ(表現)</td> <td>A B C</td> </tr> <tr> <td>6 もっと適切な表現に書き換える</td> <td>A B C</td> </tr> <tr> <td>7 もっと短く簡潔な表現に書き換える</td> <td>A B C</td> </tr> <tr> <td>8 意見をもっと強める言い方に書き換える</td> <td>A B C</td> </tr> <tr> <td>9 意「をもっと穏やかにする言い方に書き換える</td> <td>A B C</td> </tr> <tr> <td>10 形容詞(形容動詞)を使わないで書く</td> <td>A B C</td> </tr> <tr> <td>11 できるだけ接続詞を使わないで書く</td> <td>A B C</td> </tr> <tr> <td>12 できるだけ指示語を使わないで書く</td> <td>A B C</td> </tr> <tr> <td>13 話し言葉を書き言葉に書き換える</td> <td>A B C</td> </tr> <tr> <td>14 長い一文を二文か三文に分けて書く</td> <td>A B C</td> </tr> <tr> <td>15 漢字で書くべきところの漢字の間違いや平仮名を直す</td> <td>A B C</td> </tr> </tbody> </table>	評価項目	評価	(内容)		1 問題提起に続けて意見を書き継ぐ	A B C	2 意見に続けて根拠を書き継ぐ	A B C	3 意見を裏付ける例に続けてもう一つ例を書き加える	A B C	4 二つの例に合う意見を書き加える	A B C	5 具体的事例への意見に続けて一般的な意見を書き継ぐ(表現)	A B C	6 もっと適切な表現に書き換える	A B C	7 もっと短く簡潔な表現に書き換える	A B C	8 意見をもっと強める言い方に書き換える	A B C	9 意「をもっと穏やかにする言い方に書き換える	A B C	10 形容詞(形容動詞)を使わないで書く	A B C	11 できるだけ接続詞を使わないで書く	A B C	12 できるだけ指示語を使わないで書く	A B C	13 話し言葉を書き言葉に書き換える	A B C	14 長い一文を二文か三文に分けて書く	A B C	15 漢字で書くべきところの漢字の間違いや平仮名を直す	A B C
評価項目	評価																																		
(内容)																																			
1 問題提起に続けて意見を書き継ぐ	A B C																																		
2 意見に続けて根拠を書き継ぐ	A B C																																		
3 意見を裏付ける例に続けてもう一つ例を書き加える	A B C																																		
4 二つの例に合う意見を書き加える	A B C																																		
5 具体的事例への意見に続けて一般的な意見を書き継ぐ(表現)	A B C																																		
6 もっと適切な表現に書き換える	A B C																																		
7 もっと短く簡潔な表現に書き換える	A B C																																		
8 意見をもっと強める言い方に書き換える	A B C																																		
9 意「をもっと穏やかにする言い方に書き換える	A B C																																		
10 形容詞(形容動詞)を使わないで書く	A B C																																		
11 できるだけ接続詞を使わないで書く	A B C																																		
12 できるだけ指示語を使わないで書く	A B C																																		
13 話し言葉を書き言葉に書き換える	A B C																																		
14 長い一文を二文か三文に分けて書く	A B C																																		
15 漢字で書くべきところの漢字の間違いや平仮名を直す	A B C																																		
◎ これから「意見文」を書くにあたって、この点に気をつけよう と思う項目を右から三つ選んで、書くことの「達成目標」にしよう。 ③ ② ①																																			

〔資料2〕（第4次・第5次）「意見文を推敲する」

ア 自己評価の手引き（ワークシート）

意見文を書き終えたら、空欄を埋める形で、「意見文に添えて」を書く。それを、他の人が意見文を読むときの着眼点とする。

◎評価して欲しい点 ⅠⅡは、達成できているでしょうか。 Ⅲは、あなたならどう書き直しますか。	Ⅰ私がこの意見文で述べたいと思ったことは、 です。	Ⅱこの意見文を書くにあたって、次のような書くことの達成目標を立てました。 ③ ② ①	Ⅲ私が表現で困ったところには、次のような印がついています。 ○適切な表現が思い浮かばなくて、だらだらと書いてしまった。 a ○適切な表現が思い浮かばなくて、不満のまま、ごまかして書いてしまった。 b	Ⅳ意見文を書いてみて思ったことは、
---	--	--	--	---

イ グループ学習ワークシート

◇意見文と「意見文に添えて」を読んで書く。
（グループの人数分ほど書く。）

「」さんの意見文について（相互評価）

Ⅰ書こうとしていたことが伝わりましたか。（A B C）

Ⅱ書くことの目標は達成できていると思いますか。

①（A B C） ②（A B C） ③（A B C）

Ⅲ a — b …… の印がついているところは、自分だったらどのよう
に書きますか。書いてみましょう。

a

b

◇意見文自己評価表

私の意見文について（自己評価表）

Ⅰ書こうとしたことはうまく伝わっていましたか。（A B C）

Ⅱ書くことの目標は達成できましたか。（総合して A B C）

Ⅲ私が表現に困ったところを、他の人はどう書いたでしょうか。

a のところ

「」さん	「」さん	「」さん	「」さん	「」さん

これらを参考にして、自分で書き直してみました。

ウ グループ学習の進め方についての手引き

学習の目的と方法については、口頭による説明は簡単にし、細かいところは手引きを見て取り組ませるようにする。

今日の学習は、この手順で

- 1 自分の意見文に「意見文に添えて」をつけて回す準備をします。
- 2 席は次のとおり。

ウ	イ	ア
エ	エ	エ
前	前	前

ウ エ ア
前

4 意見文を読み合います。

アはイウエのを
イはウエアのを
ウはエアイのを
エはアイウのを

読みます

5 まず第一回は、次のように渡しなさい。
アは自分のをエに イは自分のをアに
ウは自分のをイに エは自分のをウに
6 意見文を2回ほど繰り返し読みましよう。

7 読んだら『 『さんの意見文について』のプリントに記入してください。』
8 『書こうとしたこと』は伝わってきましたか。次のいずれかに○をつけてください。
い。

A よく伝わった
B ほぼ伝わった
C あまり伝わったとは言えない

9 『達成目標』として挙げていることは、実現できたと思いますか。それぞれについて、○をつけてください。

10 「表現で困ったところ」(a・b)について、自分だったらどう書くか書いてみてください。

A 達成できている
B ほぼ達成できている
C あまり達成できていない

11 「『さんの意見文に記入します。読んでみて、自分がうまいと感じたところに青で線を引いてください。』(線の下に自分の名前を書く)」

12 漢字や語句の使い方、言い回しなど、訂正した方がいいと思う箇所に赤で線を引いてください。

13 記入したプリントを作者(「『さん』」に渡してください。

14 読み終わった意見文を次の人に渡します。

Aはイのをエに イはウのをアに
ウはエのをイに エはアのをウに

15 一通り回ったところで、三人の書いてくれたものを参考に「私の意見文について」という自己評価表を書きます。

〈参考〉生徒の書いた意見文

〔資料2〕のアのⅢの指示に従って、本人がa・bの印をつけている。

IV 意見文を書いてみて思ったことは、もう少し自分の生活に即した方がよかったかもしれない。また、もっとかつよく表現したかった。

地球温暖化は、僕たち現代人が自ら招いた大きな問題だ。だからこそ、この問題は自分たちが解決すべきものだと思う。a 人が利潤を追求し、化石燃料の大量使用とそこから生じる温室効果ガス、これは決して自然にできた悪循環ではなく人工的なものだ。

僕は少し前に、二酸化炭素の年間排出量についてのニュースを見た。この内容で僕が一番興味を抱いたのは、国どうしでの二酸化炭素を排出する権利の売買だ。Aがそこまで排出しないなら、Bが排出の権利を買えば大量に排出したついでいいことになる。僕はこの考え方は間違っていると思う。

やはり、今後このようにありがたを、各国が改めなければいけないと思う。でも、一番大切なのは「一国家のありかた」ではなく、一個人として、地球温暖化を重く受け止め、主体的に行動していくことだ。それが、環境問題への取り組みの第一歩だと思う。

3 留意事項

(1) 事例についての考察

一人ひとりに応じた指導を行おうとすると、指導者の負担が大幅に増えたり、一単元の配当時間が多くなったりして、現場に則さない事態に陥ることがある。また、評価において、学習の事中あるいは事後に、何をどのように評価したらよいのか等、困ることが起きる場合がある。

「書くこと」の学習においては、まず、生徒に書かせてみてから内容を評価し指導する方法を取ることが多いが、この方法は表現力向上を図る指導法としては、意欲付けや学習効率の面から疑問が多い。また、生徒に伝えるためコメントをつけるなどの事後処理についても、多くの人数を抱えた場合、このやり方では無理が生じる。

上記の事例は、このような点を改善するための一試案である。ワークシートや学習の手引きを用意することは大変かもしれないが、学習の流れが生徒にも指導者にも見えていることは学習活動をしやすくすると思われる。また、目標と評価が明確に結びついているので、生徒にとっても、何をどう評価されているのかがわかり、達成感を持つことができるであろう。

この事例で特に気をつけたことは、指導者の負担の軽減ということである。生徒自身で処理できることは各自で処理を済ませてから提出させたり、生徒の相互批評、相互評価に任せることができるものは、思い切って任せるようにした。何もかも指導者が抱え込む方法は、生徒の自主的な活動を促す面だけではなく学習の定着の面でも効果的ではない。

(2) 課題

課題としては、指導者が、生徒の書く力や発達過程に応じた「書くこと」の問題点をきちんと把握するということである。ここで扱った「書く力の問題点を発見する」ためのワークシート15枚は、高校1年生のためのものである。その用例も、過去の1年生が実際に書いたものから採用している。2年生対象、3年生対象となれば、それに合わせた別のワークシートが用意されなければならない。学校の実態によっても当然変わってくるであろう。目の前にいる生徒に何が必要であるかを模索する目は、指導者として絶えず持ち続けなければならないと考える。

4 参考文献

- | | |
|-------------------|---------------|
| ・高等学校学習指導要領 | 文部省（平成11年3月） |
| ・高等学校学習指導要領解説 国語編 | 文部省（平成11年12月） |
| ・国語総合 現代文編 | 東京書籍 |
| ・論点を探る | 桐原書店 |
| ・大村はまの国語教室 5 | 筑摩書房 |

② 課題追究学習における一人ひとりに応じた指導

1 一人ひとりに応じた指導のために

(1) 課題設追究学習の実施に当たって

学習指導要領の改訂により「現代社会」においては、標準単位数が4単位から2単位に縮減された。また、科目の導入として、現代社会の諸問題については、「地球環境問題」「資源・エネルギー問題」「科学技術の発達と生命の問題」「日常生活と宗教や芸術とのかかわり」「豊かな生活と福祉社会」などから、地域や学校、生徒の実態に応じて「二つ程度」を選択して取り上げ、生徒が自己とのかかわりに着目して主体的に「課題を設け追究する学習」（以下、「課題追究学習」とする）を実施することになった。このことを踏まえて、課題追究学習の過程におけるアンケート調査や添削指導等を通し、一人ひとりに応じた教材開発や指導方法及びこれからの評価の在り方などを考察することとした。

年間を通しての指導計画を立案するに当たっては、一学期に「二つ」の課題を設定させ、一つの課題について9時間を目途に、課題追究学習を行わせることにした。課題の設定については、「二つ」の課題のうちの「一つ」を、指導者が上記の五つの問題領域のうちから指定し、生徒はその事項に関して課題追究学習をするという、いわば「教師による問題領域提示」の方法をとった。この方法により、指導者が指定した問題領域について、課題追究学習を始める前に、生徒に対して具体的な資料等を提供し、事前の指導が生徒全員に徹底できると考えた。ここでは、生徒が初めて行う課題追究学習として「科学技術の発達と生命の問題」を例に挙げた。

なお、生徒の発達段階に応じた指導をするためには、中学校で実施された課題追究学習の内容等を把握することが必要であると考え、「課題学習履歴カード」も作成させることにした。

(2) 課題追究学習を実施するメリット

一人ひとりに応じた指導の方法として、少人数指導や習熟度別指導、チーム・ティーチングなどが考えられるが、現代社会の授業において、課題追究学習を実施する場合、次のようなメリットがあると考えた。

ア 生徒が自己とのかかわりに着目して主体的に課題を設定し、その課題についての資料を収集したりまとめたりすることにより、生徒一人ひとりの現代社会の諸問題に対する理解を深めることができる。

イ 資料の収集・活用やレポートの作成の過程のなかで、一つのテーマについての調べ方やまとめ方の学習をすることができる。また、自分の設定した課題について、一つのまとまったレポートに仕上げたり、クラスで冊子にまとめたりすることにより、生徒に成就感をもたせることができる。

ウ 他の生徒が設定した課題についてのレポートを読んだり、発表を聞いたりすることにより、多様な考え方や見方に触れることができる。また、自分の調べた分野以外の領域についても、理解を深めることができる。

2 取組みの例

(1) 科目名 「現代社会」

(2) 単元名 「科学技術の発達と生命の問題」

(3) 指導計画全般（9 時間配当）

指 導 計 画	場 所	配当時間	使用教材
① 課題の設定		3 時間	
(a)「課題学習履歴カード」の作成、単元の概要説明	教 室	(1 時間)	資料 1
(b)課題追究学習についての説明、「キーワード」の検討	教 室	(1 時間)	資料 2
(c)「課題」、「課題設定の理由」、「調べ方・まとめ方の予定や見通し」の検討 【事前アンケート】	図書室	(1 時間)	資料 2 資料 4
② 資料の収集と活用 【中間アンケート】	図書室	2 時間	資料 4
③ 課題追究	図書室	2 時間	資料 3
④ 課題追究のまとめ (レポートの提出、冊子の作成、発表) 【事後アンケートと 3 回のアンケートのまとめ】	教 室	2 時間	資料 3 資料 4・5

(4)「科学技術の発達と生命の問題」の評価規準の具体例

①関心・意欲・態度	②思考・判断	③資料活用の技能・表現	④知識・理解
(ア)科学技術の発達と生命の問題に関する関心が高まっている。 (イ)科学技術の発達と生命の問題について自己とのかかわりに着目して設定した課題を意欲的に追究している。 (ウ)科学技術の発達と生命の問題について自己の在り方生き方と関連させながら考えている。	(ア)科学技術の発達と生命の問題について自己とのかかわりに着目して課題を見いだしている。 (イ)科学技術の発達に伴う生命の考え方の変化について多面的・多角的に考察している。 (ウ) 科学技術と生命の在り方について社会の変化や様々な立場、考え方を踏まえて公正に判断している。	(ア)科学技術の発達と生命の問題に関する諸資料を様々なメディアを通して収集している。 (イ)収集した資料の中から科学技術の発達と生命の問題について設定した課題を追究する学習に役立つ情報を主体的に選択して活用している。 (ウ)課題の設定の仕方、統計や資料の見方、情報の検索や処理の仕方、簡単な社会調査の方法を身に付けている。 (エ)科学技術の発達と生命の問題について設定した課題を追究し考察した過程や結果を、レポートにまとめたり、発表などを行ったりして表現している。	(ア)科学技術の成果が社会生活のすみずみまで浸透するとともに、生命の在り方にまで影響が及んできたことについて理解し、その知識を身に付けている。 (イ)科学技術の発達と生命の問題が生じる背景や問題点を追究する観点として、倫理、社会、文化、政治、経済など様々な観点があることを理解し、その知識を身に付けている。

※ 上記の「評価規準の具体例」は、(5)の ア～ウ の表中における「評価の手だて」に対応する。また、他の問題領域の課題追究学習を実施する場合は、その問題領域の評価規準の具体例を用意する必要がある。

(5) 課題追究学習を通しての一人ひとりに応じた指導の具体例と評価の手だて

一人ひとりに応じた指導については、それぞれの問題領域における生徒の習熟度や社会的認識が異なっているため、課題追究学習の様々な場面での、生徒の到達度に応じた支援が必要とされる。そのため、学習の流れに沿って、一人ひとりに応じた指導の留意点と評価の手だてを示すと以下のとおりである。なお、「知識・理解」については、あらゆる指導の場面で評価することとした。

ア 課題の設定（3時間）

指 導 計 画	一人ひとりに応じた指導の留意点	評価の手だて
「課題学習履歴カード」の作成 【資料1】 単元の概要説明 【1時間】	→中学校社会科「公民的分野」における追究内容の確認をさせるとともに、生徒がどのような課題追究学習を行ってきたかを把握する。 →生徒が主体的に課題を設定できるようなヒントを提示する。生徒の理解度に差があると考えられるので、幅広く具体的なヒントを提示する。	①(ア)
課題追究学習についての説明 「キーワード」の検討 (例) クローン技術、遺伝子組換え作物、バイオテクノロジー等 【1時間】	→生徒が自己とのかかわりにおいて主体的に追究できるように、興味・関心をもっていることや、疑問に思っている事柄等を取り上げるように指導する。 →「課題」を設定させる前段階として、まず「キーワード」を設定させる。指導者は、生徒が提出した「キーワード」を確認して、課題追究学習について、理解が十分でないと思われる生徒については、個別に助言・指導する。	①(ウ)
「課題」の検討 (例) クローン技術の是非、遺伝子組換え食品の安全性、バイオテクノロジーの発達過程・利点・問題点等 「課題設定の理由」、「調べ方・まとめ方の予定や見通し」の検討 事前アンケートの実施 【1時間】	→「課題」を設定することの困難な生徒については、事前に作成した課題の具体例の表（省略）を示して指導する。 →【資料2】（「現代社会 課題追究学習」について「キーワードの設定」）を個別に提出させる。不十分な点や補足する部分があれば、添削指導等を行い、科学的な追究の過程や思考過程を論理的に表現することができるよう指導する。 「キーワード」及び「課題」について、一覧表にまとめ、一人ひとりの生徒がどのような問題を取り上げているかを確認できるようにして、今後の指導に役立てる。 →【資料4】（事前アンケート）の集計結果を、一覧表にまとめ、今後の指導の参考にする。また、「低い」、「困難」等を選んだ生徒については、どのような点が低いのか、どのような点が困難なのかを、個別に確認・指導して今後の活動の支援とする。	②(ア) ①(ア)

イ 資料の収集と活用（2時間）、課題追究（2時間）

指導計画	一人ひとりに応じた指導の留意点	評価の手だて
資料の収集と活用	→図書室において、資料の収集をさせる。図書室にない資料については、授業時間以外にも、各自が自主的に収集するように指導する。資料の探し方や調べ方などの疑問には、個別に助言・指導する。 インターネット情報の検索方法については、「情報」の授業との関連性をもたせて指導する。	③(ア)
中間アンケートの実施 【2時間】	→アンケートの結果を一覧表にまとめて、事前アンケートとの比較を行う。	①(イ)
課題追究 【2時間】	→中間アンケート等を参考にして、「低い」、「困難」等が事前アンケートと変わっていない生徒や新たな問題点が生じた生徒については、その理由を確認し、助言・指導を行う。	②(イ) ③(イ) ③(ウ)

ウ 課題追究のまとめ（2時間）

指導計画	一人ひとりに応じた指導の留意点	評価の手だて
レポートの提出、冊子の作成、発表	→全員のレポートを冊子に仕上げさせることや発表させることにより、生徒全員に成就感をもたせる。発表については、年間を通して最低1回は全員にその機会を設ける。提出期限を過ぎてもレポートが完成しない生徒については、事前・中間アンケートも参考にして、完成のための支援を行う。生徒相互の評価については、今後の検討課題とする。	②(ウ) ③(エ)
事後アンケートの実施 【2時間】	→事後アンケートの結果を、事前・中間アンケートとともに一覧表にまとめ、その推移を考察する。最終的に「低い」、「困難」等を選んだ生徒については、その理由を分析して、後の支援の参考とする。生徒にも3回のアンケートを【資料5】「アンケートのまとめ」にまとめさせて、成長の過程や取組みの姿勢等を確認させるとともに、これまで自分が追究してきた内容について考察させる。	①(イ)

(6) 課題追究のまとめと評価に対する手だて

最終的に、アンケートや提出されたレポート、発表、問題領域ごとのペーパーテストや定期考査等を総合的にみて、観点別学習状況の評価の総括を行うが、ペーパーテストや定期考査による評価については「知識・理解」のみに偏らないための工夫が必要である。また、レポートの作成や発表を通して、生徒の「関心・意欲・態度」や「資料活用の技能・表現」等の観点別評価が可能となる。なお、生徒のアンケートについては、今回は質問1、6のみを評価の対象とした（【資料5】参照）。その他の質問事項については、【資料5】「アンケートのまとめ」を各自のレポート、発表、ペーパーテスト等と比較させることにより、客観的な自己評価能力を身に付けさせる支援にしたいと考えている。

3 留意事項

(1) 公民科の課題追究学習における一人ひとりに応じた指導のまとめ

- ア 課題追究学習は、知識・技能以外に思考力や自己とのかかわりのなかで課題を追究することなどが重視されており、生徒の興味・関心を引き出し、一人ひとりに応じた指導を行うのに有効な手段である。
- イ 中学校での学習の成果を踏まえて、一人ひとりに応じた指導をするために、「課題学習履歴カード」の作成を通して、中学校ではどのような学習活動を行ったかを把握することが大切である。
- ウ 課題追究の過程において、事前・中間・事後のアンケートを実施することなどにより、指導者が積極的な支援を行うとともに、一人ひとりに応じた形成的評価を行うことが重要である。
- エ 課題追究学習を通して生徒と向き合い、生徒一人ひとりに応じた指導を実施することが可能となる。
- オ 授業やレポート、アンケートなどにおいて、重点的に評価する観点をあらかじめ、生徒に具体的に明示しておく必要がある。
- カ 2回目のレポート作成に際して、生徒は課題追究学習の手順を理解しているので、スムーズに進むと考えられる。また、課題設定やアンケートに費やす時間も大幅に削減されるので、1回目よりも能率的なレポート作成が期待できる。アンケートについては、1回目との比較も考えて作成する必要がある。

(2) 今後の課題

- ア 課題追究学習は、年間指導計画の中に位置付けられた、計画的なものでなければならない。
- イ 「課題の設定」、「資料の収集と活用」、「課題追究」、「課題追究のまとめ」の流れのなかで、生徒一人ひとりの評価をするためには、かなりの時間と指導者の力量が要求されるが、積極的に課題追究学習を実施することにより、一人ひとりに応じた指導が可能となる。
- ウ 客観的な自己評価能力を身に付けさせるための指導の手だてが必要であるとともに、生徒が学習の過程でどのように変わっていったかをはかるための個人内評価の手だても必要となる。
- エ 目標に達しなかった生徒について、本当に興味・関心のある課題を設定させることができたかどうかを分析するとともに、目標に達することができるよう指導を継続する必要がある。

4 参考文献

- 高等学校学習指導要領 文部省（平成11年3月）
- 高等学校学習指導要領解説 公民編 文部省（平成11年12月）
- 平成14年度教育課程研究指定校調査研究資料～高等学校（公民）～
山口県教育委員会
- 高等学校学習評価事例集 山口県教育委員会（平成15年3月）

【資料1】

課題学習履歴カード

あなたが、中学校の社会科公民的分野で行った課題学習について、次の質問に答えてください。

- 1 いつ頃、課題学習を実施しましたか。
- 2 あなたが追究したのは、どのような課題ですか。
- 3 その課題について、誰と追究しましたか。
- 4 どのような方法で、課題を追究しましたか。
- 5 課題を追究するために、どのような活動をしましたか。
- 6 課題を追究した結果、どのようなことが分かりましたか。

(回答欄・氏名欄省略)

【資料2】

「現代社会 課題追究学習」について

「キーワードの設定」

前の時間に学習した「科学技術の発達と生命の問題」の内容の中から、あなたがさらに理解を深めたい事柄を「課題」として設定し、課題の追究をしてもらいますが、「課題」の設定に先だって、「キーワード」を設定します。日常生活において興味・関心のある事柄や、日ごろ疑問に思っている事柄、マスメディアを通して見聞きしている出来事などについて、自分が調べてみたい事柄を「キーワード」として設定してください。次の時間にその「キーワード」から、あなたが自己とのかかわりにおいて主体的に追究する「課題」を設定します。

なお、レポートを完成するまで、3回のアンケートを実施したいと考えています。これは、皆さんの到達度を知ることにより、レポートをスムーズに作成するのに役立つ資料にしますので、自分の気持ちや、レポート作成の進み具合を、率直に答えてください。

1年__組__番 氏名__

1 キーワード

2 課題

3 課題設定の理由

4 調べ方・まとめ方の予定や見通し

【資料3】

「現代社会レポート」 1 年__組__番 氏名_____ 1 キーワード 2 課題 3 課題設定の理由	4 調べた内容（具体的な内容は、この用紙に添付すること） <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td style="width: 30px; text-align: center;">1</td><td style="border-bottom: 1px dashed black;"></td></tr> <tr><td style="text-align: center;">2</td><td style="border-bottom: 1px dashed black;"></td></tr> <tr><td style="text-align: center;">3</td><td style="border-bottom: 1px dashed black;"></td></tr> <tr><td style="text-align: center;">4</td><td style="border-bottom: 1px dashed black;"></td></tr> <tr><td style="text-align: center;">5</td><td style="border-bottom: 1px dashed black;"></td></tr> </table> 5 結論（自分の考え、感想、新たな疑問など）	1		2		3		4		5	
1											
2											
3											
4											
5											

【資料4】

	事前アンケート	中間アンケート	事後アンケート
質問 1	設定した課題に対して、あなたの関心の高さはどれくらいですか。	設定した課題に対する関心は、高まっていますか。	課題を設定した時点と比べて、課題に対する関心度は、さらに高まりましたか。
質問 2	あなたが設定した課題に対する、現段階での知識の多さはどれくらいですか。	課題を追究していくなかで、あなたが設定した課題に対する知識は多くなっていますか。	課題を追究する以前と比べて、設定した課題に対する知識の量は、どのように変化しましたか。
質問 3	あなたが設定した課題は、自己とのかかわりのなかで主体的に考えることができますものだと思いますか。	あなたが設定した課題は、自己とのかかわりのなかで主体的に考えることができそうですか。	あなたが設定した課題は、自己とのかかわりのなかで主体的に考えることができましたか。
質問 4	あなたが設定した課題に対して、これから十分に資料を集めることができますか。	あなたが設定した課題に対して、十分に資料を集めることができますか。	あなたが設定した課題に対して、十分に資料を集めることができましたか。
質問 5	あなたが設定した課題の調べ方の見通し（どのような方法で調べるか）は、十分に立っていますか。	あなたが設定した課題の調べ方の見通し（どのような方法で調べるか）のとおり課題を追究できていますか。	あなたが設定した課題の調べ方の見通し（どのような方法で調べるか）のとおり課題を追究できましたか。
質問 6	あなたが設定した課題について、意欲をもってレポートを作成することができますか。	あなたが設定した課題について、意欲をもってレポートを作成していますか。	あなたが設定した課題について、意欲をもってレポートを作成・完成することができましたか。

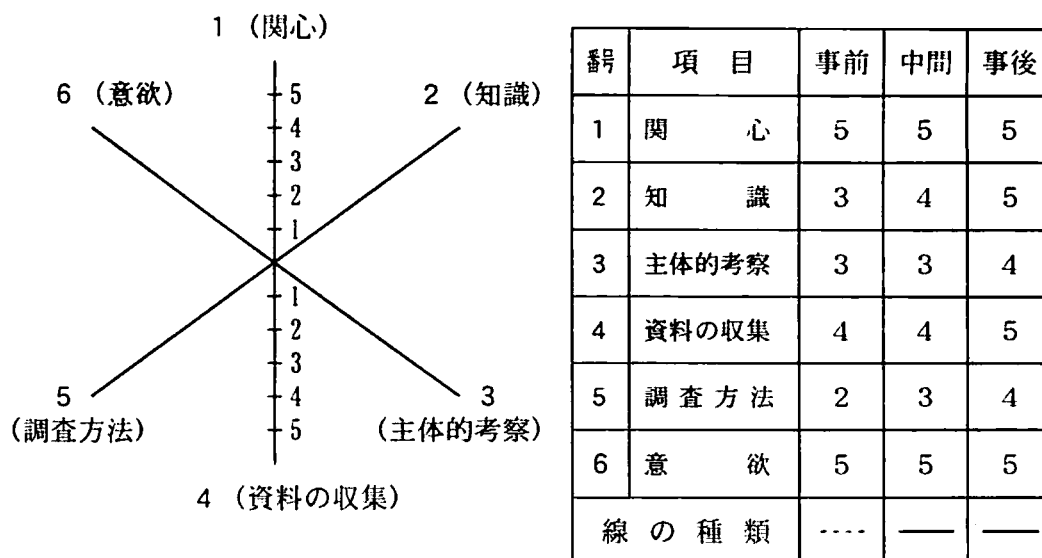
※ このアンケートは四つの観点別評価を参考に作成した。また、事前・中間・事後のアンケートを実施して、質問1～6について、それぞれ5段階で生徒に回答させた。

【資料5】

アンケートのまとめ（例）

1年__組__番 氏名__

- 1 これまで実施した3回のアンケートの回答を、グラフと表にまとめて、課題追究学習を実施する前と後での変化の過程を確認してみましょう。なお、3回のアンケートをグラフにまとめる際は、下の表に示したようにそれぞれの線の種類を変えてください。



- 2 課題追究学習を通して、どのようなことが得られましたか。

遺伝子組換え作物について、これまで漠然としたイメージしか持っていなかったが、課題追究学習をすることにより、遺伝子組換え作物の具体的な知識や現状、今後の課題等を詳しく知ることができるとともに、調査をするときの資料の収集方法も学ぶことができた。また、一生懸命レポート作成に取り組んだので、完成したときに達成感や満足感を得ることができた。

- 3 「科学技術の発達と生命の問題」の課題追究学習を終えて、更に追究したい課題は見つかりましたか。あれば、具体的に書いてください

これまで学習したことをさら更に発展させて、医療分野での遺伝子を利用した技術の発展の歴史や現状、課題等を調べてみたい。

- 4 現在実施している課題追究学習の実施方法を変えることにより、今まで以上にスムーズに課題の追究を進めることができる方法があると思う人は、その方法を具体的に書いてください。

同じ課題を設定した人でグループを作って、分担して課題追究学習を行い、最終的に一つにまとめると、より詳しいレポートができると思った。

③ 「発展的な学習」で生徒の学力をより伸ばす指導

1 一人ひとりに応じた指導のために

人は幼いころ、「どうして鳥は空を飛べるのだろうか。」とか、「魚はなぜ水の中で呼吸ができるのだろうか。」など、様々な疑問をもっていた。その疑問を解決するために、学校の先生に質問したり、大人に聞いてみたり、いろいろな本を読んだりした。

「ものを考える」ことの出発点は、この「なぜ、どうして」から始まる。つまり知的好奇心が学習意欲の源である。そして、その疑問を解決したときの成就感、達成感により、次の学習への意欲もわいてくるのだ。数学の授業の中でも、このように身近な事象から疑問を見つけ、それを解決するために、既習事項を基に調べたり深く考えたりする学習体験の場を生徒たちに与えることが大切である。このような学習活動として、「発展的な学習」の効果的な導入が必要と考える。

平成15年10月に出された中央教育審議会答申においても、「個に応じた指導」の充実を図る観点から、生徒の能力・適正、興味・関心等に応じて、学習を広げたり、深めたりすることを求めている。「発展的な学習」を適切に導入することの重要性和必要性が示されている。

以上のことから研究課題として「発展的な学習」を取り上げ、それについて考察することにする。

(1) 発展的な学習のねらい

文部科学省の「学びのすすめ」によれば、発展的な学習のねらいは、「生徒の理解の程度に違いがあることを踏まえ、学習指導要領の内容を十分理解している生徒に対しては、学習指導要領の内容のみにとどまらず、理解をより深めるなどの発展的な学習に取り組ませ、さらに力を伸ばしていくこと」とある。

発展的な学習のねらいを、より具体化して考えると、次のア～エなどで表せる。

ア 発展的な学習によって、基本的な内容の理解をさらに深める。

イ 発展的な学習によって、知識や技能を確実に定着させる。

ウ 発展的な学習によって、知識や技能を問題解決や日常生活に一層活用できるようにする。

エ 発展的な学習によって、自ら学び自ら考える力を一層育てる。

(2) 発展的な学習の対象生徒

発展的な学習の対象生徒は、主に次の3つの学習集団が考えられる。

ア 到達度別学習集団

学習指導要領に示す内容（現行の教科書の内容）を十分理解でき、それが確実に身に付いている生徒に対して、学習指導要領に示す内容の理解を一層深める学習に取り組ませたり、さらに進んだ内容の学習を行うなど発展的な学習に取り組ませる。例えば、習熟度別編成における発展クラスの生徒などが対象となる。

イ 目標別学習集団

生徒の興味・関心や将来の目標に応じて、学習指導要領に示す内容にとどまらず、身近なものとの関連でとらえることにより生活に生かすことができるようにしたり、

新しいことを見付け創り出す学習体験をさせたりするなどの発展的な学習に取り組ませる。例えば、大学理系学部への進学をめざして類型分けされた理系コースの生徒などが対象となる。

ウ 希望別学習集団

学習指導要領に示す内容の学習を終了した生徒のうち、特に希望する者に対して選択学習などの機会を与え、発展的な学習に取り組ませる。例えば、学校設定科目を選択受講する生徒や課外授業を希望した生徒などが対象となる。

(3) 発展的な学習の内容

基礎・基本の学習を学習指導要領（現行の教科書）に示す内容の学習としたとき、発展的な学習の内容は次のように考えられる。

ア 対象や場を広げていくもの

教科書で基礎的・基本的な内容を学習し、さらに学習する対象を広げたり、場面を変えたりして、学習をより確かにしていく。

例えば、導関数の応用で速度・加速度を学習する。その際、発展的に物理の内容である放物運動について学習させる。そのことで導関数の活用の意味が理解でき、さらに様々な分野に応用できるようになる。

イ 理解を深めていくもの

現在学習していることより少し難しいことを学習して、より深く考えたり、より複雑にして考えたりすることにより、内容が深く理解できるようにする。

例えば、平面図形の学習とともに空間図形を学習することにより、平面図形の理解がより深くなってくる。

ウ 活用できるようにするもの

知識・技能、考え方や表現力を、日常の場面で活用することによってより確かに定着し、一層活用することができるようにする。

例えば、三角比を学習することにより、実際には測定が難しい塔の高さや川の幅などの測量が可能であることを理解し、実際に野外での測量を体験することにより、内容を実感的にとらえ、より一層活用できるようになる。

エ 学習したことを使って新しいことを考えるもの

学習の系統性を重視し、すでに学習したことを使って、新しいことを考え出す。

例えば、平面ベクトルで学習した内容は、空間ベクトルにおいてもほとんど利用でき、空間ベクトル、さらには n 次元ベクトルの学習へと系統的につながっていく。

オ 新しい発想で違った視点から考えるもの

これまでの学習の範囲や原則となる考え方について、新たな設定で学習することにより、より柔軟な発想で学習に取り組むことができるようになる。

例えば、数学Ⅰでは実数について学習する。ここで、さらに数学Ⅱの内容である虚数を考えることにより、違った視点からの考え方が可能となり発想を豊かにすることができる。

(4) 評価について

発展的な学習における評価については、知識・技能の定着を重要な目的としない方がよい。知識・技能を活用できるようにすること、自分で考え主体的・創造的に数学の学習に取り組む態度を育てることなどをめざした評価であることが望ましい。した

がって、生徒の持つ発想の豊かさや知的好奇心の度合い、よい点、進歩の状況、工夫したことや努力したことなどきめ細かく把握し、学習状況や成果を肯定的にとらえ、そのことを生徒自身にも率直に伝えて評価していくことが大切である。

2 「発展的な学習」の実践例

(1) 科目 「数学Ⅰ」(標準単位数3)

(2) 単元 「二次関数」

(目標) 二次関数について理解し、関数を用いて数量の変化を表現することの有用性を認識するとともに、それを具体的な事象の考察や二次不等式を解くことなどに活用できるようにする。

(項目と配当時間)

ア 二次関数とそのグラフ

(ア) 関数とグラフ(3時間) (イ) 二次関数のグラフ(6時間)

イ 二次関数の値の変化

(ア) 二次関数の最大・最小(3時間) (イ) 二次関数の決定(3時間)

(ウ) 発展的な学習(1時間)・・・本時

ウ 二次不等式

(ア) 二次関数のグラフとx軸の位置関係(3時間) (イ) 二次不等式(6時間)

(ウ) 発展的な学習(1時間)

(3) 学習内容

ここでは、(2)イ(ウ)にある「発展的な学習」の例を示す。まず、本時の前の授業で次のことを行なっておく。ある商品を持っていき、その商品の模擬売買をする。40人学級であれば、売り手を20人、買い手を20人に分けて、その商品の値段を決めさせる。売り手は全員その商品を1個持っているものとし、自分が売ってもいいと判断する最も安い価格を紙に書く。買い手は商品が欲しいと想定して自分が買ってもいいと考える最も高い価格を紙に書く。売り手と買い手、別々にその紙を提出することにする。そして、その結果をまとめると、表1のようになった。

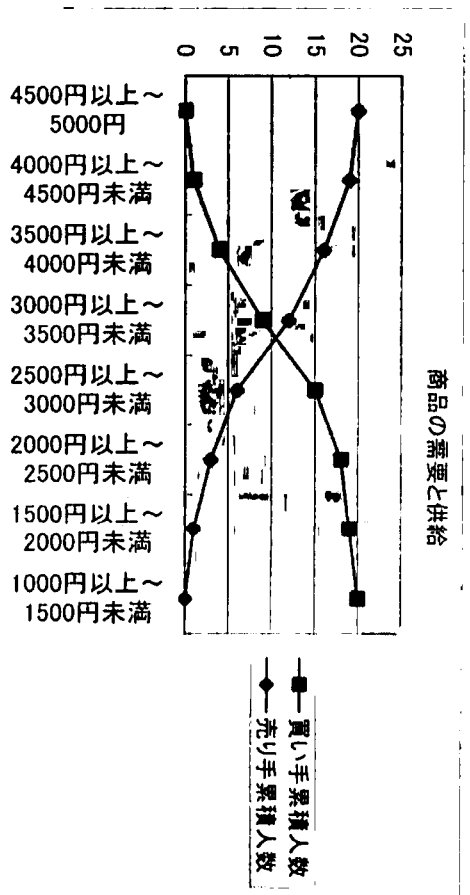
本時の授業は、最初に、表1の結果をもとに、この商品の売上げを増やすためには価格をいくりにすればよいか考える。

表1 商品の模擬売買結果

	買い手人数	買い手累積人数	売り手人数	売り手累積人数
4500円以上～5000円	0	0	1	20
4000円以上～4500円未満	1	1	3	19
3500円以上～4000円未満	3	4	4	16
3000円以上～3500円未満	5	9	6	12
2500円以上～3000円未満	6	15	3	6
2000円以上～2500円未満	3	18	2	3
1500円以上～2000円未満	1	19	1	1
1000円以上～1500円未満	1	20	0	0

次に、需要と供給について説明し、買い手累積人数と売り手累積人数のグラフを用いて、売上げを増やすための販売価格を考察する。

(グラフにおいて、買い手累積人数と売り手累積人数の交点が求める価格になる) これにより、需要と供給のバランスを考慮した価格設定の必要性を認識する。



さらに、以下に示すようなプリント教材を作成し、生徒に配布して指導する。

() 組 () 番 名前 ()

＜問題＞

ある製品を、1個の原価100円で500個仕入れた。この製品を原価どおりの定価で売ると完売できる。製品1個につき1円値上げごとに、売上げ個数は a 個ずつ減るという。製品1個につき x 円値上げたときの売上げ個数を m 個、利益を y 円として次の問いに答えよ。ただし、 a と x は整数で $0 < a < 5$, $0 < x < 125$ とする。

【1】 m を a と x を用いて表せ。また、 y を a と x を用いて表せ。

【2】 $a = 4$ とする。 m を x の式で表し、そのグラフをかけ。

【3】 $a = 4$ とする。このとき、利益 y を最大にするには製品1個の定価をいくらにすればよいか。

＜練習＞ 上記の問題で $a = 3$ とする。

【1】 m を x の式で表し、そのグラフをかけ。

【2】 利益 y を最大にするには製品1個の定価をいくらにすればよいか。

解答例 <問題>

【1】 $m = 500 - ax$

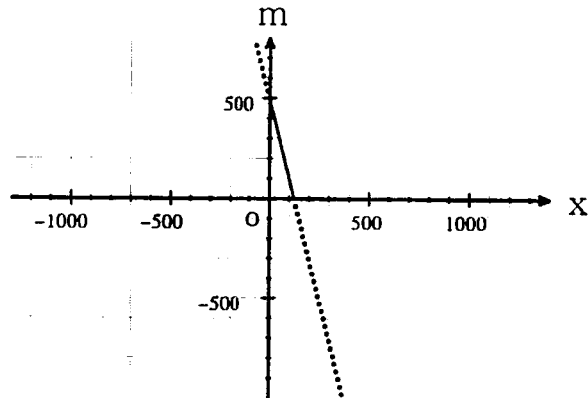
$$y = (100 + x)(500 - ax) - 100 \times 500$$

$$= -ax^2 + (500 - 100a)x$$

【2】 $m = 500 - 4x$ (ただし x は整数で $0 < x < 125$)

グラフは傾き -4 , y 切片 500 の直線上の点で, x は整数,

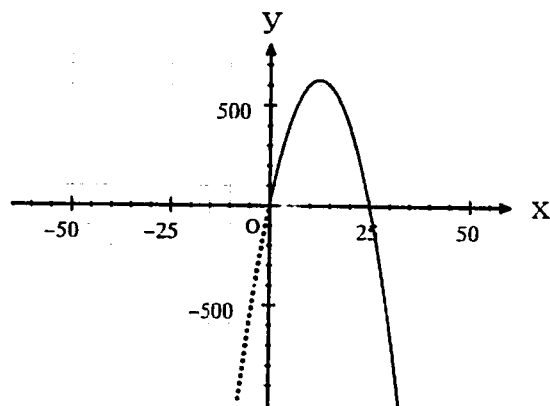
$0 < x < 125$ を満たす点である。



【3】 $y = -4x^2 + 100x$

$$= -4(x^2 - 25x)$$

$$= -4\left(x - \frac{25}{2}\right)^2 + 625$$



x は整数で $0 < x < 125$ だから $x = 12$ または 13 のとき最大値 624 をとる。したがって, 定価を 112 円または 113 円にしたときに利益は最大となる。

※ 商品を店舗販売するときには, 他の商品への波及効果があるので, 1 人でも多く集客するために, 113 円よりも 112 円にする方がよい。
(生徒の学習状況に応じて, このことを追加して考察させる。)

(4) 学習指導案（本時案）

本時の目標	二次関数の値の変化における発展的な学習として、身近な事象から作成した教材を提供し、これまで学習してきたことを用いて、自分で考えて問題解決させ、数学的知識の意味を身近な事象に戻って味わい活用させる。また、関数を用いて数量の変化を表現することの有用性を認識させる。		
	学 習 内 容	指導過程および留意事項	評価の手だて
導 入	・商品の売上げを増やす販売価格	・前時に実施した商品の模擬売買結果表を示す。	・結果表の考察に意欲的であるか。
展 開	・需要と供給の関係 ・販売価格の決定 ・作成プリント ＜問題＞ ＜練習＞	・需要曲線と供給曲線の関係を説明し販売価格をいくりにすれば最も売上げが増えるか考えさせる。 ・作成プリントを配布し、生徒に時間を与えて＜問題＞を考えさせる。（演習時間を十分確保する。） ・生徒に＜解答＞を発表させる。（整数の性質をきちんとおさえる。） ・作成プリントの＜練習＞を宿題にする。	・結果表やグラフを用いて販売価格の決定に意欲的に取り組んでいるか。(①②) ・問題演習の時は生徒の学習を個別に観察する。(③) ・発表者の解答について深く考察しているか。(④)
ま と め	・需要曲線と供給曲線 ・二次関数の最大・最小 ・整数の性質 ・文字の有用性	・本時の重要事項をまとめる。	・プリントを一旦回収して基礎的・基本的事項の定着をみる。(④)

*評価の手だてにおける①～④は評価の4観点①関心・意欲・態度、②数学的な見方や考え方、③表現・処理、④知識・理解に関連することを示す。

(5) 指導のポイント

ア 身近な事象から問題作成する

自分の身の回りに起こる事柄から問題を作成することにより、生徒は「数学」をより身近なものとしてとらえ、「数学の有用性」に気付くことができる。

イ 「考える力」を養う

製品の値段を上げると売上げ個数はどうなるだろうか、減少するとすればどのような下がり方をするのだろうか、価格をいくりにすれば商品が最も多く売れるだろうか、など暮らしの中で起こる具体的事象について、「自ら進んで考察する態度を身に付けることの大切さ」を教える。

ウ 文章の読解力をつける

原価と定価の違いや、問題に使われている文字の意味など、問題文の内容を生徒が正しく理解しているか確認する。また、与えられた文字に数を代入して考えさせることにより、問題文の内容の理解を深めるよう配慮する。

エ 文字の意味の理解と扱い方に注意する

問題で与えられた文字について、どのような関係が成り立つのか、また、それらの文字について条件（正の数、負の数、整数など）はあるかなど考えさせる。さらに、整数の性質や文字を使うことの有用性についても触れてみる。

オ 関数についての理解を深める

一次関数と二次関数の理解はできているか、定義域に条件がついたときにグラフが正確に描けるか確認する。また、二次関数の最大・最小について正しく理解できているか、文字の値の範囲を考えてきちんと正解を導くことができるか確認する。さらに、類題などを数多く演習させることで学力の定着を図る。

3 「発展的な学習」の指導方法およびその留意点

発展的な学習を計画・実施する際に留意したいことを次にまとめた。

(1) 学習指導要領に示されている内容を著しく前倒ししないこと。

学校としての指導計画が確立していて、各教科における系統が配慮されていれば、近接の内容とのかかわりで、前に移動させて学習させることは可能である。

(2) 生徒の学習状況の実態を無視しないこと。生徒の理解の状況、習熟の状況をとらえ、既習事項や既有体験の状況に応じて無理のないようにする。

(3) 生徒の学習の負担に配慮すること。各教科の年間授業時数は学年に応じて定められている。それを著しく上回ることがないようにする。

(4) 発展的な学習は、この内容を扱えばその教科の学習効果が大きくなるという確信を持って計画し実施することが求められる。

4 参考文献

小学校算数科 発展学習の指導技法 小島 宏 編（明治図書）

高等学校学習指導要領解説 数学編 理数編 平成 11 年 12 月文部省（実教出版）

高等学校学習指導要領 「月刊高校教育」編集部（学事出版株式会社）

教科書 新編 数学Ⅰ（数研出版）

教科書 数学Ⅰ（東京書籍）

子どもが算数・数学好きになる秘訣 芳沢 光雄 著（日本評論社）

たとえと事実でつづる経済 12 話 越田 年彦（山川出版社）

VIEW 2 1 進研ニュース・2003 volume2（ベネッセコーポレーション）

VIEW 2 1 進研ニュース・2003 volume3（ベネッセコーポレーション）

④ 「課題研究」において展開する発展的な学習と補充的な学習

1 一人ひとりに応じた指導のために

1999年の国際教育到達度評価学会（IEA）による中学校2年生を対象にした調査結果では、「日本の子供たちは理科の成績はよくても、学年が上がるにつれ理科を面白いと思わなくなり、生活や将来の職業とも結びつきにくくなっている。」という指摘がなされている。

高等学校における理科教育においても、授業時間数の減少や大学入試で課せられる理科の科目が増えることによる1科目当たりの単位数減少などにより、観察や実験を取り入れた授業を展開することが益々難しくなっており、知識・理解偏重の授業展開になりがちであるというのが現状である。しかし、こうした現状の中でこそ、基礎・基本をしっかりと身に付けさせ、生涯にわたって主体的に学ぶ意欲や、思考力・判断力・表現力を含めた真の学力を育成することが大切であり、これまで以上に生徒一人ひとりに応じた指導の充実を図ることが重要である。

その際に、次の2つを目標とした学習指導が有効であると考ええる。

- 個別指導やグループ別指導によって、理解や習熟の程度に応じた指導方法の工夫や、基礎・基本を確実に身に付けさせる指導方法を工夫する。
- 観察、実験、発表等、体験的・問題解決的な学習の充実を図り、生徒の興味・関心を涵養するとともに、学ぶ意欲や思考力の育成を図る。

ここでは、この2つの目標を達成するため、高等学校理科の「生物Ⅱ」における課題研究の指導事例を取り上げ、生徒一人ひとりに応じた指導の教材開発と指導方法等の研究を行う。

2 取組みの例

理科における「Ⅱを付した科目」は、「Ⅰを付した科目」を学習した後、より専門性を高めることを希望する生徒が選択履修する科目である。その意味では、学習する生徒の興味・関心は高く、指導する教師も、より専門性を高めた発展的な学習の指導の展開が可能になる。中でも「Ⅱを付した科目」の単元として学習する課題研究は、生徒自らが課題を設定して主体的に取り組む学習なので、既習の内容をより発展させ、専門性の高い分野にまで踏み込むことが可能である。

また、課題研究は発展的な学習の指導に効果的なだけでなく、課題研究を実践していく過程で自らつまづきを見つけ、その解決に向けて取り組む姿勢に大きな変容が見られることから、生徒一人ひとりの能力や習熟の程度に応じた補充的な学習の指導にも効果的である。

「生物Ⅱ」は3年次で実施する学校が多く、課題研究を実施する時間は限られてくる。少ない授業時間の中で実施するために、1つの単元が終了した後、その単元に関連した共通テーマの中から生徒が課題を見つけ、研究に取り組むという方法で実施すると、教師も生徒も負担が少なく、かつ科学的な思考力や判断力を養うのに効果的ではないかと

考える。「生物Ⅱ」の単元終了後に、確認テストを行ってつまずきの箇所を見つけ、補充的な学習が必要とされる生徒にはその補充的な学習としての課題研究を、習熟の程度の高い生徒には発展的な学習としての課題研究を展開させることで、生徒一人ひとりに応じた確かな学力の向上を目指す。

(1) 課題研究における学習の流れ

「酵素」は、「生物Ⅱ」の中では下記の単元で学習するが、それに関連した探究活動として【探究活動1～3】を掲載している教科書が多い。

- (1) 生物現象と物質

ア タンパク質と生物体の機能

(ア) 生物体内の化学反応と酵素

【探究活動1】カタラーゼのはたらきと酵素の性質

(イ) 同化と異化

【探究活動2】脱水素酵素のはたらき

【探究活動3】酵母菌のアルコール発酵

「酵素」に関する一連の学習や探究活動を実施した後、基本的概念の定着を図るために、図1にあるような「※ 酵素に関する基礎・基本事項の確認テスト」を実施し、つまずきの箇所を見つけた上で、生徒一人ひとりに応じた課題研究の計画を立てさせる。

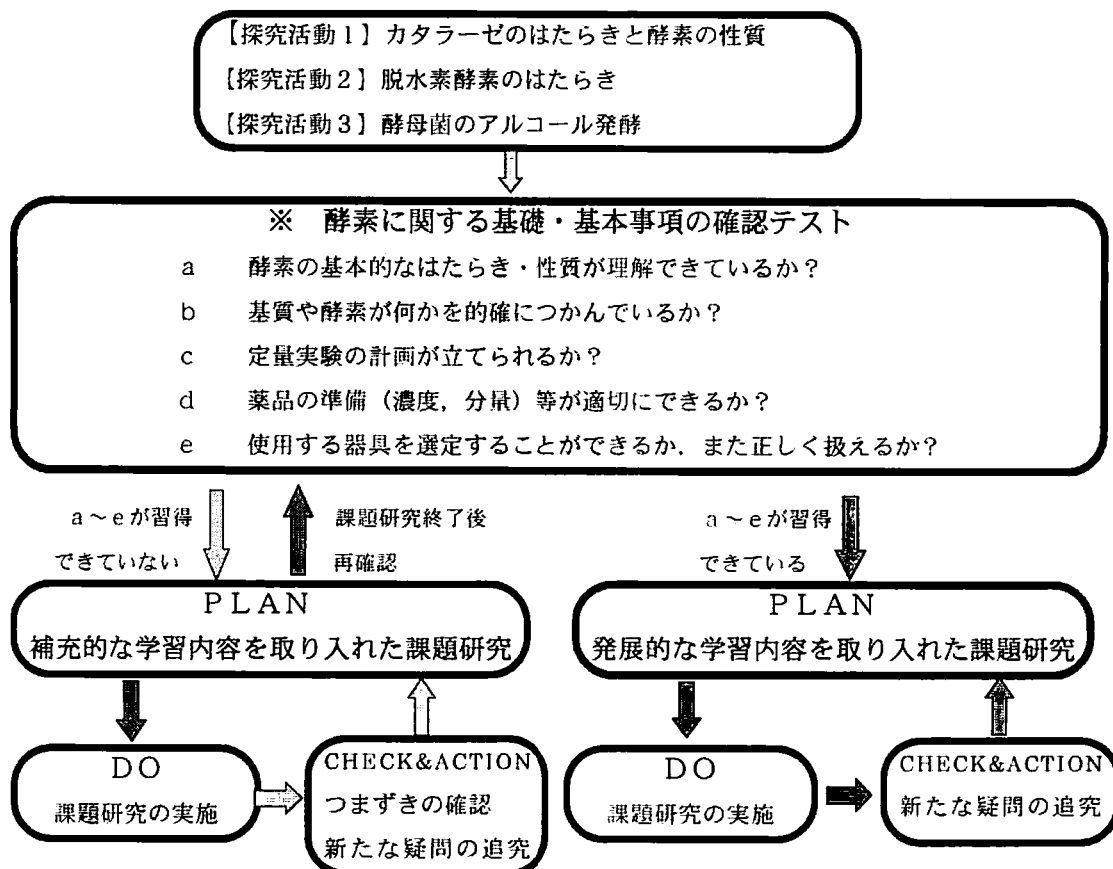


図1 「課題研究」を実践する中で展開する発展的な学習と補充的な学習の流れ

(2) 補充的な学習による課題研究

確認テストにより、図1のa～eのいずれかについて習熟の程度が十分でないと評価された生徒に対しては、その項目に関する補充的な学習を取り入れた課題研究を展開するようにアドバイスして、計画を立てさせる(図2)。なお、実施後の生徒の感想を以下に示す。

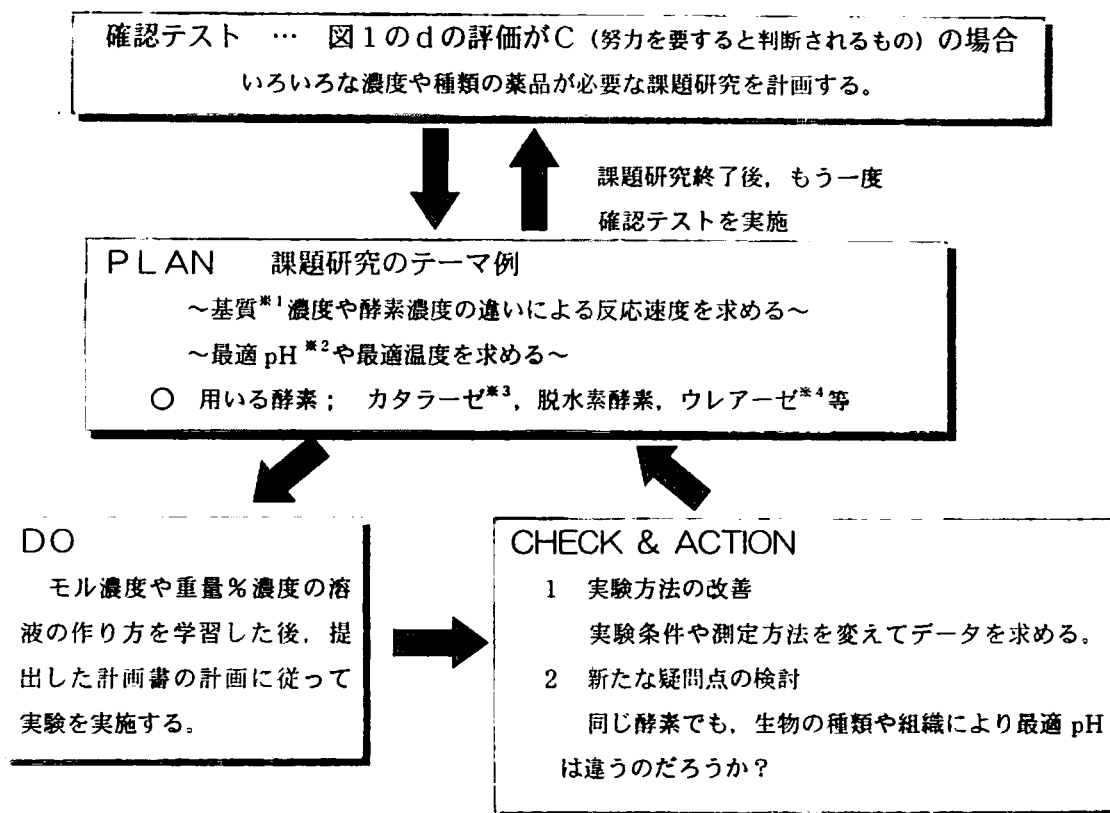


図2 補充的な学習による課題研究の展開例

生徒の感想から

カタラーゼは動物の肝臓にしか存在しないものと思っていた。でも、文献で調べるうちに「嫌気性微生物^{*5}以外のすべての生物に存在し、特に植物では葉緑体に多く含まれている」ことがわかって驚いた。そして、私たちが行った実験も、「植物の組織では、葉に多くのカタラーゼが含まれている」という結果になったのでうれしかった。実験を進める過程で、実験方法を少しずつ変えて改善したり、新たに追加したり、より詳しい結果が出るように工夫をしたりして、発見の連続！楽しく学べた。また、用いる薬品の濃度の作り方がよくわからず、モル濃度と%濃度の違いを基本から勉強した。たくさんの薬品を調合するうちに実験器具の名称を再確認できたし、扱い方も正しくできるようになった。

^{*1} 基質…酵素がはたらく物質

^{*2} 最適pH…酵素が最もよくはたらくpH

^{*3} カタラーゼ…過酸化水素を分解する酵素

^{*4} ウレアーゼ…尿素をアンモニアに分解する酵素

^{*5} 嫌気性微生物…酸素を用いずに呼吸する細菌等の生物

(3) 発展的な学習による課題研究

すべての項目について、習熟の程度が高いと評価された生徒には、内容的に多少難易度の高いテーマを与え、自ら計画を立てて取り組む発展的な学習を行った。

高大連携によって、大学の教官による出前講義や、大学での高校生向け講習会で、バイオテクノロジー等の先端技術を学ぶ機会が多くなっている。高校の授業で実施するには、施設・設備面で十分とはいえないが、教材開発や指導方法を工夫することで生徒の進路意識を高揚を図りたい(図3)。なお、実施後の生徒の感想を以下に示す。



最新の科学技術 ～バイオ技術～ に興味・関心がある生徒の取組み

確認テスト … すべての項目の評価がA(十分満足できると判断されるもの)の場合
生徒の興味・関心のある内容から課題研究を計画する。

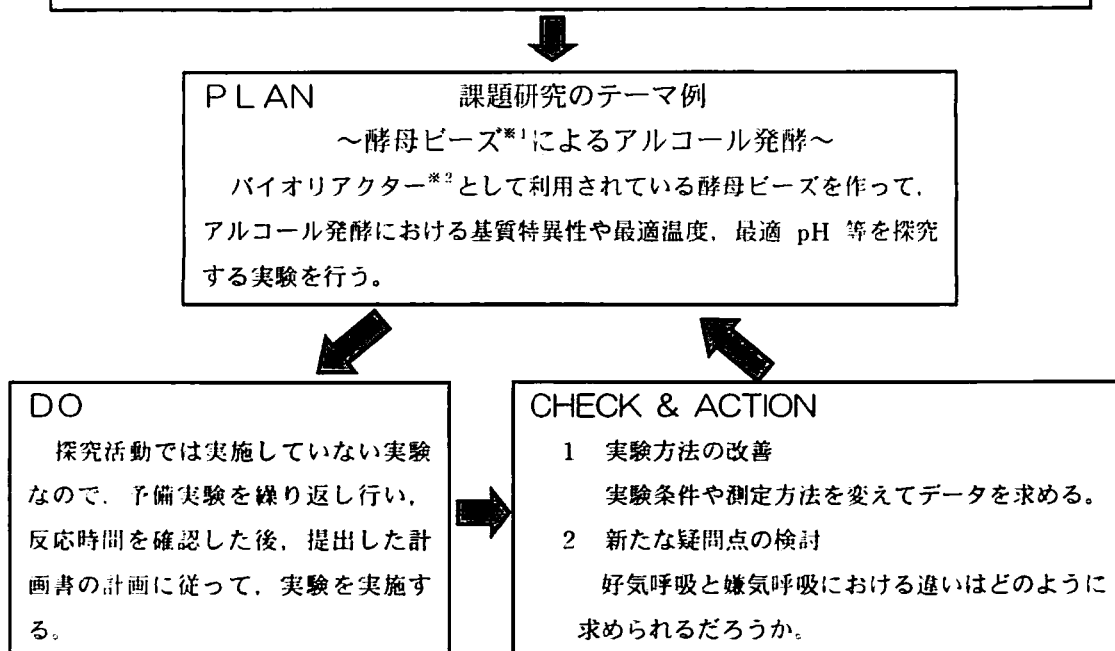


図3 発展的な学習による課題研究の展開例

*1 酵母ビーズ … 酵母菌をアルギン酸で固定化したもので、ビーズの浮沈によりアルコール発酵を視覚的にとらえることができる。

*2 バイオリアクター … 生体反応利用装置。固定化した酵素や微生物等を利用して種々の化学反応を行わせる反応装置。有用物質の工業的規模での生産や病気の診断に用いる。

生徒の感想から

授業で学んだこと以上の専門的な基礎知識が必要で、インターネットや文献などで調べて実験計画を立てた。今回の課題研究でバイオ技術の一端を学ぶことができたが、できればこのような分野に進学して、さらに詳しく学びたいと思う。



(4) 指導計画 ～「生物体内の化学反応と酵素」を共通テーマとした課題研究 ～

ア 大單元における位置づけ

「生物体内の化学反応と酵素」は、大單元「生物現象と物質」の中で学習する小単元の1つである。生徒は、酵素の基礎的・基本的な内容を学習し、それに関する探究活動として、酵素の一種であるカタラーゼを教材にして、酵素には最適温度や最適pHがあることを学習している。また、それに続く小単元の「同化と異化」でも、内容に関連した脱水素酵素やアルコール発酵を探究活動で取り上げ、酵素のはたらきや性質について、さらに学習内容を深化させている。

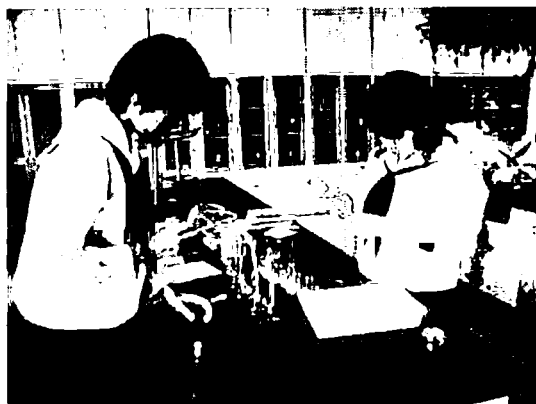
これらの学習を終えた上で、その内容に関連したことを共通テーマとして、課題研究に取り組む。

イ 教材観

日常生活にはさまざまな酵素がかかわっていることが多く、生徒にとっては、比較的取り組みやすい教材である。実験材料は、家庭にあるものが多いので、入手しやすい。

さらに、バイオテクノロジー等の実験過程の中で、酵素は欠かすことのできない要素になる。その意味で、酵素は専門分野に進学を希望している生徒にとっても、基礎的・基本的な内容をしっかり習得してほしい単元である。

消化酵素や発酵食品等、身近な酵素のはたらきや性質について、自ら課題を設定し、探究していく手法を学習させたい。



ウ 指導計画

(評価例は次ページの表1による)

指導計画	一人ひとりに応じた指導の留意点	評価例
第1次 単元の確認テストと課題研究への取り組み方 [1時間]	○基礎的・基本的な事項について確認テストを行い、定着が不十分な生徒はその内容に応じた補充的な課題研究を、また、習熟の程度が高い生徒は、多少難易度の高い発展的な課題研究を設定するよう、個別に助言する。	エa, b
第2次 課題研究 第1時 1次計画書の検討 (課題の設定) [1時間]	○共通テーマがあるとはいえ、生徒はテーマ設定をすることがなかなかスムーズにできない。ある程度具体的な研究事例を準備しておき、さらにインターネット等で情報収集をして課題設定をするように、指導・助言する。	アa, c イa
第2時 1次計画書の見直し、及び2次計画書の検討 [1時間]	○提出された1次計画書について、不十分な点や改善箇所があれば、個別に対応する。その際、生徒自らが計画の不十分な箇所に気づくよう、適切なヒントを与えて活動の支援とする。 ○薬品を使った実験が多いので、安全面での指導は個別に徹底する。	イb
第3時 課題研究の実施 [3時間]	○実験がスムーズに進まないことがあっても、失敗が逆に次への課題につながることや、「なぜだろう?」と考えることから大きな飛躍が生まれることを、生徒の側に立った上で支援する必要がある。 ○対照実験の設定をきちんと行うこと、実験器具や薬品の扱いを安全に正しく行うことなど、学習状況を確認しながら、助言・指導する。	アd, e ウa, b
第3次 課題研究のまとめ 第1時 レポートのまとめ [2時間]	○課題研究に初めて取り組む生徒も多いので、前もって全体にレポートの書き方を徹底して説明する必要がある。 [指導のポイント] ①ねらいや動機がきちんと記述できているか ②データ処理の方法は正確にできているか ③グラフ・表・イラストを効果的に入れるなど、結果のまとめ方に工夫があるか 等 ○全体指導をした後、個別指導の必要な生徒には、レポートの作成過程で助言・指導する。	アa, b, c イc, d ウc, d
第2時 発表 [1時間]	○作成したレポートを冊子にしたり、プレゼンテーションソフトを用いた発表形式にして、他の生徒の研究を相互に検討する機会を設ける。 ○併せて、自己評価や相互評価を行い、自分の研究を俯瞰する機会を与える。	アf ウe, f

(5) 評価

ア 観点別評価方法

計画書やレポートからは、科学的で創意に満ちた表現方法を見ることができるので、評価情報が多い。「ねらいや動機」等に記述される内容からは、「自然の事象を探究しようとする関心や意欲」等を読み取ることができる。また「今後の課題や感想」等に記述される内容からは、「科学に対する態度」を読み取ることができる。

さらに、表やグラフによる表現の工夫、データ処理の方法等から「観察、実験の表現・技能」を読み取ることができる。

ただし、こうした評価を可能にするためには、スキル学習を段階的に行って、レポートの書き方等を全員に指導し徹底しておく必要がある。

表1 評価例

		評 価 項 目	評価(3段階)
ア	関心 意欲 態度	a ねらいや動機がきちんと記述できたか	A・B・C
		b 各報告書を期限内に提出したか、規定の分量で記述されていたか	A・B・C
		c インターネットや図書等の文献を積極的に活用したか	A・B・C
		d 実験器具の準備や後片づけをきちんとしたか	A・B・C
		e 課題研究全般に意欲的に取り組んだか	A・B・C
		f 発表の態度は意欲的であったか	A・B・C
イ	思考 判断	a 仮説の設定が的確にできたか	A・B・C
		b 予想される問題を的確に把握し、改善するよう努力したか	A・B・C
		c 実験結果から考察を的確にまとめることができたか	A・B・C
		d 今後の課題を把握できたか	A・B・C
ウ	観察、実験 の 技能・表現	a 実験器具や薬品の扱いが正確にできたか	A・B・C
		b 計画的に実験に取り組めたか(対照実験の設定等)	A・B・C
		c 結果のまとめ方に工夫があったか (グラフ・表・イラスト等を入れわかりやすく表現しているか)	A・B・C
		d データ処理の方法は正確にできていたか	A・B・C
		e 発表のとき、わかりやすい説明であったか	A・B・C
		f 視聴者にわかりやすいプレゼンテーションの工夫があったか	A・B・C
エ	知識 理解	a 酵素のはたらきや性質が理解できているか	A・B・C
		b 使用する器具の名称、薬品の名称・性質・濃度についての正確な知識があるか	A・B・C

イ 自己評価と相互評価

課題研究におけるプレゼンテーションやレポート等の発表活動では、相互評価や自己評価も併せて行うとよい。その際、ワークシートやレポートの中で、評定尺度法、自由記述法、質問紙法等の形式で行うと取り組みやすい(表2・3参照)。

この評価を行うことで、生徒自身が学習内容や取組みに関心をもち、学習を深化・発展させたり、到達目標に達していない生徒にとっては努力を要する観点を自ら確認するという、積極的な意味も生まれる。

表2 評定尺度法・質問紙法による自己評価例 … 報告書に添付して提出

【自己評価表】		
年 組 []		
今回の課題研究を振り返って、自分の取組みについて3段階で評価してみよう。 (この自己評価は、自分の学習を振り返るものです。結果は、成績に直接反映されるものではありません。)		
評価項目	評価	評価の理由・顕著な活動等
・意欲的に課題に取り組んだか？	㊤・B・C	休み時間も測定してがんばった。
・周りと協調して責任ある行動がとれたか？	A・㊤・C	ギリギリに実験が終わり片付けができなかったことがあった。
・学習をとおして内容の理解度が増したか？	㊤・B・C	酵素については任せてください。
・問題に直面したとき解決しようと努力したか？	㊤・B・C	指示薬の変化がはっきりしなかったとき、実験条件を変える等の工夫した。
・実験技能の向上が見られたか？	㊤・B・C	薬品の作り方はばっちりできるようになった。
・報告書のまとめ方を工夫したか？	A・㊤・C	グラフを色分けするとかして、もう少しわかりやすくすればよかった。

表3 自由記述法による相互評価例 … 他の生徒の発表時に実施

【相互評価表】		
評価対象者 []		
今回の発表に対して、よかった点を2つ以上、改善が必要な点を1つ以上、具体的に書こう。		
	発表内容（まとめ方等）	発表の仕方（態度、声の大きさ等）
よい点	・グラフや表が効果的に使われていて、とってもよかったと思いました。 ・データがたくさんあって、よく実験をしたなあって感心しました。	・声をはっきりとしてよく内容が聞き取れました。 ・堂々としていて、すごい！
改善点	・この実験を始めた動機を、もう少し詳しく説明してほしかったです。	・説明が少し速かったので、もう少しゆっくり聞きたかったです。

3 留意事項

(1) 考察

今回の学習指導要領の改訂で、旧科目「I Bを付した科目」の内容のかなりの部分が新科目「IIを付した科目」に移行し、また「発展的な内容」を各教科書で独自に取り入れることができるようになったことにより、「生物II」を標準単位3単位で学習

するには内容が多く、課題研究の単元に時間をかける余裕がなくなっているのが現状である。

しかし、課題研究を実施してみて、

- 個別指導やグループ別指導によって、理解や習熟の程度に応じて、基礎・基本やさらには発展的な力を確実に身に付けさせることができる。
- 観察、実験、発表等、体験的・問題解決的な学習の充実を図り、生徒の興味・関心を涵養するとともに、学ぶ意欲や思考力の育成を図ることができる。

というように、主体的に学ぶ意欲や、思考力・判断力・表現力を含めた真の学力を育成することに、効果的であることがわかった。

課題研究の実施に当たっては、休み時間や放課後等、授業時間外に指導が必要なことも多く、教師の負担は大きいですが、生徒と教師が「科学をする喜び」を共有できる課題研究を、今後も工夫し発展させていきたい。

以下、今後の課題をあげ、研究のまとめとする。

(2) 課題

ア 課題研究は、個別指導をとおして、理解や習熟の程度に応じた指導ができ、また観察、実験、発表等をとおして体験的・問題解決的な学習の充実を図ることに効果的であるが、準備から発表までかなりの時間を要するので、年間授業計画の中に位置づけ、計画的に実施する必要がある。

イ 補充的な学習として課題研究に取り組んだ生徒について、設定した課題が適切であったかどうか分析することが必要である。再確認テストを実施するとともに、課題研究の内容そのものについて分析・検討を行い、指導を継続することが大切である。

ウ 発展的な学習として課題研究に取り組んだ生徒について、課題研究を主体的に追究できたか、また、さらに学習を深化する課題への取組みとなったか等について、分析・検討を行い、指導を継続することが大切である。

エ 生徒の学習に対する努力や意欲を評価することが、次の学習へのステップにつながることになる。学習活動がスムーズに進まないことがあっても、失敗が逆に次への疑問につながることや、「なぜだろう？」と考えることから大きな飛躍が生まれることを、生徒の側に立った上で支援することが不可欠である。

そのためにも、学習結果を評価するだけでなく、学習過程を評価し、指導の改善に生かす工夫を、今後さらに検討する必要がある。

4 参考文献

- ・ 高等学校学習指導要領解説 理科編 (平成11年12月文部省)
- ・ 教科書「新編生物Ⅱ」 (実教出版)
- ・ 教科書「生物Ⅱ」 (数研出版)
- ・ 月刊 高校教育 2003年9月号 (学事出版)

⑤ ティーム・ティーチング（日本人教師）による少人数指導

1 一人ひとりに応じた指導のために

外国語科の目標である「実践的コミュニケーション能力」を育成するためには、授業において生徒にできるだけ多くの発言の機会を与えたり、いろいろな会話の場面を設定することが望まれる。また、生徒の理解度に個人差が出やすい現状を踏まえると、一人一人に応じた指導の工夫や、基礎・基本を定着させるための授業体制の確立が必要である。

こうした観点から、より効果的な指導方法・授業形態として、個別指導や少人数指導、習熟度別授業、ティーム・ティーチング（T・T）などが考えられる。

そこで、一人ひとりに応じた指導として、授業の後半で理解度に応じ、生徒を基礎グループと発展グループに分け、少人数指導を行う日本人同士のT・Tを考察してみた。

具体的な設定理由は次のとおりである。

（1）日本人同士のT・Tにより、個々の生徒の実態・能力に応じたきめ細やかな指導の充実を図る。

- ・ 2人の日本人教師によるT・Tにより、ALTとのT・Tに加え、さらに綿密な協議を通して、より生徒を把握した様々な指導が可能になる。また、T1とT2がメインとサブという関係でなく、同等の立場で指導が可能となる。
- ・ 各自の学習の到達度に合った勉強がスムーズにできるよう、柔軟で丁寧な指導が可能になる。

（2）生徒の個性を生かしながら、考える力の育成と基礎・基本の定着を図る。

- ・ 指導の過程で生徒の到達やつまずきの状況に気づきやすく、対応も速くできる。
- ・ コミュニケーション活動を中心とした授業の展開がしやすい。
- ・ ワークシート等利用した様々な指導方法が可能になる。
- ・ より客観的、継続的な指導と評価の改善が可能になる。

2 取組みの例

（1）科目 「英語Ⅰ」

（2）単元 「Lesson 7 『 So Many Countries, So Many Laws 』」

〈教科書「Power On English Ⅰ（東京書籍）」〉

（3）本課の学習内容

- 1 Getting Started 世界の法律の違いをイラストで紹介。
- 2 Part 1 国や社会は、文化を守るために法律を作る。スイスからその1例を紹介。
- 3 Part 2 厳しすぎると思われるような法律をシンガポールから1つ紹介。
- 4 Part 3 音楽放送、テレビ視聴に関する法律を他国から2つ紹介。
- 5 まとめ リーディングテスト（自己評価カード）、復習テスト、インタビュー

（4）本課の目標

- ア 国々によって異なる法律を学び、その異文化理解を通して寛容な価値観を養う。
- イ 間違いを恐れず、積極的に自己表現ができるようになる。
- ウ 発音、強勢、イントネーション等に配慮し、滑らかな読みができるようになる。
- エ 言語材料や「言語の働き」に関する表現について運用能力を身につける。

(5) 本時の目標（本課への導入とPart 1 前半）

ア 各国の法律はその国の文化が反映していることを理解する。

イ S+V+O (whatなどで始まる節)を理解し、自己表現できるようになる。

ウ 発音、強勢、イントネーション等に気をつけ、積極的に読めるようになる。

(6) 少人数指導（理解度に応じたグループ別指導）

授業の後半、各自の評価（確認ワークシート、自己評価カード）と希望により基礎グループAと発展グループBに別れ、各グループで個に応じた指導を実施する。

(7) 指導過程

指導の流れ		学習活動	指導上の留意点	考えられる評価規準例	評価の手だて
T 1の活動	T 2の活動				
①挨拶	②ウォームアップ Q&A	挨拶 応答	軽快にあいさつをする	・積極的に話そうとしている	活動観察
T 1・T 2によるデモンストレーション (イラストに関する対話)		導入 リスニング	世界の国々の法律について、 平易な英語で対話する	・メモをとりながら聞いている ・適切に聞き取り、適切に応答できる	活動観察
Q&A 生徒の援助	生徒の支援 言い換え	応答			
発音の確認 机間指導	単語の発音 テープ操作	発音練習 本文のリスニング	明確な発音を心がける	・強勢、発音に配慮している	活動観察
パラグラフの要約 机間指導	質問説明 Q&A	本文の理解 異文化理解 応答・ノート	T・Tを効率よく行う 内容の確認	・法律と文化の関係を理解している	活動観察
言語材料についての説明と演習	プリント配布、板書、 巡視・支援	確認ワークシート ・S + V + O (疑問詞節)	身近な興味深い例文を取り上げる	・構文の運用についての基本的な知識がある	活動観察 確認ワークシート 練習テスト(後II)
T1・T2によるデモンストレーションとペアワーク ・S + V + O(疑問詞節)		言語活動 ペアワーク 発表	場面や状況を設定して会話させる	・場面に応じて適切かつ積極的に話している	活動観察 ペアワークシート 配属カード
Aグループ	Bグループ	グループ別学習	授業の理解度により自分のレベルで総復習をさせる	・質問をする等、意欲的に取り組み、さらに理解を高めようとしている	グループワークシート 活動観察
・基本的なサライジング ・本時のポイント復習	・発展的なサライジング ・発展問題への挑戦	自己評価により希望する班に入り、プリントで学習			
コーズリーディング 読みの確認 机間指導	読みの確認 ペアリーディングの指示	まとめ 音読 ① Textを見て ② Textを見ず	各文の意味や構造を考え読ませる	・場面や状況に応じて適切な読みができる	活動観察 リーディングリスト (後II)

(8) 指導上の留意点

- ア クラスルーム・イングリッシュをはじめ、できるだけ英語を使用する。
- イ T1とT2が綿密な指導案を作り、それぞれの役割分担を明確にしておく。
- ウ 指導の反省と評価は2人で行い、次の指導案作りに役立たせる。

(9) 評価上の留意点

- ア 4つの観点に基づき、絶対評価により、継続的な評価を行う。
- イ 観点別評価は、1時間の授業で数個の観点に絞り込む。最終的に1課でバランスよく見れるように総合的評価を行う。

<評価の観点>

観点 言語活動	関心・意欲・態度		表現の能力		理解の能力		知識・理解	
	積極性	継続	正確さ	適切さ	正確さ	適切さ	言語	文化
聞くこと	○	○			○	○	○	○
話すこと	○	○	○	○			○	○
読むこと	○	○	○	○	○	○	○	○
書くこと	○	○	○	○			○	○

(評価規準は省略)

<本時における評価の観点>

観点 言語活動	関心・意欲・態度		表現の能力		理解の能力		知識・理解	
	積極性	継続	正確さ	適切さ	正確さ	適切さ	言語	文化
聞くこと	○					○		
話すこと	○			○			○	
読むこと				○				○
書くこと								

(評価規準は指導過程での例を参照)

【資料】

(1) 確認ワークシート

確認ワークシート

1年 ____ 組 ____ 番 氏 名 _____

1 次の対話の下線部を訳しなさい。

A: Your team is now in top shape. (今、君のチームは絶好調だね。)

B: Exactly. But we are not sure which team will win the championship.
(そうだね。でも _____ わからないよ。)

2 次の対話文の()内に適当な語を入れよ。

A: Do you remember () () () came out?
あの歌手がいつデビューしたか覚えてる?

B: I'm not sure, but about ten years ago?

(2) ペアワークシート

ペアワークシート

次の状況を想定し、下の対話文に適切な言葉を入れて、会話をしなさい。

- ① ジョンの誕生日を知りたい。
- ② ボブの出身地を知りたい。
- ③ 次の列車がいつ出発するか知りたい。
- ④ 映画が何時に始まるか知りたい。
- ⑤ リンダ先生が好きな食べ物を知りたい。

A : Do you know _____ ?

B : ① Yes, _____ .

② I'm not sure, but maybe _____ .

(3) 自己評価カード

<自己評価カード> 氏 名 ()

- | | | | | | | | |
|---|-----------------------|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 相手の話を真剣に聞こうとしたか。 | → | [| A | B | C |] |
| 2 | 授業で学んだ表現を使うことができたか。 | → | [| A | B | C |] |
| 3 | ペアやグループで協力しあって取り組めたか。 | → | [| A | B | C |] |
| 4 | 感想・反省 [| | | | | |] |

(4) グループ別ワークシート

◆Aグループ(基礎)

(1) サマライジング

・教科書を見て () 内に適当な語を入れよ。

We live in a society and the () makes laws for people to continue life there. When we () at a country's law, we can learn something () about the society. But the law is something () to people to outsiders.

(2) 本時のポイントの復習

- ・質問
- ・メモ

◆Bグループ（発展）

（１）サマライジング

・教科書を見ずに（ ）内に適当な語を入れよ。

（ ） do societies make laws? Every society makes laws to continue life there. （ ） is important for one society, however, may not be important for others. We can learn something about （ ） of the society by （ ） at a country's laws.

（２）発展問題への挑戦

次の対話文の下線部に適当な語を入れよ。

Mom : Tell me _____.

Jane : I'll come home by seven. Don't worry, Mom.

メモ

【生徒のアンケート調査】 対象生徒：１年生（１クラス）

＜自己評価カード集計結果＞

（１）相手の話を真剣に聞こうとしたか。

[A 76.3% B 23.7% C 0%]

（２）授業で学んだ表現を使うことができたか。

[A 57.9% B 34.2% C 7.9%]

（３）ペアやグループで協力しあって取り組めたか。

[A 57.9% B 34.2% C 7.9%]

＜アンケート集計結果＞

A 全くそうである B ほぼそうである C あまりそうでない D 全くそうでない

（１）充実度（授業は充実していましたか。）

[A 52.6% B 44.7% C 2.6% D 0%]

（２）参加度（積極的に参加できましたか。）

[A 34.2% B 52.6% C 13.2% D 0%]

（３）理解度（授業の内容を理解できましたか。）

[A 26.3% B 52.6% C 18.4% D 2.6%]

（４）満足度（T・T授業に満足していますか。）

[A 47.4% B 42.1% C 10.5% D 0%]

（５）グループ別学習はよかったですか。

[A 39.4% B 50.0% C 7.9% D 2.6%]

(6) 生徒の感想

- ・いつもと違う形態（T・T、グループ別学習等）で、楽しく、充実した勉強ができた。
- ・2人の先生がおられたので、質問がすぐできてよかった。
- ・ペアワークやグループ別学習はよかった。今後もして欲しい。
- ・英語を聞いたり話したりする機会が多く、難しいところもあったが楽しく学べた。
- ・学習したことを、自分が作って実際に会話してみることはおもしろい。
- ・教科書には載っていないことで、先生が話されていたフランスやイギリスなどの、ユニークで未知の文化を知ることができた。
- ・日本人同士のT・Tはとても新鮮で楽しく、気合いも入った。
- ・いつもと違う形態だったが、想像以上によく理解できた。
- ・先生も生徒も英語を使う機会が多く、英語らしい授業だった。
- ・英語を使うことが多く、少し緊張もしたが、英語を真剣に聞こうという気になった。
- ・習ったこと（疑問詞節）を自分で使って実際に話すことは必要だと思った。
- ・ワークシートの例文がなじみやすくよかった。
- ・ペアワークやグループ活動など、真剣に、楽しくできてよかった。
- ・T・Tやグループ別学習で、理解度が高まったと思う。

3 事例についての考察及び課題等

(1) 成果

ア T・T

- ・T・Tは指導者が2人いるので、生徒の実態をより広く把握できる。
- ・生徒の発言の機会を増やすことができ、緊張感のある授業展開ができる。
- ・日本人同士のT・Tにおいても、ALTとのT・Tと同様、充実した授業ができる。
- ・T・Tの役割分担を明確にすることで、絶えず生徒の実態を観察することができ、質問等にも対応しやすい。
- ・T・Tにおいて、T1とT2とのデモンストレーション等実施してみせることができ、生徒の理解度が高まる。
- ・日本人同士のT・Tの場合、打ち合わせをする機会を設定することが容易で、綿密な協議が行える。

イ 少人数指導（理解度に応じたグループ別指導）

- ・グループ別指導をすることで、生徒の実態に応じたきめ細かい指導ができる。
- ・一人ひとりの学習の到達度にあわせた授業により、学習意欲が高まった。
- ・グループ別指導では、生徒に応じた指導ができ、生徒の理解度が増す。わかる授業を目指す一方策である。
- ・ワークシートなどを複数の指導者で確認できるので、時間の短縮となる。
- ・生徒のつまずきの発見や対応が容易で、その時間や以後の授業計画等の改善につながる。

(2) 課 題

- ・継続的かつ系統的な指導を考えていく必要がある。
- ・年間指導計画の中での取組みとして計画を立てる必要がある。
- ・T1・T2がさらに連携を深め、より綿密な立案と改善をしていく必要がある。
- ・他教科との連携を図り、T・Tを発展させていく。
- ・時間配分や役割分担について、あらかじめ念入りの協議が必要である。
- ・グループ別指導については、班の分け方の判断基準をどう決めるか熟考する必要がある。
- ・同一クラスでのグループ別指導となるため、机の配置方法等、工夫が必要である。
- ・普段の授業やT・Tをはじめとする、様々な授業形態をどう取り入れるかを考えていく必要がある。
- ・日本人同士のT・Tとともに、ALTとのT・Tを充実させていく必要がある。
- ・グループ別指導においても理解が不十分な生徒については、放課後を利用した個別指導等を行うなど、補充的な指導を行っていく必要がある。
- ・学習の到達度の高まりとともに、学力の定着を図るための工夫が必要である。

(3) 総 括

- ・生徒のアンケート調査によれば、T・Tや少人数指導は、理解度や満足度が高まるように思われる。今後も生徒の個人内評価・相互評価・アンケート調査等を実施し、生徒の興味・関心や理解度を確認しながら、授業の改善が大切である。
- ・生徒の中には、ペアワーク、発表、グループ活動など、参加度の高い授業形態を好む者も多く、一斉授業から脱却した、様々な授業形態を創意工夫して実施していく必要がある。
- ・T・Tやグループ別指導は、導入だけでなく、まとめとして、リーディング、スピーキング、インタビュー指導においても効果的である。
- ・ALTと2人の日本人教師による複数指導など、拡充の方向も考えられる。
- ・生徒が積極的に授業に参加し、能力を最大限に引き出していくための手だてを今後も考えていく必要がある。

4 参考文献

高等学校学習指導要領 文部省（平成11年3月）

高等学校学習指導要領解説 外国編 文部省（平成11月12月）

中学校英語科 少人数指導の効果的展開プラン（明治図書）